
ディケイド&スマブラ！超スピンオフ

ハルル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ディケイド&スマブラ！超スピンオフ

【Nコード】

N0123L

【作者名】

ハルル

【あらすじ】

【仮面ライダーディケイド オールライダー対大ショッカー 超スピンオフ】のパロディを、スマブラとの共同で行う超企画！笑いあり、涙ありの（？）展開を見逃すな！

なお、世界観は【仮面ライダーディケイド〜スマブラの世界〜】に準じております。

File 1【ああ無情！人気者になりたい男の悲劇】

ルイージ「はああ……」

ディケイド「どうした、この世の全てを背負ったような顔しやがって」

ルイージ「いえ、実は僕……世界的に有名な兄がいるんです」

ディケイド「成程？」

ルイージ「ですが……弟の僕はいつも地味だとか、空気とか、影が薄いとかわわれ……更にはスマブラの切札でもネガティブキャラが確定されてしまつて。ああ……僕も一度でいいから、人気者になつてみたい」

ディケイド「大体分かった。——いい友達紹介するぞ？なんて言つたつてそいつは……」

シンジ「……カードやーつかーさーくーんー？」 ↑カードデッキ装備

ディケイド「……よし！そんな時はキバに変身だ」

ワタル「——なんでキバッ！？電王ですよね、一番人気のあるライダーって！」

ディケイド「しょうがないだろ、まだモモタロスの馬鹿がいらないんだ」

タクミ「……僕とアスム君は？」

ディケイド「さて、ネガティブ王子！早速変身だ」

タクミ「無視しないでくださいよ！？」

Lesson 1 キバツトは高く掲げろ！

ディケイド「キバへの変身は比較的簡単だ。噛まれるだけだしな」
ルイージ「ひええええ！？噛まれるゝ！？」

「ワタル」でもそこまで痛くは……。ええ、土さん風に言うなら「ちょっと突き刺さるぞ」程度の」

「レイジ
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
ひい
！」

「ディケイド……おいアスム、あいつどS覚醒してるぞ」

アスム「僕の管轄じゃないです、ユウスケさんです」

ワタル「うふふふふふ」

ルイージ「ひええええええええ！」

ディケイド「とにかく、最初キバットは高く掲げ…その後、ガブツ
 といけば完了だ」

ワタル「たまーに、噛まれただけで死ぬ人もいますがね？」

ルイージ「嫌あああゝ!!！」

Lesson 2 主たる者の心得

ワタル「さて、『冗談8割はここまでにして』」

ルイージ「Σ8割!？」

ワタル「……ルイーダさん、キバの変身に必要なのは何だか分かりますか？」

ルイージ「え、えっと……」

ディケイド「キバはファンガイアの王。つまり、王様は堂々としていなければならない」

ワタル「胸を張って、自分に自信を持つんです！それができなければ、あなたは永遠に今のネガキャラのままです！！」

ルイージ「ガン！」

ディケイド「ワタルの毒舌に負けるな！耐えろ、そして…立ち上がるんだ！！」

アスム「ワタルの本気のドSはこんなもんじゃないですよ！本気を出せば、言葉の一発でクウガとブレイドを一気に灰人にできます！！」

タクミ（それもどうかと…）

Lesson 3 バイオリンを愛せ！

ディケイド「ここで、特別講師である紅渡氏に来てもらった」

アスム（リイマジとオリジが邂逅してるんですが、いいんですかね…）

紅渡「ルイージさん、自分を変えたいというあなたの思いは伝わりました。ですが、……キバといえばバイオリン！バイオリンを愛せなくては、キバである資格はありません！！」

ルイージ「ガガーン！」

タクミ「紅さんもワタル君も、なんでキバのライダーは毒舌ばかり？」

ディケイド「知るか。とにかく、バイオリンを愛せ！」

ルイージ「と言っても、弾いた事なんて…それに、ヘタクソだし」

紅渡「ヘタクソでもいい！情けなくたって、ヘタレで、影薄で個性がなくて、暗い音楽でもいい！自分だけの音楽を奏で、そして、自分だけの音楽を愛する……それが大事なんです！！」

ワタル「そうです！——自己中でも、フリーターでも、ミカンでも、ホモでも、ヤンデレでも、バカでも、草食系でも、臆病でも、カズマを超えるスーパークライマックスバカでも、シスコンでも、天然でも、滑舌悪くても、連絡ミスを多発させる言葉足らずでも！ライダーになれるんですから！！」

ルイージ「は、はい！」

デイケイド「……何気に、オリジキバはルイージに対して酷いこと
言っていないか？」

アスム「ワタル、——シンジさんがカードデッキ持ってます、む
しろ今手にリンクさんのマスターソード持って振り回してます、
…謝ったほうがいいです」

ワタル「だが僕は謝らない！」

カズマ「……いや、謝れよっ！！」

デイケイド「さて、実戦だ」

ルイージ「は、はい！」

リイマジキバット「くっそー、ジャンケンで負けて俺がやるハメに
なったぜ…」

オリジキバット「頑張れよー」

タクミ（どうやってジャンケンを…？）

ルイージ「へ、変身！」

リイマジキバット「ガブッ！！」

~~~~~

「キバ「や、やりました！変身できました！！」

「ディケイド「そうか、良かったな」

「キバ「これで僕も、人気者に！」

シンジ「でもキバの平均視聴率って、6・2で結構下じゃなかったっけ？」

「キバ「…………orz」

「ディケイド「来たか、悪魔！」

シンジ「本物の悪魔に言われたくないよ！」

「ワタル「あなたはそれを言える立場じゃありません」

「アスム「何でトドメ刺してるんですか！」

「シヨウイチ「興行収入もアレだったしな…………」

「アスム「それはあれ、あれですよ、龍騎が異常なんです！」

「ワタル「ああああ、でも興行収入トップと最高視聴率保持者に言われると士さんに言われるより……！」

カズマ「——っていうか、電王にこれ以上金賭けるよりもディケイドの完結編をちゃんとしてくれよとか、むしろグダグダ電王続けるのはそれなりにハッピーエンドだった電王に対する冒涇だとか、ディケイド本編でもリイマジのリョウタロウでも何でもいいから出せよとか、電王これ以上引っ張らないで他に力入れてもうスタツフさん休ませてあげようとか、電王商法乙とか、デネブのソフビぐらいもつと早めに出しておけよ今更になって出るなんてデネブ可哀相じゃねえかとか、言いたいことはたくさんあるけど、俺個人とし

ては

……東映未練たらしい！！……だな」

シヨウイチ「カズマ、……酒奢るぞ」

シンジ「……枝豆奢るけど」

ワタル「……ソウジさんの実家で、何か食べましょうか」

アスム「いい空豆、知ってますが」

タクミ「……カラオケの予約入れておきましょうか」

ユウスケ「この際だ、皆で愚痴るか！」

カズマ「ああ！飲んで食ってシヨウイチさん一発殴って歌って騒ぐぞー！」

シヨウイチ「Σ俺を殴る気かああ！？」

ディケイド「おーいお前ら、忘年会モード入ってないか？」

ソウジ「……いいかくし芸があるんだが」

ディケイド「やらなくていい！乗るな！！そして……お前はいつまで落ち込んでるんだ、ワタルですら落ち込んでないのに！」

「キバ」……」

紅渡「……視聴率が悪いのは僕じゃない、手前の電王のせいだ……」  
ディケイド「Σって、お前もかい！」

File 1【ああ無情！人気者になりたい男の悲劇】（後書き）

次回予告

プリン「地上では鈍重と言われた私、だけど、……今こそ大輪の花を咲かせるとき！」

ショウイチ「そして花は枯れる運命」

ソウジ「おいおい」

ディケイド「大体分かった。そんな時は、……オルタナティブ系に変身だ！」

リンク「カブトじゃないんだ……」

リンク「——変身！」

ショウイチ「お前の適応力は何処まであるんだああ！？」

NEXT・・・File 2【スペックでの速さは響鬼が主役トッ  
プ】

## File 2【スペックでの速さは響鬼が主役トップ】

プリン「——はああ」

リンク「あ、プリンだ」

ソウジ「おやつか？」

ショウイチ「違う、明らかに違う」

リンク「プリン、どうしたんだ？」

プリン「リンクさん。……実は、また試合に負けて。しかも4位」  
リンク「誰にだってそんな日はあるさ」

プリン「でも！相手がソニックにキャプテン・ファルコン、フォックス！！スピード系ばかりだったの！！」

ショウイチ「——そりゃあキツイ。変身できない状態で、ヤンデレスイッチの入ったシンジとカズマ、激情態ディケイドとなった士と戦うようなものだ」

ソウジ「タイムで止められ、ストライクベントで焼かれ、終いにはデイメンションキックか」

ディケイド「ショウイチ…今すぐにでも、ファイズフォンで呼ぶぞ（辰巳的な意味で）？」

ショウイチ「それだけは嫌だ」

プリン「でも、私…何とかしてあの三人、特にソニックを見返したい！」

ソウジ「おお？」

プリン「地上では鈍重と言われた私、だけど、……今こそ大輪の花

を咲かせるとき！」

シヨウイチ「そして花は枯れる運命」

ソウジ「おいおい」

ディケイド「大体分かった。そんな時は、……オルタナティブ系に変身だ！」

リンク「カブトじゃないんだ……」

ディケイド「カブトは、カブトゼクターの所有者として認められないといけない面倒システムがあるからな」

シヨウイチ「ファイズは？」

ソウジ「ブレイドのマッハもありだよな」

ディケイド「見も蓋もないことを言っな」

~~~~~

Lesson 1・肘のスナップ&前腕の動きが重要！

ディケイド「さてと。とりあえず龍騎の世界とネガの世界から……オルタナティブとオルタナティブ・ゼロのデッキを、各世界一つずつふんだくってきた」

シヨウイチ「お前はディエンドか!？」

ディケイド「海東と一緒にするな。とにかく、お前らにもやってもらうぞ」

ソウジ「まあ、人数は丁度4人だしな……」

リンク「俺とシヨウイチさんがゼロか」

ディケイド「オルタナティブ・ゼロの例題を言うが……この変身は、デッキを投げる際に肘のスナップと前腕の動きが重要視される」

ソウジ「……投げるのか？」

ディケイド「ああ」

シヨウイチ「デッキをか？」

ディケイド「ああ」

プリン「……無理じゃない？」

ディケイド「——とにかくやってみる、編集で何とかなるなる」

シヨウイチ「いいいいいい！」

プリン「スナップが大事って言うけど、難しい……」

リンク「……」

シヨウイチ「おい、あいつ既に10m近く高く投げつつキャッチ制度確かめてるぞ」

ソウジ「なんか、リンクなら普通にタイガになれる気がしてきたな」
シヨウイチ「これ、オルタナだからな？」

Lesson 2・右腕はしっかり伸ばした状態で！

ディケイド「次だ。——オルタナティブ・ゼロは、デッキを投げた後、右足を一步前に踏み出して右肩を僅か前方に向けるような姿

勢で『変身』と叫ぶ」

プリン「ええつと、こ、こう！？……きゃあ！」

シヨウイチ「物理学的に無理だろ！」

ソウジ「こうか？」

デイケイド「違う！右腕が曲がつてるぞ」

シンジ「ここで解説。オルタナティブ・ゼロの変身は落下してきたカードデッキを、右腕を“伸ばした”状態でキャッチして、ベルトにベントインするんだ」

シヨウイチ「やっぱり無理だろおお！」

ソウジ「人間が出来るか？これ」

リンク「試してみる」

シヨウイチ「は？」

リンク「…」

ビュッ！↑デッキ投げた

リンク「変身！」

パシッ、

ガシャッ！

——キュイイイン！

「オルタ・ゼロ」できた」

シヨウイチ「……音声だから分からないが、お前……何者」
「オルタ・ゼロ」さあ、プリンもレッツトライ！」
プリン「無理無理無理！まず、私じゃ手の長さが違うから……！」
シヨウイチ（そこで諦められても……）

ディケイド「お前なあ、リーチ云々の話なんてするな。つか、オル
タナティブ系は普通【再現不可能】なのに……普通にやりやがったり
ンクが悪い」

ソウジ「……じゃあ何でやらせたっ！？」

ディケイド「なんとなく」

ソウジ「……シンジ、ファイナルベント。ゴー」

シンジ「イエッサー」

ディケイド「すいませんでした」

~~~~~

シンジ「実は、タイガのカードデッキもあるんだけど……」

シヨウイチ「Σあったのか！？」

ディケイド「これ、他と違って右でデッキ持ってポーズ決めて……だ  
から、結構難易度あるんだよな」

リンク「俺、左利きだからできるかも」

ソウジ「——どうする、俺は『できる』に100円」

シヨウイチ「『できる』に200円」

デイケイド「『できる』にユウスケの財布から500円」

鳴滝「では私は、『不可能』に1000円だ！」

デイケイド「鳴滝！」

鳴滝「仮面ライダーの崇高なる変身を、仮面ライダーとは関係のない世界の住人がやれるはずもない！」

シヨウイチ「いや、あいつもオルタナティブ・ゼロを……」

シンジ「なるだけさん」

鳴滝「鳴滝だ！」

シンジ「どうでもいい。——リンク君が1mmでもポーズを間違えたら、俺が酒を奢ります。ですが、寸分の狂いなく完璧だったらあなたがここにいる全員に、酒或いはジュースを奢ってください」

鳴滝「フツ、いいだろう！」

デイケイド「おーい、いいのか？」

シンジ「大丈夫。だって……」

オルタナ系のデッキは裁判所にも一応あったけど、変身ポーズの難しさから、選ばれた人がわざわざ裁判権を放棄して返しに来るほどなんだ。

——それを出来る人間が、いや正確に言うとフィギュアなんだろうけど、とにかく彼がタイガ程度の変身ポーズができないと？」

デイケイド「それはありえない……ってか、そんな理由でオルタナ系が出回ってないのか」

シヨウイチ「さて、何の酒にするか」

ソウジ「あ、これなんかどうだ？」

プリン「約二名、既に飲むお酒を決めてるし！」

フィリップ「ちなみに、タイガの変身は

- ・右手でデッキをかざす

- ・直後に高速で両腕を前面で交差、左手の甲を前に向けた状態で右斜め上方向に持って行き、同時に右手をVバックルの左側に添える（当然、この時点でカードデッキは正位置をキープしている）。

- ・次に、左手をくると反転させ、「変身！」と叫んだ後、いつのまにかひっくり返されているカードデッキを、“姿勢を維持したまま”スロットインさせる。

- ・ちなみに、左手を伸ばした時点で、身体全体も右方向に少し傾ける必要がある。

- ・スロットイン後、伸ばしたままだった左手を再び返しながらぐつと握り、左腕の角度を維持しながら、腰の方向にゆっくり引く。

- ・これを、「スロットインを成功させる」という条件を満たした上で再現させるには、凄まじい練習が必要になる。

……だから、基本13ライダーの中では一番難易度が高いんだ」

〃  
〃  
〃

リンク「……」↑高速交差＋右手の甲を前に向ける

リンク「——変身！」↑姿勢を保ったままベントイン

キュピイイーン！

「タイガ「ふう」

ショウイチ「お前の適応力は何処まであるんだああ！？」

ディケイド「さて、ここでは特別ゲストに…東條悟さんをお呼びします！」

プリン「東條さん、今の変身は！？」

東條「——英雄の僕から見ても、寸分の狂いもない変身かな。異世界の人にしては、まあまあ出来るほうだね」

ソウジ「元々リンクが左利き、って言うのもアドバンテージだからな…」

シンジ「さて、ナルタコス」約束覚えてるよな？」

鳴滝「何の事かな？わ、私は別に」

シンジ「——あんたの実験…鎌田をこっちの世界に連れて来ていたこと…それを紅渡以下“守護者ライダー”達に知られたら……どうなるかなあ？」

ショウイチ（あ、あいつ龍騎じゃなくてリュウガでいいんじゃない…）

ソウジ（俺にはカイザに見えた）

ディケイド（バカ、あれはグレイブかダークキバ、それかレンゲル

だ)

シンジ「——少なからず、龍騎の世界にブレイドの世界のもの持つて来るのは、世界の破壊に繋がるんじゃないかなああ…例えば、クウガの世界でホッパ―兄弟出したり、ファイズの世界でリュウガを出したりしていたようにだけど」

鳴滝「それは、その、ディケイドを倒すために必要な」

シンジ「散々士を『破壊者』って言うておきながら、自分が破壊に繋がる行動をとるのはどうかと思うんだけど？」

鳴滝「……し、しかし」

シンジ「——あんたの部屋のプリ×ユアのフィギュア全部、売り飛ばすぞ」

鳴滝「……さ、さて諸君！飲みに行こうか！！」

ショウソウ「強っ！！」

ディケイド「シンジだからな…」

シンジ「よし、いい返事が聞こえたところで。——そろそろ出てきていいよー」

カービィ「うわぁーい、ごちそう〜」

ヨッシー「楽しみですう」

デデデ「ぞい！」

クッパ「グハハ！丁度腹が減っていたところなのだ！！」

ドンキー「ウツホー！」

ディディー「キキー！」

ピーチ「ねえねえ、いいバイキングがあるのよ。そこに行かない？私、あそこのケーキ制覇してみたかったのよね！」

スネーク「酒はあるみたいだな。別料金だが」

ワタル「ゴチになります」

アスム「お願いします」

カズマ「うえい！」

タクミ「あはは……… すいません」

鳴滝「ちょ、ちょっと待てー!!?」

シンジ「え？俺、『ここにいる全員に』って言いませんでした?」

鳴滝「だからって、今まで隠れていた奴らの分まで」

カズマ「——あんたのプリキ×アのDVD、全作全巻売るぞ」

シンジ「えーっと、あ、城戸さん？丁度いいネタがあるんですけど……」

鳴滝「……払わせて下さいお願いします」↑土下座

カズマ「いえーい」

シンジ「イエーイ」

ソウショウ（黒っ！）

カズマ「言質は既に取ってあるし、鎌田事件の件はもうUSBの中に入れたし、これでいつでも納豆巻き脅せるぜ?土」

シンジ「後、プ×キュアまみれの部屋の写真とかもう撮ってあるから。ついでに1/1キュアブロッサム抱き枕も人質」

ソウジ「……龍騎の世界とブレイドの世界に、余計な火種（＝鎌田）を持ち込むから……」

ショウイチ「あのヤンデレと持ち逃げ、結託したら怖いからな?」

ディケイド「一人、マジでメディア関係だもんな」

プリン「っていうか、……私の相談の解決はどうなったの?」

## File 2【スペックでの速さは響鬼が主役トップ】（後書き）

### 次回予告

ピット「そ〜らを自由に〜とーびたーいなー」

ファルコ「はい、ファイズブラスタ〜」

ディケイド「大体分かった。そんな時は、仮面ライダーブレイドに変身だ……ってなワケでカズマ、よこせ」

カズマ「よーこーすーかー！」

タクミ「ところでキバって、えっと、」

ソウジ「飛べる、のか？」

ワタル「飛翔態ってのがありますが、あれは正直……」

NEXT・・・File 3【ハードタービュラー呼ぼつか？by  
翔太郎】

### File 3【ハードタービュラー呼ぼうか？by・翔太郎】

File 3【ハードタービュラー呼ぼうか？by・翔太郎】

ピット「そらを自由にーとーびたーいなー」

ファルコ「はい、ファイズブラスタ」

ワタル「……何なんですか、あれ」

リンク「えっと、簡潔に説明するけど…飛びたいけれど、自分の翼で自由に飛べない人達」

ソウジ「ああ……」

タクミ「陳情、だね」↑薔薇取り出しつつ

リンク「…タクミ？」

タクミ「あ、あれ？何で僕…薔薇なんて……？」

ディケイド「大体分かった。そんな時は、仮面ライダーブレイドに変身だ……ってなワケでカズマ、よこせ」

カズマ「よーこーすーかー！」

ディケイド「わ、た、せ！」

カズマ「さーせーるーかー！第一、キバもカブトもファイズもいて何でブレイド！？」

ディケイド「それは、ほら、……最終フォーム用のアイテムないから?」

カズマ「ふざけるなー!!」

リンク「ああ、飛べるんだ…皆」

翔太郎「ついでに、俺達ダブルもハードタービュラー使えば飛べるぜ」

フィリップ「むしろ、これが一番手軽な方法じゃ…」

リンク「でも、本編でタービュラーとスプラッシャーは…」

翔太郎「——リボルギャリー、ないからな」

タクミ「ところでキバって、えっと、」

ソウジ「飛べる、のか?」

ワタル「飛翔態ってのがありますが、あれは正直……」

フィリップ「キャッスルドランは?」

ワタル「…スマブラの世界には来れません」

~~~~~

Lesson1・プレイバックルを着けられない者は、プレイバッ

クルに泣く

ディケイド「じゃあ、カズマと一真があるから…一応模範演技で、フィリップとリンクにやってもらうか」

フィリップ「任せてくれ、既に検索済みだ」

リンク「頑張ってみる」

カズマ「…剣崎さんからも取ってきたのか」

ディケイド「ああ。——DCD本編のあいつ、【MISSING ACEの世界】の剣崎一真なんだな…普通の剣崎、普通にいい奴だった！」

カズマ「……うん、結構いい人」

ディケイド「とりあえず、まずはAのカードをプレイバックルに入れて…ベルト部分を出現させるんだ」

フィリップ「ここまでは簡単だね」

ファルコ「だよな」

ディケイド「しかし、ここで注意点がある！……他はともかく、剣崎の細さは異常だ」

ピット「あー、うん、……身長が高いから尚更……」

ディケイド「こういう変身ベルトは、使用者によってベルトの長さを調節してくれる優しい設計なんだが…それでも限界はあるだろう。剣崎なら、その許容範囲も…普通より低い筈だ」

カズマ「なんでそうなるんだよ……」

ファルコ「俺もピットも、クリアしてるよな」

ピット「ええ、一応」

ディケイド「まあお前はクリアだな。だが…あのクツパやらワリオやは、アウトだ。ついでにガノンも、若干ギリギリと言いつつもアウトだ」

リンク「だよな」
ファルコ「奥が深いな」

Lesson 2・右手首は素早く！綺麗に！！

デイケイド「ちなみに余談だが、リイマジで変身ポーズ綺麗なのつてショウイチだよな」

カズマ「……俺が下手だと言いたいのか」

デイケイド「いや？お前も結構いいほうだ」

カズマ「ノノノ」

デイケイド「まあそれはさておき、ブレイドの変身も手の動きが重要だ！決してアギトとクウガだけに気合いを入れるな、泣きを見るぞー！！」

フィリップ「まずは左腕を、腰の位置に置く」

リンク「で、右の手の平は自分のほうに向けた状態で…左斜め前方に移動」

翔太郎「『この時、両手の指は親指と人差し指を立てた状態にすることがポイント』らしい」↑カンペ読み

デイケイド「とりあえず、手の動きだけでも勉強してみる」

ファルコ「うおっ、く…難しいな」

ピット「指攣りそう…」

翔太郎（何だか人事に思えないし、一応やってみるか…）

リンク「翔太郎さんも参加しちゃったよ…」

フィリップ「好きにしたらいいよ。——どうせ…彼は……ふふふ」

フィリップ「そして、右手首を180度回転させながら…」

フィリン「変身!」

リンク「ちなみにこの時のコツは、右手のスナップを生かして、綺麗に手首を回す事だ」

フィリップ「そして、左腕を前に出して右手でバックルのレバーを引く。そうしたらオリハルコンエレメントが出現するから……」

<Turn Up>

フィリップ「そのオリハルコンエレメントをくぐれば、変身完了さ」
リンク「ちなみに、空を飛ぶにはQとJのカードを入れればいいんだ」

ディケイド「さて、じゃあ実戦だ」

~~~~~

ファルコ「変身!」

ピット「変ッ、身!!」

翔太郎「——おい、あの天使照井みたいな言いかたしたぞ」

フィリップ「まあ、津上翔一アギトもそうだし…よく考えれば昔の仮面ライダーも一部はその発音だったしね」

翔太郎「…あんなに若いのに、昭和の匂いが漂うぜ…」  
フィリップ「天使って結構長生きらしいからね」

Fブレイド「おお、できたぜ！」

Pブレイド「そして、確かQとJを入れて……」

<Absorb Queen Fusion Jack>

Pブレイド・ジャックフォーム「うわあああ！凄いい、何か変わった……！」

Fブレイド「お、いいなそれ！こっちも……」

<Absorb Queen Evolution King>

カズマ「おい！それって確か」

Fブレイド・キングフォーム「……あれ？」

全「なんか別なのになってるー！？」

ディケイド「だが……ん？剣崎のに比べると、なんだか…弱そうな」  
フィリップ「ああ、あの姿は剣崎一真の融合係数が以上に高い事から成るフォームであって、ファルコだったかな？彼のなっているキングフォームが本来のキングフォームなんだ」

リンク「ちなみに、公式でも“最強フォーム”って呼ばれることのほうが多いみたいだね」

ディケイド「なんだ、失敗作ってワケじゃないのか」

FブレイドKF「ゴルアアア！？」

翔太郎「なあ、……カズマって確か劇場版でキングフォームにならなかったか？」

カズマ「あ、一応」

翔太郎「……お前の融合係数って、どうなんだ？」

カズマ「うえ？」

フィリップ「融合係数は、ブレイドが変身する際にかなり重要な意

味を持つもので…低かったりすると弱体化し、最悪の場合精神崩壊まで……」

カズマ「あーあー聞こえない、聞こえない」

翔太郎「高すぎても危険なんだよな」

フィリップ「変身し続けると、アンデッドになる恐れだって」

カズマ「あああああ！聞こえない聞こえない聞こえない聞こえない！！きーこーえーなーいっ！！！」

ファルコ「……ブレイド危険じゃね？」

ピット「僕達がアンデッドになったらどうするんですか！？」

ディケイド「一回だったら、害はないだろ」

リンク「翔太郎さん達が言ってるのは、——カズマがもし融合係数が低かったり異常に高かったりしても、変身し続けるとまずいんじゃないかって……」

ディケイド「大丈夫だろ。……ディケブラ本編で、シンジに耐えるんだぞ？」

翔太郎「それが比較最上級なのはどうなんだ」

ファルコ「——つか、俺飛んでないし！！」

File 3【ハードタービュラー呼ばつか？by・翔太郎】（後書き）

次回予告

マルス「もう！アイクなんか大嫌い！！」

アイク「元々お前が好きなわけじゃない」

デイケイド「よし、そんな時は……仮面ライダーダブルに変身だ」

翔太郎「……おいいっ！」

リンク「行くよ、翔太郎さん」

翔太郎「って、俺が右<sup>そっち</sup>かよ！」

フィリップ「……リンクの適応力に嫉妬するよ」

シンジ「俺が言うのもなんだけど、…リンク君は異常だから」

NEXT・・・File 4【ほら、リンクは左利きだから…】

#### File 4【ほら、リンクは左利きだから…】

マルス「もう！アイクなんか大嫌い！！」

アイク「元々お前が好きなわけじゃない」

カズマ「…なんだあの痴話ゲンカ」

マリオ「いつもああなんだよ。ケンカがなかなか収まらなくて、皆迷惑してるんだ」

アスム「暫くすれば、仲直りするのでは…？」

マリオ「甘い。あいつらの痴話ゲンカはな…」

マルス「このーっ！ドルフィンスラッシュー！」

アイク「おっと！」

通りすがりのドンキー「ぎゃー！？」

アイク「仕返した。天・空！」

マルス「効かないよ！」

通りすがりのデュー「ドンk……ぎゃっふー！？」

仲裁に来たフォックス「おい、いい加減に…」

アイク「叩き割り！」

マルス「甘いね！カウンタアアアー！！」

フォックス「あぎゃー！？」

マリオ「…あんな感じで、次々と被害者が出るんだ」

カズマ「うつわぁ…最悪だ」

デイケイド「……まだカズマとシンジのほうがましだな……。お前ら、毎回金銭感覚の違いゆえのケンカをして、最終的には5分ぐらい互いに話さないで、その後普通に仲直りしてるよな」

翔太郎「…むやみやたらに変身してケンカしない辺りが、救いあるよな」

アスム「でもあれって、一方的にカズマさんが悪いんじゃない？」

デイケイド「ああ。一例としては

『だから！あつちの店のほうが。。。は2円近く安いんだって！！』

『どっちでも一緒だろ！』

『一緒じゃない！第一、この世界じゃ明らかに自分達の世界の銀行口座開けないんだから…今ある金で何とかやりくりしないと！！』

『だからって、いちいち行った店の値段メモした挙句…一番安いところまで戻るのもどうかと……』

『大体カズマはお金に無頓着すぎる！ここでの物価は、日本円為替だと意外と高いんだから！！』

『お前は俺のお母さんかよ！』

……ああ、明らかにカズマのほうに非がありそうで、その傍らお前の財布を握らないシンジの甘さも原因だ」

カズマ「チーズ何処で見てたんだよ……」

デイケイド「しかし、まあ、解決法は簡単だ」

翔太郎「え？」

デイケイド「迷える子羊ならぬ、荒れ狂うフィギュア達よ」  
マルス「…何？」

アイク「邪魔するな」

デイケイド「とりあえず、何が原因でケンカしているんだ？」

マルス「それは、アイクが毎回毎回『肉』って煩くて…」

アイク「俺が好きなものにケチをつけるな」

マルス「だからってねえ！」

アイク「だから何なんだ！？」

デイケイド「よし、そんな時は……仮面ライダーダブルに変身だ」

翔太郎「……おいしいっ！」

フィリップ「それは根本的な解決になるのかい？」

アスム「むしろ、ダブルにしたいだけですよね？」

デイケイド「安心しろ。毎日店の品物の値段で騒ぐ奴らがダブルになれるんだ、あいつらでもなれる」

翔太郎「そんな問題か… ってそれ以前に、それ軽くネタバレだろーっ！？（この地点で本編は22話）」

}}}

Lesson1・運命のPartnerを見つけ出せ！

デイケイド「まあ、基本中の基本だな」

フィリップ「幸いな事に、ここ（＝ディケブラ）の設定上、ドライバーをセットした人間と信頼しあえるもの同士の間での変身が可能みたいだ」

リンク「だから、ここでのダブルドライバーは…翔太郎さん以外の人がドライバーをつけたら、フィリップ君のほうじゃなくて、その人が信頼できる人にもう片方が出るって奴」

翔太郎「まあ、……正直細かいことは気にしないで…俺と亜樹子のケースと似たようなもの、とか思っておいてくれ」

マルス「……」

アイク「…」

ディケイド「おいどうした？まさか、信頼できる友達がいなかったじゃないよなー？」

マリオ「軽くイジメだな、お前」

ディケイド「まあ、とりあえずドライバーつけてみる」

シンジ（突っ込んだほうがいいんだろうか、——某テイ。ズの好感度システムみたいなものなのかって…）

マルス「じゃあ、僕が…」

ディケイド「お、やってみろ」

マルス「…」↑ドライバー装着

……

カズマ「何も起きないな」

シンジ「ピクリもしないな」

アスム「不良品ですか？」

翔太郎「Σ小さい奴が一番ヒデエ！」

フィリップ「ああ、きつとここでの性能上…互いの仲にヒビが入っ

たままだから、この世界でダブルになる条件を満たしていないってことじゃないかな」

アスム「じゃあ不良品ですね」

翔太郎「……お前さ、明らかにワタルの毒舌遷ってるだろ」

Lesson 2・息を合わせろ！同じ風を感じるんだ！！

翔太郎「ダブルだけに風、ってか」

カズマ「……ぶっちゃけ、風を感じなくてもなれるっていうか」

シンジ「…万能の適応力を持つハイリア人の前では無意味、っていうか」

リンク「え？」

フィリップ「それはさておき、じゃあまずは…息を揃えるために、

『エモーショナルバルーン』というものをやろっ」

カズマ「完璧テイル。じゃないか!？」

フィリップ「気にしないほうが勝ちだ。——さあ、相手の感情を読み…同じタイミングで、感情を体で表すんだ!」

マルス「♪」

アイク「…」

マルス「(、ー、#)」

アイク「…」

マルス「(<—>)」

アイク「…」

マルス「……無表情ばっかじゃん！合わせる気あるの!？」  
アイク「お前が俺に合わせろ」

マルス「何ーっ!？」

カズマ「お、落ち着けて！」

シンジ「そうだよ、あそこの二人を見習いなよ！」

ショウイチ「…」

ソウジ「…」

ショウイチ「Σ(。D)」

ソウジ「Σ(。D)」

ショウイチ「(T|T)」

ソウジ「(T|T)」

ショウイチ「♪」

ソウジ「♪」

リンク「♪」

シンジ「……な!？」

カズマ「三十路のオッサン2人が、あそこまでできるんだぞ!？」

翔太郎「いや、待て、……リンク混ざってたぞ」

Lesson 3・2人で一人!変身・決めゼリフ時の声は揃えろ

翔太郎「……もう、あいつら無理じゃないか？」

フィリップ「僕も、これ以上は無駄だと判断だと検索結果が出た」

ディケイド「そう言うなって。とりあえず、適応力が高すぎるリンク…やって見る」

リンク「あ、うん」

リンク「行くよ、翔太郎さん」↑ジョーカーメモリ

翔太郎「つて、俺が右かよ！」↑泣く泣くサイクロン

リンク・翔太郎「変身！」

<サイクロン！ジョーカー！！！>

パララ〜パララ〜パッパッパ！↑効果音

ダブルC「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

全「おお〜…」

アスム「かなり凄いですね…！」

マリオ「……リンクってウチのところの人間だよな？」

デイクイド「だと思うが？」

翔太郎（変身解除）「——リンクなら、普通にフアングジョーカーにもなれるんじゃないか？」

フィリップ「そうかな…まあ、実験してみる価値はあるかもしれない」

フアングメモリ「キー」

リンク「……頼むよ、フィリップ君」↑フアングメモリ

フィリップ「ああ」↑ジョーカーメモリ

リンク・フィリップ「変身！」

<フアング！ジョーカー！！！>

ダブルF「『さあ、お前の罪を数えろ！』」

全「おおーっ！！」

翔太郎「……なんか、リンクならエクストリームも使えそうな気がする」

「サイド」…この世界にエクストリームが来れるとも思っのかい？」

翔太郎「いや、あれ、……ほらあそこ」

全「？」

~~~~~

エクストリームメモリ『ピョロロロー！』

「サイド『まさか……』」

Fサイド「いや、でも、流石にこればかりは……」

ディケイド「いや、面白い。——この際だ！リンク、お前一番信用できる人間は誰だ？」

Fサイド「えっ、と、……言っちゃ悪いけど……その、……タクミ」
タクミ「Σええーっ!？」

ディケイド「……いきなりの無茶振りだな」

Fサイド「いや、だって、——リイマジネーション並びにここにいる仮面ライダー全般としても、スマブラファイター含めるとしても、……タクミが一番まともかなって」

タクミ「……それって遠回しに、『個性が薄い』って言ってない……？」

ディケイド「安心しろ、ドッジボールの世界のシンジやソウジみたいに個性強すぎるのも考え物だ」

リンク「第一土、お前変身しっぱなしだし。お前選ぶと、“門矢士”だけに角が立つし（夏海さんとかユウスケとか海東とかカズマとか）」

(C J になる過程は省略)

エクストリームメモリ『ピヨロロー!』 ↑タクミの体回収

Cサイド(タクミ)『僕の体ーッ!?』

Jサイド(リンク)「あ、なんか光線っぽいもの出た」

エクストリームメモリ『ピヨロロロー!』 ↑ベルト部分に装着

Jサイド「よし、行くぞ!」

Cサイド『僕の…体……。もう!やけくそだあああ!』

C・J『変身!』

<エクストリーム!!!>

CJX『さあ…お前の罪を数えろ!』

フィリップ「……リンクの適応力に嫉妬するよ」

シンジ「俺が言うのもなんだけど、…リンク君は異常だから」

Cサイド『僕の体…大丈夫なのかな……』

Jサイド「一体化してるだけだし、大丈夫じゃない?」

デイクイド「後、何気にハイラルの勇者+ウルフオルフェノク+適合力異常レベル+ファイズ…っていう物凄い組み合わせだな」

マリオ「…知ってるか。リンクって奴は…トワイライトプリンセスだと、狼になるんだぜ…」

アスム「あ、だからタクミさん…」 ↑納得

ファルコ「つか、また解決してねーだろ!」

ピット「むしろ、——リンクさん、自分の手に馴染む装備だからって振り回さないで!タクミ君、タクミ君の身にもなってえええ!

!

File 4【ほら、リンクは左利きだから…】（後書き）

次回予告

鳴滝・マスター「R & F、ファッションチエック！」

マスター「ディケイドこと門矢士、その世界ごとでのファッションセンスに注目！」

鳴滝「おのれディケイド…このコーナーを支配するとは…！」

マスター「とりあえず、彼が着た服を他の方に着てもらって見ましよう！」

ピット「…っていつか、なんかまず響鬼とキバが…っ！…？」

ゼルダ「ピンクの道着の響鬼…斬新ですねっ！」

タクミ「むしろ、身長差の大きすぎるワタル君とアスム君にした理由はっ！…？」

NEXT・・・File 5【門矢士、9つの世界の軌跡…ワタルとアスムがご乱心…】

File 5【門矢士、9つの世界の軌跡〜ワタルとアスムがご乱心〜】

鳴滝・マスター「R & F、ファッションチェック！」

リンク「あの、マスター。【R & F】って一体…」

マスター「説明しよう！Rとは『Rider』、Fとは『Fighter』！そういうことだ」

ピット「根本的な解決じゃないですよね！？」

ゼルダ「というか、この人は一体…」

鳴滝「気をつける。奴は破壊者だ」
ディケイド

リンゼル（いきなり出ておいて何を言っているんだろう、この人…）

マスター「まあそんな事より、」

ピット「いいの！？」

マスター「ディケイドこと門矢士、その世界ごとのファッションセンスに注目！」

鳴滝「おのれディケイド…このコーナーを支配するとは！」

マスター「とりあえず、彼が着た服を他の方に着てもらって見ましよう！」

士「いいのか？最悪、ズボンの丈が合わない奴が出てくるぞ」

リンク「……俺にも喧嘩売ってるか、それ？」↑ゼルダより低い
<ジョーカー！>

ピット「うわっ、僕の腰にダブルドライバーが！？…っていうか、

何故か知らないけどサイクロンメモリが！」

リンク「行くぞピット、——変身……！」

ピット「わーわーわーわー！とにかくっ、……スタートオオオー！
！」

翔太郎「つか、衣装は裏方が既にした手直ししたらしいな」

フィリップ「こんな突拍子もない企画であれ、すぐにできる手際
よさ…興味深いね」

くくく

マスター「さて最初は、【夏海の世界】…まあ1話目のあそこです
ね！」

翔太郎「あーくそ、あのナンタコスっておっさんディケイドだから
って放棄しやがって…。まあいい」

マスター「ご苦勞様です」

翔太郎「ここでの土のファッションは、後から出てくる紅渡の白装
束と退避して、暗めの色合いだな」

フィリップ「黒のロングコートに、暗い紅色のタートルネック。首
から提げている、二眼レフトイカメラのマゼンタカラーが映えるね」
マスター「現在衣装を着てもらっているのは、光夏海さんです！」

夏海「お、男の人の格好なんて似合いませんよ…」

ピット「あ、でも可愛い可愛い」

ゼルダ「そうですね」

マスター「続きましては、【クウガの世界】での警官服！」

翔太郎「警官というより、巡査だな」

フィリップ「やはり服が暗い色合いだから、カメラの色がアクセントになっている」

マスター「そして話の途中で着替えたのか、黒のコートに、毛糸素材で出来た白と黒のタートルネック！」

翔太郎「全体的に、モノクロで仕上がっているな」

フィリップ「そうだね。ディケイドがマゼンタ・黒・白を基調としているから、比較的に落ち着いた印象に感じるよ」

マスター「警官服は小野寺ユウスケさん、着替えはマリオさんに着ていただいております！」

ユウスケ「何だか、身が引き締まるって感じでいいなあ」

マリオ「おー、結構いいじゃないか」

士「…待て、明らかにチヨイスミスがあるぞ」

リンク「…それは俺も感じていた」

マリオ「なんだって！？……やっぱりユウスケ、お前背伸びして着るもんじゃないってそれ」

ユウスケ「えええ！？」

士「いや、お前だ！」

マスター「さて、どんどん行きましょう！【キバの世界】では、バイオリニストとなった士」

翔太郎「ベージュのコート、それに……お？ディケイド柄のバイオリンケースか」

フィリップ「これは素晴らしい！彼なりのこだわりが見えるね」

マスター「実際こんなバイオリンケース持ってたら、悪目立ちしやすけどね」

翔太郎「…それはさておき、ついでに親衛隊の服も紹介しておくか」
フィリップ「基本的にカラーは灰色。飾らず…だがどこか高貴的な感じが、“キングの親衛隊”であることを感じさせる」

マスター「バイオリニスト服は…サムス、親衛隊服はワタル君にしてみもらいました！」

サムス「こういうのもなかなか…か」
キバ「……」

全「ええええええーっ！！！？」

士「おい、ちょ、おい！」

マスター「続きまして、【龍騎の世界】の弁護士服！」

翔太郎「間違っても、『べんごつかさ』と読むなよ！恥搔くからな！！」

フィリップ「（そう言っつてことは、呼んだのかい）……こちらも

黒で全体的に統一されている」

翔太郎「胸の弁護士バツジが、眩しいぜ」

マスター「夏海を弁護する立場から、殆ど着替えていないのでこちらにはシンジ君強制で」

シンジ「……選択権、ないんだ。でもまあいつか」

ピット「——あっちのほうが、弁護士に見える」

士「……」

リンク「言っちゃったよ……」

マスター「どんどん行きますよ！次は、【ブレイドの世界】」

翔太郎「ここでの士は厨房のチーフ。おっ、今度は白と赤がメインか」

フィリップ「今まで落ち着いた色が多かったからね。ああ、でも力ズマが青いからその差別化かな」

翔太郎「何にせよ、暗い色合い以外で青系の服を着る士が想像できないぜ……」

マスター「そして、マネージャー服は黒のスーツの白のシャツ、更に黒の蝶ネクタイ……と何処かの執事風」

翔太郎「外着も柔らかい色合いのピンクに、暗い灰色のコート！」

フィリップ「コック服の赤が派手な色彩だったせいか、色を抑えてきたね」

翔太郎「隣のカズマが白くて青いからだろうけどな」

マスター「それ言ったら……手前のシンジも責める結果になるぞ」

シンカズ「責められる筋合いは何処にもないし！？」

カズマ「はい、そんなわけでコック服は…ルイーダさん、ジャーマネ服はスネークさん、俺は最後の外着になりました」

ルイーダ「何だか、炎の料理人って感じだね…」

スネーク「シヨウタイムだ！」

カズマ「…何のだよっ!？」

士「——カズマがどんツツコミキャラ化してきている」

リンク「士…。ソウジさんシヨウイチさんシンジさんワタル君アスム君ユウスケタクミ大樹さんモモタロス士、……この中に挟まれれば誰だっツツコミだ」

ピット「むしろ、……いや、あの人完全にツツコミってワケでもないじゃ」

士「…まあ、俺がカズマへのツツコミだからな…」

マスター「今度は、昔なつかし学ラン!場所は【ファイズの世界】

!」

フィリップ「説明は不要だね」

翔太郎「つか、どこの中学生…」

フィリップ「外着は、中のシャツの色合いはブレイドの世界と変わらないが…上着にきているコートの色が、こちらは若干暗い」

マスター「学ランはガノンドロフ、外着はタクミ君の提供でお送りしました!」

ガノン「…なぜワシが…」

タクミ「いや、それ以前に、——【提供】ってなんですか!？」

士「良かった、タクミはツツコミ成分が濃い！」
リンク「濃いけど、…たまにズレてるよな」

マスター「今度は、【アギトの世界】と【電王の世界】を一気に紹介！」

翔太郎「アギトの世界では、士は郵便配達員。こちらは、暗い青の制服に白のラインが入っていて、アクセントになっているぜ」

フィリップ「ちなみにこの世界の警察服も、似たような色使いだね」
翔太郎「電王の世界での士のコスプレは、時の旅人風味だぜ」

フィリップ「茶色のトーンで構成されていて、色合いも落ち着いているしなにより温かみがある」

翔太郎「同系色だしな。色も目立たないから、カメラも映えるぜ」

マスター「郵便配達員の服はショウイチ、旅人衣装はモモタロスだー！」

ショウイチ「……俺はともかく、…」

モモタロス「——あっちいいいいー！」

士「なんであいつに着せた」

リンク「さあ」

マスター「ラストを飾るのは、【カブトの世界】と【響鬼の世界】！」

翔太郎「カブトの世界ではゼクトルーパーの制服。全体的に黒で構成されているから、カメラが嫌に目立つな」

フィリップ「他にも土は、カブトの世界では淡いピンクに黒のエプロン。首には服と同系色のタオルを巻いていたね」

翔太郎「響鬼の世界では、音撃道の師範服。……全体的にピンクだ」
フィリップ「…カメラが目立ちにくいパターンは初めてだね」

翔太郎「——ピンクの道着は師範の証、通りたてフレッシュ、キユアディケイド…ってか…?」

マスター「おでん屋（と書いてソウジの実家で着た服）の衣装はソウジ、道着は……アスムだー!!」

ソウジ「派手だなあ」↑隣を見て言っているわけではない

響鬼「……」

全「……」

シヨウイチ「陳情、だな」↑薔薇を取り出す

タクミ「シヨウイチさん…薔薇出てます」

シヨウイチ「…なぜ？」

~~~~~

マスター「さて、感想は？」

ピット「……っていつか、まず響鬼とキバがーっ!？」

ゼルダ「ピンクの道着の響鬼…斬新ですねっ!」

タクミ「むしろ、慎重さの大きすぎるワタル君とアスム君にした理由はっ!？」

リンク「いやそれ以前に、ちゃんと身長に合わせてやるんじゃ!？」

マスター「だって、親衛隊の服とピンクの道着だけ間に合わなかったんだもん♪」

ユウスケ「これ以上にないぐらい酷い理由だ!？」

キバ「正直、…辛いです」

響鬼「精神へし折れそうです」

鳴滝「おのれディケイド!お前のせいで、このコーナーは破壊されてしまった!!ディケイドオオオ!!!!」

カズマ「黙れ」

シンジ「煩い」

ショウイチ「失せろ」

ソウジ「バックホーム」

キバ「消えてください」

響鬼「永眠してください」

モモタロス「……あいつら黒い」

タクミ「うん、それは、僕も思っていた疑問」

ユウスケ「濃いよな…」

File 5【門矢士、9つの世界の軌跡〜ワタルとアスムがご乱心〜】（後書き）

次回予告

夏海「士君、大変なんです！」

夏海「ポケモントレーナー君、トレーナーの名称だけで名前らしきものがまったくないんです！」

ソウジ「まさに陳情…だな」

ユウスケ「Σ遂にソウジさんもー！」

士「大体分かった！俺達で、名前を決めてやる」

リマジ全「えええー！？」

モモタロス「おー、おもしれえ！」

NEXT・・・File 6【陳情！ポケモントレーナー（正式名称）の名前を決めよう】

File 6【陳情！ポケモントレーナー（正式名称）の名前を決めよう】

士「マジカルアーギト！アギトといたら超能力！！」

ユウスケ「超能力といたらエスパー！」

ワタル「エスパーといたらフーデイン！」

シンジ「フーデインといたらスプーン！」

カズマ「スプーンといたら食器！」

タクミ「食器といたら給食！」

シヨウイチ「給食といたらカレー！」

モモタロス「カ、カレーといたら辛い！？」

ソウジ「辛いといたら山葵？」

アスム「山葵といたら緑色！」

翔太郎「緑色といたらリンク！」

フィリップ「リンクといたらハイラル」

海東「ハイラルといたら古い！」

夏海「士君、大変なんです！」

士「ナツミカン。最初に言っておくが、歴代リンクは代々左利きが伝統だがWii用に発売された『ゼルダの伝説 トワイライトプリンセス』のリンクはユーザーが右利きであることを考慮して右利きになったが、GCで限定発売されたほうは左利きだ！」

ユウスケ「あ、そうなんだ！？へえへえへえへえへえへえ」

海東「へえ」

アスム「へえへえへえ」

シヨウイチ「へえへえへえへえへえ」

カズマ「はい、『１１へえ』！」

ワタル「Σどうしてそんな数年前の産物を!？」

夏海「違います! 知りたいのはそれじゃなくて…」

シンジ「……分かった! カズマのスリーサイズ!」

カズマ「うーん、そうだなー」

ユウスケ「誰も知らなくていい事だと思うっ!？」

夏海「はい!」

カズマ「そこでぶった切らないで!？」

夏海「…はい、海東さん! 自分の3つ前の人の名前をフルネームで!？」

海東「えっ、……少年君は名字は分からないけど『アスム』だよね」

夏海「土君! 自分の4つ後の人をフルネームで!」

土「作者のパソコンじゃ『けんたて』と打ったほうが楽に打てる剣<sup>けん</sup>  
だて  
立カズマ」

カズマ「裏事情過ぎる!」

夏海「ソウジさん! 自分の2つ前の人の3つ前の方の名前を言うて  
ください!」

ソウジ「時代が生んだヤンデレの神とも言つべき破壊の帝王・龍騎  
シンジ「…コラ」

夏海「皆さん、このように名前がちゃんとあるはずです!」

シンジ「って…ええええええ!?!」

土「夏海。——龍騎の世界での記憶がタイムベントでなかったこ  
とにされたとはいえ、それは残酷だ」

ユウスケ「シンジさん名前で呼ばれてないのに…」

夏海「でもそれは、誰だって一緒のはずなんです! ですが…」

全「ですが？」

夏海「ポケモントレーナー君、トレーナーの名称だけで名前らしきものがまったくないんです！」

士「なにになに…あ、本当だ。公式サイトですら『ポケモントレーナー』だ」

ソウジ「まさに陳情…だな」↑薔薇を出しながら

ユウスケ「Σ遂にソウジさんもー！」

夏海「ワケの分からない平面の方でさえ名前があるのに、酷いです！残酷すぎますー！！」

海東「まあ、確かに」

士「と言うか、シンジをスルーしたお前が言えるのかナツミカン」シンジ「いいよう…俺の立ち位置の地点で既に諦めてる。レンさんが…そう、レンさんが悪いんだ…レンさんがレンさんが」

カズマ「Σ呪うのやめえーいつ！！」

士「大体分かった！俺達で、名前を決めてやる」

リマジ全「えええー！？」

モモタロス「おー、おもしれえ！」

タクミ「でも、どんな名前にすれば…？」

フィリップ「一般的には、アニメの主人公である【サトシ】やハートゴールド・ソウルシルバーなどで自宅の表札にある【レッド】と名付けられることが多いようだ」

カズマ「ああー、それじゃあありきたりだもんな」

士「そうだな。なるべく、元の形を崩さずオリジナリティーの溢れるものが…」

翔太郎「…俺らは降りるか。フィリップ」

フィリップ「そうだね。見物していた方が、面白そうだ」

〵〵〵

5分後：

夏海「皆さん、決まりましたか？」

士「ああ、完璧だ！」

ユウスケ「大丈夫！」

カズマ「ああ！」

ワタル「……この三人を見ると、軽く不安を感じます」

アスム「シンジさんが混ざったらそのカオスが最高潮ですよ」

シンジ「——君達は、尻叩きと拳骨……どれを食らいたいのかな」

↑Vバックル装備

ワタアス「……すいませんでした」

フィリップ「念のために、本人とリンクを呼んだよ」

ポケモントレーナー（以下PT）「……大丈夫かな」

リンク「変なの言ったら即刻排除するから、安心してくれ」

フィリップ「ちなみに、ポケモンルールに則って……『5文字以内』」

『カタカナか平仮名』『英数字もあり』で決めてもらった」

ユウスケ「俺は、これだ！」

『命名：コジロウ』

シヨウイチ「——いやいやいやいや！」

翔太郎「ちよっと待て、それ、アニメのロケット団の名前じゃないか！？」

ユウスケ「え、え？」

カズマ「じゃあ、俺のは？」

『命名：レイラ』

ソウジ「——女の子の名前だな」

タクミ「どっちかというと、……女の人の名前です」

カズマ「ええー！？」

リンク「と言うか、……【ファイアーエムブレム 烈火の剣】で、魔の島にてジャファルに殺された女密偵の名前……？」

シンジ「それか、なんか……月を操って攻撃してきそうな……ミグロンとか……」

士「大体分かった。風魔の小次郎か」

海東「まったく、これならどうだい？」

『命名：おたから』

シヨウイチ「……お前最低だな」

ソウジ「もう少しマシな名前にできなかったのか」

アスム「師匠怒りますよ」

海東「何故だい！？僕が5分間必死で考えた成果なんだよ！」

ユウスケ「5分考えてそれかよ！」

士「アスムは？」

アスム「えっ、あ、そ、その」

士「見せる！」

アスム「あー！！」

『命名：ヒビキ』

アスム「……ヒビキさんをふと思い出して」

士「…すまん」

ワタル「と言うか、HG・SSでの主人公デフォルトネームが既に『ヒビキ』では」

アスム「僕、それでプレイしました」

ワタル「……陳情、ですか」↑薔薇2本出した

ユウスケ「お前もか、ブルータス」

海東「……というか、少年君、ポケモンやってたのか」

シヨウイチ「…」

夏海「シヨウイチさんは何なんですか？」

シヨウイチ「いや、その」

夏海「見せてください！」

シヨウイチ「あー！！」

『命名：あああああ』

ユウスケ「……あっ！…俺も、よくやる！…っていうか、やった！

！  
」

カズマ「ライバルの名前がそうだった！」

士「決めるのが面倒だったもんな」

ソウジ「意外にも共感を得ているみたいだし、いいんじゃないか？

『あああああ』」

リンク「却下！」

モモタロス「おっ？お前できてるじゃねーか。見せろ！」

タクミ「ああっ！」

『命名：ブルータス』

タクミ「……先程のユウスケさんの発言で、ふと、思いついて」

翔太郎「だからって、なんでブルータス……」

カズマ「……そういえば、シンオウ編になってからのアニメってシン

ジ湖やらトバリシティのシンジやら、シンジ多かったよな」

シンジ「俺関係ないから」

ソウジ「じゃあ拝借」

シンジ「って、コラー！」

『命名：アビソドン』

士「……いや、これ、鎌田の契約モンスターだろっ！？」

シンジ「『かまた』ってつけるのも、『ももい』ってつけるのも、

『はぐろ』ってつけるのもいいけど、でもどっちかと言うとそっち

の方がカツコよくて……！」

シヨウイチ「お前は何なんだ」

ソウジ「ん？ああ、これ」

『命名：くつき』

P T「……胸に突き刺さりました」

翔太郎「確かに背景だけど、……残酷すぎるぜあんた」

ユウスケ「モモタロスのも見るか」

『命名：プリン』

全「……それは既にいるだろおお！」」「」

モモタロス「い、いいじゃねーかよ！好きなものの名前をつけて何が悪いんだー！！」

P T「はあ……もう、期待できそうにない……」

海東「残っているのが、DSと名高いキバの王子と……士だしね」

ユウスケ「ワタル、どんな名前にしたんだ？」

ワタル「これです」

『命名：とくめいA』

キバット『ワタルう……お前が一番残酷だぜ』

ワタル「そうですか？」

P T「……orz」

リンク「お、落ち込むなって……」

フィリップ「じゃあ、士はどうなんだろう」

士「見て驚くな。——これだ！」

『命名：もやし』

ユウスケ「Σコラアアアアアー!!」

士「見た感じ、細ひよろいからな。ピッタリだ」

夏海「士君！笑いのツボ、いきますよ!？」

カズマ「ちよつと待った、夏海ちゃん。……士の発言を悔い改めるいい方法がある」

夏海「え？」

カズマ「シンジ！ソウジさんへの恨みとスルーの怒りと脚本への不満云々を全て士に発散だ!!」

シヨウイチ「Σ何言ってんだお前はーッ!？」

シンジ「……。……自分だって、門矢士<sup>もやし</sup>のクセに」

士「ゲフォアツ!!」↑吐血+クリティカルヒット

タクミ「一本！そこまでえっ!!」

アスム「あれはシンジさんが正解です!」

ワタル「自分だってモヤシモヤシ言われてるのに、名前もないような人に『もやし』って名付けるからですよ!」

翔太郎「Σ自分の事(『とくめいA』)を棚に上げやがった!？」

P T「……結局決まらなかったorz」

夏海「えつと、では、……『ポケトレ』君で…?」

P T「——それもありがちです」

夏海「……すみませんでした」

File 6【陳情！ポケモントレーナー（正式名称）の名前を決めよう】（後書

士「……ファイナルフォームライドしたい」

シンジ「主に誰を？」

士「スマブラファイター共」

サムス「いやああああ！絶対に嫌あああああ！！」

ピーチ「お嫁に行けなくなるじゃない！」

マリオ「ごめんなさい、リンク売りますからあああ！」

リンク「っコラー！！」

士「ディケブラ本編でできそうにないから、今！やりたいだけだ！！」

シンジ「それじゃあ張り切って、レッツゴー」

ファイター全「うわあああああん！」

NEXT・・・File 7【陳情？ファイター達をFFRしよう・

前編】

## File 7【陳情？ファイター達をFFRしよう・前編】

士「……」

ユウスケ「士の奴、考え込んでるな」

カズマ「チーズどうしたんだ？」

海東「どうせまた、くだらないことでも考えているんじゃないかな」

ユウスケ「くだらないって……」

カズマ「そんな言い方！」

海東「よく考えてみたまえ。士は、この世界に来てから……」  
『ファイナルフォーム△ライド』  
「FFR」  
をまったくしていない」

ユウカズ「？」

海東「あれは恐らく、【FFR症候群】。……手当たり次第にでもFFRしなければ気が済まない、それが別世界なら尚更。そんな病気だ」

ユウスケ「……どんな病気なんだよ」

海東「まあ簡単に言つと、FFRがしたくてたまらないって感じかな」

カズマ「物騒な病気だな……でも、チーズに限って……まさか……そう

……まさか」

ユウスケ「……ああ」

シンジ「あれ、士どうした」

士「……ファイナルフォームライドしたい」

シンジ「主に誰を？」

士「スマブラファイター共」

ユウカズ「Σやっぱりかよ!？」

海東「ほらね。僕の直感は当たる!」

シンジ「……そういえば、ディケブラ本編で死神博士が強制的にFFRさせる機械とか作ってたな。——そう…そういえばそうだったな……」

士「とりあえず、この世界の奴らをFFRしなければ俺の病気は治まらない!」

シンジ「そして俺の気も納まらない」

ユウスケ「シンジさん!？」

カズマ「シンジ、カムバック!カムバック・ザ・ヒューマン!」

士「しかし俺は、自分の手で…開発したい!」

ユウカズ「なんか『開発』とか言い出したツ!？」

シンジ「前(「File1」4)のように、ファイター達をライダーにしたら?」

士「それじゃあつまらん…」

フリリップ「話は聞いたよ。……この世界の存在の、FFR…実に興味深い」

士「分かってくれるか!」

フリリップ「ここは様々な生態系が揃っているだけでなく、特別な力を持った人間も多いからね。スマブラファイターならば、それが特に顕著だ」

士「しかし、FFRする方法がなくなてな…」

シンジ「強制的にFFRする機械はあるみたいなんだけど、士は自分でやりたいって聞かなくて」

フィリップ「原理は簡単だ。確か、その強制FFR機械は設定上、『デイクイドの行うFFRエネルギーと同じモノを強制的に流し込む』だったはずだ」

士「ああ」

フィリップ「だったら、そのFFR信号に似たエネルギーを流し込むグローブ型の簡易ガジェットを作り、『ちよっとくすぐりたい』をすればできるんじゃないかな」

士「その手があったか!」

シンジ「でも、ライダーでもないのにFFRできるかな」

フィリップ「リンクの適応力の異常さもある。……それにスマブラファイター自体、強い力を持った者達ばかりだから……きっと大丈夫さ」

カズマ「……逃げたほうがいいのかな」

ユウスケ「どうします、翔太郎さん」

翔太郎「俺に…質問するな…」

くくく

シンジ「ってなワケで、俺達の鬱憤晴らしとフィリップ君の実験に協力してくださいーい」

サムス「いやああああ！絶対に嫌ああああ！！」

ピーチ「お嫁に行けなくなるじゃない！」

マリオ「ごめんなさい、リンク売りますからあああ！」

リンク「っカラーー！！」

フィリップ「いや、リンクはやめておこう。……マスターソードが  
狼化、分かり切っているのにやる必要はない」

マリオ「つか、どうしてこんな実験をいきなり！？」

士「……ディケブラ本編でできそうにないから、今！やりたいだけ  
だー！！」

シンジ「それじゃあ張り切って、レッツゴー」

ファイター全「うわああああん！」

## Case 1・マリオの場合

ディケイド「よし、変身完了だ」

フィリップ「ディケイド。これが、特製ガジェット【エフエフアー  
ル】だ」

ディケイド「おお……」

フィリップ「背中に手刀を浴びせれば、信号を流してFFRする仕  
組みになっている。また、それはカメンライドした状態でも装着し  
たままになる」

ディケイド「成程…ソニックのような足の速い奴への、対抗策か…  
…ふふふふ」

フィリップ「クククク」

シンジ「ははははははは……さあてマリオ、逃げるな首絞めるぞ」  
↑ヘッドロック

マリオ「ぎゃぶっ！？もげもげもげられれ（訳：もう首絞めてるだろお前）……」

リンク「——シンジさん、ライダーである必要を感じられないほど（生身で）強いよな」

デイクイド「ユウスケだってライフエナジー吸われてなお生きてるし、カズマも鎌田カッター食らって生きてるんだ。大体そんなもんだろ。……それよりも……ちよつとくすぐったいぜえええええっ！」

マリオ「あふん！？」

ユウスケ「Σ呼びかけが何気にちがーう！」

マリオ「あ、あ、……あつはああああん」

カズマ「なんか変態チックだあああああ！」

デイクイド「お前もあんな感じだったぞ」

カズマ「違う違う絶対ちが……」

デイクイド「——ユウスケ」

カズマ「あつ、……お前……だった……のか」

ユウスケ「あそこまで変な声じゃなかったからああああ！」

マリオスーパー「……あ、あれ？俺……」

デイクイド「成程、マリオのFFRは………キノコか」

マリオスーパー「Σええーっ！？ちょ、今俺どうなってるの！？」

リンク「えつと、簡単に言うと、——俺の身長ぐらいのでかいキノコで……マリオを象徴する丸い鼻とヒゲがついてる」

デイクイド「運用方法、あるのか？」

フィリップ「マリオ世界のスーパーキノコは、触れた相手を巨大化させることも可能だから…そうだね、君が映画で見たコンプリー  
トフォーム・ジャンボフォーメーションみたいな」  
ディケイド「……自分じゃ試したくないな」

## Case 2・ファルコの場合

ファルコ「なんでいきなり俺なんだよ!？」  
ディケイド「何となく」

ファルコ「何となくで決めるなー!」

シンジ「……ふんっ」↑ヘッドロック

ファルコ「げぶるばんしいがー(訳:お前何してんだー)!？」

ディケイド「問答無用。ちょっとくすぐったいかもなああああああ  
あ!」

カズマ「一気に不安になる言い方ーッ!」

ファルコ「あ、うおわっ、……………だあああああ!？」

ファルコスカイクロー「……おい、なんだこれ!？」

フィリップ「成程、【スターフォックス アサルト】出典のスカイ  
クローか」

ディケイド「戦闘機か……ゼクターカブトやクウガゴウラムと用途  
が被るな」

シンジ「そして最終的には、デンオウモモタロスの剣先をケツの部  
分に刺されて、そのまま振り回されたり？」

ファルコスカイクロー『えっ、ちょ、……それだけはああああ！』

ユウスケ「……」↑尻を抑える

カズマ「…俺、同行しなくてよかった」

海東「していたら、確実に毎回武器代わりだったね」

カズマ「……よかったあ、ユウスケが同行してくれてっ！！」↑清々しい笑み

### Case 3・ドンキーコングの場合

シンジ「つかーさー。抑えたぞー」↑十の字固め

ドンキー「ウホッ……」

リンク「シンジさん、本当にライダーの力じゃないよ！？何あの戦闘能力！」

ディケイド「適応力異常レベルが何を言うか！……とにかく、やる・か」

ドンキー「ウツホー！」

シンジ「うわわ！」

ディケイド「ちっ、暴れ始めやがった！」

フィリップ「これじゃあ研究に差し支える。——麻醉銃を使うか」

翔太郎「フィリイイップ!?」

ディケイド「おいシンジ、ブレイドになってタイムで止めるからどいてろ！」

シンジ「あ、大丈夫」

——「ごきやつ。」

ドンキー「……」↑泡噴いてる

シンジ「……はい、大人くなりました♪」

デイケイド「つしやあ」

ユウスケ「ちよっちよっちよちよちよ！……シンジさーん！？シンジさーんっ！……？」

カズマ「何したのお前ええええー！？」

シンジ「木場カイザ直伝・首折り」

ユウスケ「って、——それ一步間違えば死ぬだろおおーツツツ！」

リンク「……シンジさん。シンジさんが龍騎である必要性、どこにあるのかな」

デイケイド「じゃあ、ウホッホホホーウホ（訳：ちよっとくすぐったいぞ）！」

ドンキー「……」↑生体反応なし

ユウスケ「うわあああトドメ刺したアアア！」

ドンキータルコンガ「……」

フィリップ「興味深い。コンガという楽器になるなんて」

デイケイド「あいつが64のゲームで演奏したのも、確かコンガだったな」

シンジ「じゃあ、演奏してみる？」

ユウスケ「ダメダメ！駄目ーッ！……」

カズマ「トドメ！完全にトドメになるからああー！……」

~~~~~

フィリップ「今判明したのは、『マリオスーパー』『ファルコスカイクロウ』『ドンキーコング』か。……はっ！」
ディケイド「どうした？」

フィリップ「——誰もが、自分の世界に関係のある物になっている。ということは、……リンク・ゼルダ・ガンドロフ！この三人に一気にFFRをすれば！」

ディケイド「トライフォースになる、か！？」

ガノン「ちよっ、ちよっと待……」

ゼルダ「……なぜそうなるのですか！？それ以前に、トライフォースになる必要性は何処に！」

ディケイド「トワプリでトライフォースの存在が、ゼルダ同様曖昧だったから」

ゼルダ「……orz」

ガノン「——それを言うなああああ！」

フィリップ「……あれ？リンクは？」

「サイド（リンク）」……」

「サイド（タクミ）」……「ごめんなさい」

ディケイド「しまった、タクミとダブルになっていやがった！」

ユウスケ「って言うか…リンクって、この中じゃとことんタクミ君しか信用してないんだな…」

「サイド」というより、…タクミしか性格的にまともな人いないし…ライダーにしろファイターにしろ」

ワリオ「つか、あれにFFRじゃなくていいのかよ！」

ディケイド「駄目だ、あれじゃあ『サイクロンサイクロン/ジョーカー/ジョーカー』が最優先されちゃう」

フィリップ「FFRは元々、ライダー専用だしね。ライダーのほうに優先されるといっても、過言じゃないか」

ゼルダ「…ガノンドロフ、…私達も今の内に…ライダーの誰から変身アイテムを貰ってきましょう」

ガノン「しかし、——はっ！」

リュウキドラグレッター『げんじゃねえよ♪』
魔王と姫「Σでたあああああーッ!？」

ディケイド「…こんなこともあるのかと、事前にシンジに龍騎に変身させておいてよかったぜ！」

リュウキドラグレッター『ギシャアアア!』

カズマ「士…あれちゃんと、カードのほう使ったんだよね？」

ディケイド「は？」

カズマ「いや、確か、——強制的にFFRする装置は本来の製法外だから…2度も3度もやったら相手の肉体と精神が駄目になるって設定でもあったんじゃない」

ディケイド「……………シンジだし大丈夫。あまり変わらん変わらん」
カズマ「チィィーズウウーッ！！？」
リュウキドラグレッター「ギシャアアアアー！！」

Cサイド「ハイル組、そして、シンジさんの運命は……………ってところで、次回に続きます！」

File 7【陳情？ファイター達をFFRしよう・前編】（後書き）

デイクイド「ははははは！ちょっとくすぐったいかもなあああ
！！」

ガノン「ごふあー！？」

ピーチパラスル『うつつ…もうお嫁にいけないわ』

デイクイド「元々貰い手がいないだろ」

ユウスケ「おいつ！」

リンク「あーもう、いい加減止めないと。タクミ」

タクミ「はい、ファイズギア」

リンク「ありがとう。……変身」

NEXT・・・File 8【陳情？ファイター達をFFRしよう・
後編】

File 8【陳情？ファイター達をFFRしよう・後編】

Case 4・ガノン&ゼルダの場合

ディケイド「くつくつく…はあーっはっはっはー!!」

ユウスケ「うわぁ、士が悪の王様だ!」

カズマ「悪代官だ!」

Ｊサイド（リンク）「……流石、大首領…」

ディケイド「さあ、ガノンにゼルダ…黙って俺にFFRされろ!逆らうというのなら、ここで、ディケイドドラグーンだ!」

リュウキドラグレッター「ギシャアアアアア!」

魔王と姫「ひiiiiiii!!」

Ｃサイド（タクミ）「……あーあ」

ソウジ「待て、士」

ユウスケ「やった、ソウジさん来た!」

カズマ「これで勝つる!」

ソウジ「——思ったんだが…ケータッチでファイナルカメンライドした後の、ディケイドCFと龍騎SVでFFRとかFARとかできなにか?」

全「「Σえええええーっ!!?」」

ディケイド「——そうか、龍騎SVを『サバイブドラグランザー』的なものにして、それで『サバイブファイアーストーム』をやるのも手か…!」

魔王と姫「「やめてええええ!」」

翔太郎「……駄目だ、あの人は火に油を注ぐことしかない……！」

ディケイド「さあ、死にたくなかったらその身を捧げろ！」

リュウキドラグレッター『生贄になれっ』

カズマ（土とシンジが絶対神になつてる件について）

ガノン「ひい……」

「サイド（ガノンがこんなに怯えるのは初めてかなあ）」

ディケイド「ははははは！ちよつとくすぐつたいかもなあああ
……！」

ガノン「ごふあー！？……あ、ぬふっ」

ユウスケ「Σなんか変態チツク！」

ガノンブル布林『……なんだこれはーっ！？』

ディケイド「おめでとう！ガノンはブル布林に退化した……！」

ユウスケ「こらこら！」

フィリップ「しかし、ブル布林と言っても……モチーフはファントムガノンなんだね」

「サイド「……の、下の馬（？）」だけどな」

ディケイド「アギトトルネイダー系統か。……いつそ『ガノンホットドッグ』なら……」

カズマ「食う気かよ！」

ディケイド「さあーて！次はあんただ、お姫様……！」

ゼルダ「くっ……」

ディケイド「恨むなら、——ダブルになったリンクと、ホットドッグにならなかった豚を恨むんだな！」

龍騎「だなっ」

カズマ「あ、シンジ戻った」

龍騎「んにゃ、龍騎SVへの布陣」

カズマ「——やめえええーい！」

デイケイド「多分くすぐつたいぜ！」

ゼルダ「きゃあ！」

ゼルダフルーレ「な、なんですかこれ！？」

フィリップ「興味深い。トワプリで最初に持っていたあの剣になるのか」

デイケイド「てつきり『ゼルダアロー』かと」

龍騎「キバアローと用途被らない？」

デイケイド「こっちはこっちで、『ブレイドブレード』と被…るか？」

ユウスケ「むしろ、プ。キュアに似たようなものがあつたような…」

Case 5・ピーチの場合

デイケイド「フッフ、桃女！最後に言い残したことはあるか？」

ピーチ「——【キノコスイーツ】のケーキ、全部制覇したかったわ…」

マリオスーパー「ええーっ！？あの、俺のこととか、キノコワールドのこととか、色々…」

ピーチ「ないわ！」

マリオスーパー「orz」

龍騎「レディ……ファイツ！」

ディケイド「ちよつと挿^いれるぜえええ！！」

ユウスケ「Σ卑猥だああああ！！」

ピーチパラソル『いやあああああ！ひーらーいーたー！！』

フィリップ「——なんだ、傘か」

ディケイド「興ざめだな」

龍騎「別に今から雨降るわけでもなし」

カズマ「お前らの血は何色だあああああーっ！！」

龍騎「そう言うお前の血は何色だ」

カズマ「赤……って信じたい！」↑切実

ユウスケ（…^{アンデッド}怪人になる危険性を持ったシステムのライダーだもん
なあ…）

ピーチパラソル『ううう…もうお嫁にいけないわ』

ディケイド「元々貰い手がないだろ」

ユウスケ「おいつ！」

ピーチパラソル『大体、あなたがこれを使ってどうするの！？』

ディケイド「確かに、俺よりはナツミカンのデフォルト装備のほうがいいかもな」

ピーチパラソル『ああ、嫌よ…こんな形で男に×××されるなんて
……』

ユウスケ「同情します…」

Case 6・サムスの場合

ディケイド「まあ、お前も想像の範囲内なんだけどな」

サムス「じゃあ、するのをやめなさいよ!？」

ディケイド「それはお断りだ。さて、手っ取り早く——少々くすぐったく感じられますが宜しいでしょうか」

カズマ「Σ丁寧すぎる!」

サムス「ひゃーっ!？」

サムスキャノン「な、何なのよー!？」

タクミ「うわあ、『ファイズブラスター』と似たような感じ……」

リンク「アレが一番実用性高そうだなあ」

ピット「戻ったんですか」

リンク「飽きたのと、……そろそろ止めておかないといけないかなーって思っで」

ディケイド「ふむ。——撃つか」

全「わーっ、わーっ!？」

ユウスケ「向けるなああああーっ!」

サムスキャノン「振り回さないでええええ!」

Case 7・ロイの場合

ロイ「——なんで俺もっ!？」

ディケイド「お前も一応【元】スマブラファイターなんだろ?……」

リンクには忘れられているようだが」

ロイ「それは言うな!……でも……ちよっ、待て待て待て。……やめえ

ええええ！」

龍騎「黙らないと首折りだぞ」↑殺気全開

フィリップ「こつちにも考えがある」↑ファングメモリ持ち

ロイ「……」

ディケイド「隙あり！手が突き刺さって激痛が走るだろうが我慢しろよおっ！？」

全「不安すぎる発言すんなー！」

ロイ「ぎゃっばー！？」

ロイドラゴン『……畜生』

ディケイド「なんだ。お前も竜なのか」

龍騎「被んな」

フィリップ「ということは、母親はニニアン設定か」

ディケイド「だけど、属性のせいで氷竜というより……火竜だな」
ロイドラゴン『ほっとけ！』

カズマ「——シンジも実は人間とミラーモンスターのハーフだったりして」

龍騎「カズマ背骨折られたいか？」

カズマ「…これはロイの意見ですっ！」

ロイドラゴン『おまあああ！？』

龍騎「偽物。——骨えぶつちぎって粉々にしてやんよ」
ロイドラゴン『ぎゃー！ぎゃー！……！』

ディケイド「…哀れだな」

タクミ「哀れすぎますよ」

（ ）

ディケイド「さてと…」

リンク「もう気は済んだらろ？」

ディケイド「—— まだだっ！全員、開発してやらないと気が済まない！！」

ファイター全「「えええー！？」」

ディケイド「さあて…まずは… フフフフ…貴様だピカ厨！！」
ピカチュウ「Σ漢字が違うー！」

リンク「あーもう、いい加減止めないと。タクミ」

タクミ「はい、ファイズギア」

リンク「ありがとう。……変身」

<Complete>

タクミ「ついでに、向こう（『ドッジボールの世界』の乾さんから借りてきたファイズブラスター」

リンク「よし」

<Awakening>

「……つかーさあー……」

ディケイド「ん？」

「ファイズ・ブラスターフォーム——いい加減にしとけええええええー！！」

<Blaster Mode>

< Exceed Charges >

「ディケイド、げえっ!？」

——ドッガアアアアアン！！

↑ 黒焦げ

「ファイブBF」

「フリップ」驚いたね。ろくに説明書を読んでいないはずなのに、
「フォトンバスター」をするなんて」

“フォトンバスター”をするなんて」

ゼルダ「……ハイルルにはあんなハイテク機械なんてないのに……」
トウーン「……なんで、使えるんだろっね」

トウーン「……なんで、使えるんだろうね」

ユウスケ「それが、リンクの【超適応力】じゃあ……」

マリオスーパー「あの…俺達って、」

ピーチパラソル「どうやって戻ればいいのよーっ!？」

「ファルコス、スクロー、俺は別にこのままでも……」

File 8【陳情？ファイター達をFFRしよう・後編】（後書き）

次回予告

マスター「さあ始めました、チーム対抗・大運動会！」
鳴滝「果たして勝利は誰の手に！？」

ソニック「楽勝だぜ」

ブレイド「…負けるか！」

カブト「全力を尽くそう」

C・ファルコン「人間最速の意地を見せてやる！」

フォックス「負けていられるか！」

響鬼「…行きます」

マスター「あーっと、ソニックに対してブレイド、マッハジャガー
を使ったー！！」

ソニック「そんなのありかよー！？」

NEXT・・・File 9【波乱！大運動会・前編】

File 9【波乱！大運動会・前編】

ここは競技場。

スマブラファイター達がホームランコンテストをしたりする、場所だ！

マスター「さあ始まりました、チーム対抗・大運動会！」
鳴滝「果たして勝利は誰の手に！？」

士「しかし、普通のかけっこじゃ面白くないな」

リンク「面白くなくていいよ」

士「そうだ。どうせなら、優勝した奴にはご褒美なんてどうだ？」

リンク「駄目だって！そんな事言つと…」

ワリオ「グヘヘ、おたからー！」

ガノン「世の中金だ！」

デデデ「優勝してお金をゲットだぞい！」

リンク「…ほらー」

士「問題ない。こつちが勝てばいいだけの話だ」

リンク「万が一負けたら？」

士「その時は…そうだな、ご褒美として100万円」

ユウスケ「お前、そんな大金持ってたのか！？」

士「——を、カズマが払う」

ユウリン「おいっ！」

~~~~~

マスター『さて、最初の競技はかけっこです』

鳴滝『ファイターには音速の男・ソニックがいる。期待できそうなのはカブトだな』

ソニック「楽勝だぜ」

ブレイド「…負けるか！」

カブト「全力を尽くそう」

C・ファルコン「人間最速の意地を見せてやる！」

フォックス「負けていられるか！」

響鬼「…行きます」

ワリオ「テメーら！負けるんじゃないぞー！！」

ガノン「100万！100万が掛かっているんだ！！」

士「勝てよ！100万円のためだ！！」

ユウスケ「こっちの賞品もそれなんだ！？」

ブレイド「つか、それ、——俺の金だろチィーズウウー！！」

鳴滝『それでは、』

マスター『よい!』

鳴マス『……スタート!』

ソニック「へっ、ぶっちぎりだぜ!」

マスター『早速ソニックがトップです!』

鳴滝『やはり音速の男には勝てないか……あーっと、カブト普通に走っている!クロックアップはしない気か!?!』

カブト「勝負事にクロックアップはいらない」

ブレイド「って、——負けたら損するのは俺なんだぞー!?あー、くっそ!自分の身は自分で守れってか!?!」

ワリオ「おっしやー!かねかねー!」

ガノン「いやっはあああ!」

マリオ「イエーイ!」

マルス「金は貰った!」

ショウイチ「大人気なさ過ぎる……」

ワタル「この世界の人間って、汚い……」

タクミ「……卑小な人達だ」

リンク「——ごめんなさい」

ショウイチ「いや、あればかりはお前が悪いわけじゃ……」

ワタル「むしろ、人の汚さを再確認できるいい機会です」

タクミ「あの、それって責めてるんじゃない?」

ブレイド「運命の切札は、自分で切り開くッ!」

< Mach >

ブレイド「……うおおおおおー!」

マスター「あーっと、ソニックに対してブレイド、マッハジャガー

を使ったー!!」

ソニック「そんなのありかよー!？」

鳴滝「ありだ!」

全「「おいっ!」「」

マスター「何はともあれ、ブレイド追いついてきたー!このまま一位を取るのは、誰だ!？」

ソニック「くっそー、最速の意地を見せてやる!」

ブレイド「勝つのは俺だ!」

ソニブレ「「うおおおおおおお!」「」

ディエンド「——イエーイツ!僕が一番さ」

パンパン!

マスター「あつと、ディエンドこと海東大樹がゴールイン!?しかし、どうやって!」

鳴滝「成程、インビジブルか!」

マスター「え?」

鳴滝「恐らくディエンドは、既にインビジブルで姿を消して待機していた!そして誰かがゴールする寸前に、ゴールテープを切ったのだ!」

ディエンド「栄光のゴールは僕が頂いたよ!」

マリオ「ふざけんなー!」

ワリオ「こんなの納得行くかー!妨害料に、50万円だ!」

ディエンド「しょうがないねえ……頼んだよ、ブレイド君」

ブレイド「あんたら!俺を金づるとしか見てないだろ……orz」

シンジ「——カズマが可哀相になってきたからやめなさい」  
ファイター殆ど「……だが断る!」

シンジ「……ほう、俺の頼みを断ると…そう言いたいのか?」↑力

ドデッキ+SURVIVE烈火+エスカリヴォルグ装備

マリオ「…すいませんでした」

ガノン「ごめんなさい」

ワリオ「金」

シンジ「デブ殺す」

ワリオ「すいませんでした…」

士「もうしません、おかん」

ユウスケ「Σ『おかん』って!」

~~~~~

鳴滝「続いての競技は、スマブラにちなんで…ホームランコンテスト!代表1人を選んでの勝負です!」

マスター「これは、流石にファイター達有利か!?」

ガノン「フツ、空中下攻撃をやり続けて幾万回…【ホッピングおじさん】の底力を、貴様らに見せてやろう!」

マリオ「よっしゃー!」

ワリオ「頼んだぜええええ！」

マルス「ゼニー！」

カズマ「つか、マルスって王族だから金持ちじゃ……」

士「色々事情があるんだろ。それより……ユウスケ、ライアルになれ！あれはパンチ力が100tあったはずだ……！」

リマジ皆様（そんなに潜在能力あったんだ……）

ユウスケ「無理無理！自力じゃなれないんだから、あれ……！」

士「じゃあキバーラに頼んで、アルティメットクウガに！」

ユウスケ「無理……！」

ガノン「何を言う、ワシらは生身でやるのだ。貴様らも生身でやって飛ばせ！」

アスム「あなた達と一緒にしないでくださいよ！」

ワタル「僕達は一応、ユウスケとショウイチさんとシンジさんとタクミさんと僕自身を除けば後は一般人です！」

シンジ「……なんで俺も混ぜる？」

ワリオ「じゃあ非一般人でやれよ！」

マリオ「ああ、言うておくが変身はとにかくオルフェノクになるのもギルスになるのも禁止だ！」

タクミ「あつ、ずるい……大人気なさ過ぎる……！」

リンク「本当にごめん……！」

ユウスケ「じゃあ、パンチスペックの高いショウイチさん……」

ショウイチ「それはアギトになればの話だろ！」

ワタル「第一、生身でどうやって飛ばせと……！」

タクミ「ホームランバットは使っていいみたいなんですけどね……」

士「おい、飛んだぞ！」

マスター『あつと、ガノン選手…3425・6m』！』

鳴滝『これは凄い！』

ファイター全「やったー！」

ワリオ「ここで大差をつければ、300万は俺のものだ！」

マリオ「え？500万だろ」

マルス「800万だよjk」

カズマ「なんか増えてる！？つか、そこまで持ち合わせないし！ねえ、ちよつと！？」

シンジ「リンク君、バットって使っていいんだっけ」

リンク「あ、はい。ガノンもさっき使いましたし」

シンジ「…ふーん…ところでこれ、固さどれくらい？」↑HRバット持ち

リンク「結構固いんじゃないですか？大乱闘でも使うか」

シンジ「はっ」

——べきよ——

全「Σ折れたああああ！！？」

リンク「…大乱闘中でも一度も折れたことのないバットが…」

シンジ「バット使ったってことは、——使わなければ…鼻っ柱へし折れるよなあ…このバットみたいに」

カズマ「シンジ、それ、へし折るってレベルじゃない。…粉碎だ！」

ショウイチ「つか、え、……生身で！？」

マスター『デイケイドチームは龍騎が登場！』

鳴滝『しかし、ライダーにも変身できない状態で何処まで』

シンジ「——どりゃああああ!!」

…ズバッカアアアアアアン!!

鳴マス『飛んだぁーツツツ!!?』

ピット「何あの飛距離!？」

ファルコ「おい、ガノンもあんな高くまで行かなかったぞ!？」

ガノン「フ、フン…た、高く上がった所で、すすすぐに落ちるに決まって…」

翔太郎「どうだ、フィリップ？」

フィリップ「うん、うん…。——凄いよ翔太郎。速度・威力・高度共に先程を上回っている」↑デندنを使いながら

翔太郎「サンドバッグ君のダメージは？」

フィリップ「あっちのほうが凄い。驚いたね…たった一撃で、90%越えのダメージを与えるなんて。ガノンは、何発も当てて飛ばす頃にはやっと800越えだったのに」

リンク「え、あの…シンジさん人間だよな…？」

士「物事は、理論では済まされない事だってあるんだ」

カズマ「……直視したくない現実だけだな」

翔太郎「つか、——あいつ駄目だ!人としてはもう既に駄目だったが!!ライダーとしても駄目だ!!龍騎の地点で!!!」

アスム「あの人、龍騎のスペックで損してますよね!?確実に!!いやファイズよりかはいいですが!」

フィリップ「明らかに彼に有益じゃないな」

ワタル「シンジさんがクウガだったら凄い事になっていたかも」

ソウジ「……常時アルティメット状態か…」

海東「成程、分かった。——小野寺君と辰巳シンジを逆にしたら
楽だったってワケか」
タクミ「うっわぁ、クウガのスペックを生かしきれしていない人はい
るけど…正直、変身するライダーの能力で損する人は初めてだ」
ユウスケ「……皆、何気に俺を全否定してない？」

マスター『結果は…あぁつと！？9841・3m！……なんか凄
数でたー！？』

鳴滝「…」↑File2で素直に従っていて良かったと思っている

シンジ「ただいまー……って、ワタル君とアスム君、何そのお酒」
ワタル「神酒です！」

アスム「はい！」

シンジ「ショウイチさんとソウジさんとタクミ君、それ、なに」

ショウイチ「お供え物のキュウリ」

ソウジ「ナス」

タクミ「そして団子です」

シンジ「…土とユウスケ、なんで神棚作ってるんだ？」

土「大体だ」

ユウスケ「うん…」

シンジ「で、…カーズマ。その像何？」

カズマ「ご神体です、破壊神様」

シンジ「……怒らせたいのかお前ら」

DCD面子全「いえ」

フィリップ「検索完了。龍騎のスペックは、パンチ10t・キック
20t・ジャンプ35m・必殺技300t・100m5秒だ」

翔太郎「低いつてワケじゃない、むしろ高いほうだ。高いほうなんだが、……損してるな」

フィリップ「響鬼かクウガなら、彼の戦闘能力を有意義に使えるのに……勿体無い！」

翔太郎「つか、……俺もなんかお供え物持ってくるか」

ガノン「……変身していない人間に負けた……このワシが……orz」
ゼルダ「まあ、あのバット折りましたから……」

リンク「シンジさん自身のスペックって、本当に常時ライアルありえるくらいだよな」

File 9【波乱！大運動会・前編】（後書き）

次回予告

マスター『試合も大詰め、今度は借り物競争だ！』

鳴滝『フフフ、ディケイド…ここが貴様の墓場だ！』

ディケイド「なん、だと…自分の顔写真…！？」

鳴滝『さあ、苦しめディケイド！はーっはっはっは！』

カズマ「お前、写真撮ってなかったっけ」

シンジ「ごめん置いてきた。取ってくる」

カズマ「え！？どうやっ…ぎゃあああ！なんか空中に変な裂け目がーッ！！？」

ショウイチ「シンジが人外すぎる」

ソウジ「元々」

NEXT・・・Fire 10【波乱！大運動会・後編】

File 10【波乱！大運動会・後編】

ここは競技場。

スマブラファイター達が以下略！

マスター『試合も大詰め、今度は借り物競争だ！』

鳴滝『フッフ、ディケイド…ここが貴様の墓場だ！』

ディケイド「ふん、鳴滝め。せいぜい俺の勝利する姿を見て泣き叫ぶんだな！」

キバ「…はあ、なんで僕まで」

クウガ「まあまあ、頑張ろうぜ！」

リンク「借り物競走って、苦手なんだよな」

ピット「しかも、このメンバーに若干の不安を覚えます」

ファルコ「つか、本編での石化回避組だよな？」

マスター『まあ、それはさておき…スタート！』

鳴滝『ディケイド！貴様の旅は、ここで終るだろうっ』

ディケイド「うおりゃあああああ！」

クウガ「おりゃーっ！」

マスター『あっと、ディケイド&クウガ速い！まあ、メンバーがメ

ンバーなら仕方ありません!!」

鳴滝『ディケイドとクウガに続き、キバ、ピット、ファルコ、リンクの順だ!これは、仮面ライダー組有利か!?』

マリオ「くそー、がんばれー!」

マルス「いっちおくえん!いっちおくえん!」

ワリオ「一億のためだ、振り切れー!」

カズマ「だから、なんで値段跳ね上がったんの!?ねえ!」

マスター『最初に紙を取ったのは...』

ディケイド「うらっ!」

マスター『——ディケイドだー!』

鳴滝『チッ』

マスター『あれ、鳴滝さん?鳴滝さん!?』

鳴滝『まあいい。だが、ディケイド...貴様はもうじき絶望する!』

ディケイド「!」

マスター『あつと、ディケイド紙を見て動けなくなった!何があったのか!?』

ディケイド「なん、だと...自分の顔写真...!?」

鳴滝『さあ、苦しみディケイド!はーっはっはっは!』

ディケイド「く、くそっ...」

ファイター殆ど「イエエーイ!!」

ショウイチ「あつの納豆巻き...余計なことしかないのかっ!?」

カズマ「最低だーッ!」

ソウジ「しかし、...1/6の確率だろうに...何故...」

マスター『続いてはクウガだ!』

クウガ「え、え、え…」

マスター『あつと、こっちも止まったぞ!?!』

クウガ「あ、あね、あああああねささささんんんの、ぱぱぱぱぱぱぱぱぱぱんてい……」

マスター『これまた無理難題!死んだ八代刑事のパンティを、この世界にいるユウスケがどうやって取ってくるというのかー?!?』

鳴滝『まあ、書いてある内容は【好きな異性の下着】なのだな』

キバ「…」

マスター『え、ま、まさか、』

キバ「思い出の品……しかも、……母親との…」

マスター『キバのハートにクリーンヒットオオオ!これは、もはや仮面ライダーチーム全滅だー!?!?』

マルス「一兆円!一兆円!」

マリオ「一兆円貰ったらどうする?」

ワリオ「城を建てて、豪遊だな!」

カズマ「……ねえ、どんどん額が上がってきてるんだけど」

タクミ「もう怒っていいですよ…カズマさん」

ショウイチ「あいつらも普通考えないのか?一兆円という現金を持ち歩くバカはいない、と」

ソウジ「だな」

カズマ「あれ?でもシンジ…」

DCD面子全「?」

カズマ「お前、写真撮ってなかったっけ」

シンジ「ごめん置いてきた。取ってくる」↑空間裂いた

カズマ「え!?!どうやっ……ぎゃああああ!なんか空中に変な裂け

目がーッ！！？」

シヨウイチ「お前はパルキアかああああああーッ！？」

マスター「……あれ？ファイターチームも、何やらトラブル！」

ファルコ「……ふざけんなー！【フライドチキン】だと？……これは何の虐めだああ！？」

ピット「……【ヌード写真集】……って、……むむむ無理ー！！？」

リンク「（【カブトゼクター】って簡単な内容だったけど、——あのマリオ達のために勝ちたくないなあ……）……ごめん、棄権したい」

ファイター「ええええええー！？」

マスター「あつと、こつちも全滅だー！？」

鳴滝「いや、……見ろ！」

シンジ「——つうーかあーさあー。写真持ってきた（ユウスケ混じってるけど）」

ディケイド「どわあああ！？」

マスター「辰巳氏、空間の裂け目からコンニチワッ！」

シヨウイチ「シンジが人外すぎる」

ソウジ「元々」

マスター「あつと、天堂氏……身も蓋もないことを！」

ディケイド「とにかく、貰って置くぜ！」

鳴滝「おのれ龍騎……貴様のせいで、ディケイドが勝ってしまう！龍騎イイイイ！！」

マスター「静かにしてくださいね！？」

シンジ「あ、ついでにシヨウイチさん所の八代さんのパンツも持つ

てきた」

クウガ「ハイーツ!？」

シヨウイチ「おい、——それで後からしばかれるのは俺なんだぞ!？こらシンジ!！」

カズマ「何でもいいよおお!とにかく勝って、ユウスケ2位抜けすればこっちの勝ちは確定なんだからああッ!！」

アスム「切実な叫びですね」

競技結果↓1位ディケイド、2位クウガ、3位ファルコ、4位キバ、5位ピット、6位リンク（棄権申告）

~~~~~

マスター「さあ、最後の競技は…力比べ!」

鳴滝「大人げない者達が一斉抗議してきたため、この競技に勝てば百万ポイント加算されるぞ!！」

D C D 面子「ずりいいー!！」

マスター「なお、仮面ライダーチームは…【変身禁止】【辰巳シンジ使用禁止】というルールまでマルスによって追加されました!」  
ソウジ「……汚いな」

ワタル「最低です」

アスム「大人げないにも程があります（鳴滝さんなのですが）」

タクミ「本当に、この世界ってリンクしかまともな人がいないのかな（超適応力除いて）」

リンク「心からごめん」

マリオ「こっちは、重い荷物をも軽々持ち上げるドンキーで決まりだ！」

ワリオ「1000兆円は俺達のものだぜー！」

ドンキー「ウッホ！」

ユウスケ「どうするんだよ！変身もできない、シンジさんも使えないんじゃ！勝ち目がないじゃないか！」

士「いいや、この状況下での切札。——それはお前だ！芦河シヨウイチ！」

シヨウイチ「は！？」

マスター「おっと、ドンキーコング…60kgの大岩を軽々持ち上げたー！」

鳴滝「これは、流石にライダー達は不利か！？」

士「いいや！こっちには、シンジ以上の…しかも生粋の人外がいるんだぜ！」

シヨウイチ「グレるぞ、オイ」

ソウジ「八代氏のパンツの件、——お前だけで片付くか？……やればZECTも全面協力するぞ」

シヨウイチ「……ハイ」

シンジ「ソウジさん凄っ」

士「見せてやれシヨウイチ、——リンゴを汁一滴出さず捻じらせた、お前の力を——」

シヨウイチ「解説微妙だなオイ！……まあいいか、…あの八代に殺されないためだ……」

マスター「さて、アギトはどう来る！？」

鳴滝「ん？アギト…アギトといえば……」

シヨウイチ「——そおいつ！」

——ベギヤツ！——

——ガラガラガラガラ——

マスター「手が触れただけで粉碎したあーッ！？」

ファイター全「なんつじやありやあああッああー！？」

カズマ「え、あれ、マジ！？」

士「……アギトやギルスには、超能力があるからな。リンゴをツイストしたり、衝撃波を出したりなんて朝飯前だ」

アスム（あ、だから生粋の【人外】）

マリオ「い、いや！壊れたからこの勝負は無効だ——」

マルス「イエス！」

ワリオ「別の奴で再挑戦しろ！」

ガノン「そ、そうだな。この100kgを持ち上げたらOKにしよう！」

タクミ「とことんズルッ！」

リンク「ごめんタクミ本当にごめん」

アスム「ああもう、」

全「？」

アスム「——よいしょッ」

——ズズ——

アスム「……せえの！」

——ズズズズズズ……！——

ファイター達「持ち上がったあぁあー！？」

ユウスケ「あ、そうか！アスム君も鬼として修業していたんだ…持ち上げられて当然か…！」

マリオ「やっぱ子供も使用禁止！よく考えたら可哀想だもんな！？」  
シヨウイチ「ここまでくると哀れだな」

アスム「あ、ソウジさんパス」↑投げた

翔太郎「Σ投げやがったー！？」

フィリップ「しかもパスする相手が相手だしね」

ソウジ「ん？」↑キャッチ

夏海「……持ち上げたッ！？ゼクターカブトになる過程のあの薄い反応で、持ち上げたッ…！？」

ユウスケ「しかも何気に片手だし！」

ワタル「あの、なんで劇場版で友情出演したリイマジは人外ばかりなんですか？」

士「……その中にお前はもちろん入っている、よな？」

ワタル「もう自覚してます。…カズマぐらいですよね、タクミさんやユウスケを足した8人中1人だけ【一般人】と言えそうなのは」

ユウスケ「俺は一般人扱いじゃないのか…？」

士「まあ、カズマも剣崎側のシステムと似通っていた場合に限り、アンデッド化が進んでいて人外と判断されるんだろうけどな」

（ （ （

マスター『えー、とりあえず優勝は…仮面ライダーチームです！』

DCD面子「やったー！」

ファイターほぼ全員「ええー……」

リンク「というか、あっちがシンジさんを抱え込んでいる地点で負けを感じておこうよ」

翔太郎「巻き込まれなくて良かったぜ…」

フィリップ「だね」

File 10【波乱！大運動会・後編】（後書き）

次回予告

士「よし、目指せ100hit!」

ユウスケ「カズマ、残りCCに気をつけろよ!」

夏海「だけど、カービイだけだった1アクションなんですよ!?!?こ

れは、可哀想です…可哀想すぎます!?!」

タクミ「そうなの?」

リンク「まあ、一応…」

ユウスケ「俺達は、負けn」

士「負けないし!」

海東「挫けないし!」

夏海「倒れないし!」

ユウスケ「…揃わなくても泣かないし」

NEXT・・・Fire 11【陳情！勝利セリフでキャラを立てろ】

## File 11【陳情！勝利セリフでキャラを立てる】

士「よし、目指せ100hit!」

ユウスケ「カズマ、残りCCに気をつけろよ!」

カズマ「お前もな!ソウジさん、パスカルの魔法援護お願いします  
!」

ソウジ「士は派手に技を決めすぎるなよ!」

シヨウイチ「……なんだあれ」

シンジ「TOG。今、アスベル・ヒューバート・ソフィ・パスカル  
でコンボ100hit狙いだって」

アスム「皆で交替で遊んでいるんです」

ワタル「さっきは、僕がヒューバート、シンジさんがシエリア、タ  
クミさんがアスベル、アスムがマリクでやってました」

リンク「ここスマブラだよな!？」

シヨウイチ「というか、俺、ナチュラルに省かれたんだが…?」  
リンク「……ドンマイ」

夏海「士君！大変です!!」

士「…ナツミカン。ちなみにリンクの切札は最後の吹っ飛ばしの際、  
トラフォに捕まっている相手の後ろあるいはリンク自身と隣接して  
いる奴まで吹っ飛ばすから、横取りの際にダメージが溜まっていた  
なら離れていないと自分が黒星になるぞ!!」

タクミ「そうなんだ！」

シヨウイチ「深イ〜」

シンジ「深イ〜」

翔太郎「深イ〜」

フィリップ「ウーン」

アスム「深イ〜」

ワタル「深イ〜」

海東「ウーン」

夏海「……何してるんですかつ！？」

士「深イイ話ごっこだろ」

夏海「——そうじゃありません！」

士「じゃあ何なんだ！」

夏海「今、士君達がしているT O Gも、スマブラも！戦闘後に会話があるじゃないですか！！」

リンク「…会話というより、アクションなんだけど……スマブラは」

夏海「だけど、カービィだけだった！アクションなんですよ！？こ

れは、可哀想です…可哀想すぎます！！」

タクミ「そうなの？」

リンク「まあ、一応……」

士「大体分かった。——俺達が、テイ。ズ風に戦闘勝利後の掛け合いを考えてやるぜ！」

リンク「待て待て待て待てーッ！？」

ワタル「駄目だこの人！」

〃  
〃  
〃

ユウスケ「俺達は、負けん」

士「負けないし！」

海東「挫けないし！」

夏海「倒れないし！」

ユウスケ「…揃わなくても泣かないし」

シヨウイチ「…お前らは、合ってるなあ」

シンジ「ユウスケの不遇さが、特に」

ソウジ「ああ…」

カズマ「でも、なんかカービイっぽくないなあ」

士「じゃ、次！海東とアスム！！」

アスム「ええ！？」

アスム「師匠、【能天気】って何ですか？」

海東「それは、どんな天気でも晴れにしてみよう…神様の特殊スキルだね！」

アスム「師匠って凄いですね！」

ワタル「違和感がないのは何故」

カズマ「だよな」

士「乗ってきたな！次、海東とシヨウイチとソウジとワタル！！」

シヨウイチ「俺達は、」

ワタシヨウソウ「負けん」

海東「海東でーす」

シヨウイチ「殺意沸いた」

ソウジ「あれはパスカルだから許されるんだな」

ワタル「消えてください電王入りした男」

海東「Σひどっ！？」

ユウスケ「じゃあ、フィリップとカズマとシンジさん！」

フィリップ「カズマの服は、どうして白いんだい？」

カズマ「え？えっと…」

（数分後）

カズマ「あ、思い付いた！」

シンジ「おーそーい！」

士「…シンジ母さん」

シンジ「なんでそうなるの！？」

士「何となく」

夏海「では、シヨウイチさんとシンジさんで」

シヨウイチ「大丈夫か、シンジ？」

シンジ「シヨウイチさん……」

シンジ「——この優しさが、士にもあれば……」

ユウスケ「あ、……うん！」

リンク「そうそう」

翔太郎「だよな！」

シンジ「ね？」

士「……おい」

~~~~~

フィリップ「今思ったんだけど、TOGそのままじゃつまらないよ」
士「あ、じゃあ……」

士「ドワーフの誓い、第7番！」

カズマ「正義と愛は、必ず勝つ！」

翔太郎「それ嫌いなんだってばよー！」

ユウスケ「ちよろいぜ！」

ショウイチ「甘いぜ」

ソウジ「ちよろ甘ですね」

士「——か！？」

リンク「いや、作品変えろって意味でもないだろ」

フィリップ「あくまでテ。ルズ【風】なんだから、それっぽい会話を独自に考えないと」

ユウスケ「あ、そっか」

カービー「それ以前に、どんどん僕関係なくなってきたるよね？」

アスム「気にしないでください」

〃
〃
〃

デイケイド「そんなわけで、あえて変身して挑んでみた」
ブレイド「泣いていいかチーズ」

クウガ「まあ、生身で戦うことなんてあまりないしな…」
アギト「じゃあ、カブトムシコンビ行け」

ブレイド「運命の切り札は、」

カブト「天の道に在り！」

ブレイド「いや、どこだよそれ!？」

ディケイド「……ソウジ、お前天道のほうになってる」

カブト「そこは素直に謝ろう」

リンク「カズマ、どんどんツツコミが板についてきてまあ…」

ブレイド「じゃあ俺にツツコミ入れさせないように努力して!？」

ダブルCサイド『では、今度はキバと響鬼だ』
フィリップ

響鬼「ヒビキさんのためにも、」

キバ「父さんのためにも、」

響キバ「負けられない!」

キバット『にやー!』

ダブルJサイド「おいコラー!？なんかあそこに、台無しにした拳
句クライマックスヒーローズ状態の奴が!!」
翔太郎

キバ「キバット永久に眠ってください」

キバット『さあつと、ワタルの毒舌が俺様にもツ!？』

ディケイド「よし、次。龍騎とアギトのドラゴンコンビ」

全「…………え？」

クウガ「え、クウガがモチーフじゃないの…？」

ダブルCサイド『いや、それはG3だ』

ディケイド「ああ。ちなみに、クワガタ発言したのは津上翔一の中の人だ」

龍騎「っていうか、さっきやったのに…」

アギト「まったくだ。さーて、オリジナルオリジナル……っと」

龍騎「シヨウイチさん」

アギト「俺を呼ぶなあああッ！」

龍騎「…いや、今日の夕飯を聞きたかったんですけど…」

カブト「…………お母さん」

龍騎「なんで生粋のおかんまでもが…？」

ブレイド「事実、シンジって若干お母さん化してるよな」

龍騎「カズマがズボラだからです！」

キバール（ああ、もう既にお母さん口調…）

ディケイド「お母さんはさておき」

龍騎「Σ怒るよ！？」

ダブルJサイド「次は…クウガとファイズってのはどうだ？」

ダブルCサイド『それは面白そうだ』

クウガ「守るべきもののために！」

ファイズ「僕達は、負けません！」

ダブルJサイド「——あ、なんかアイクと被った？」
ダブルCサイド『だね』
クウガ「そんなこと言われても……」
ディエンド「じゃあ次は、僕と士だね！」
ディケイド「……」

ディエンド「士。今日こそ君のお宝をいただくよ」
ディケイド「だとさ、ダブル」
ダブルJサイド「俺達に振るな！」

キバラー「……3人掛け合いにグレードアップしましたね」
ディエンド「おのれダブル！」
ダブルCサイド『僕達を恨むのは筋違いだ』
ディケイド「ここから本番だ。折角【スマブラ】と銘打ってるんだ、
あいつらも足してやってみようぜ」
リンク「最初からそうして!？」

~~~~~

マリオ「よし、今日のご飯はキノコステーキだな！」  
龍騎「駄目です。栄養偏ってるじゃないですか」  
アイク「じゃあ肉だ」  
龍騎「結局一緒じゃん…」

マリオ「せめて、キノコスパ…」  
アイク「ビーフシチュウ」  
龍騎「駄目！今日の夕飯は、焼き魚と酢の物ッ！」  
マリアイ「ええー…」

ブレイド「……どこからどこまでが戦闘後の会話？」  
ファイズ「…さあ」  
アギト「『結局一緒じゃん』まで、だろうか…」  
カブト「ナチュラルに続いたからなあ…」  
ディケイド「じゃ、次！」

マルス「蒼き三剣士、」  
アイク「いざ、」  
メタナイト「…参る！」  
ブレイド「あれ、俺は！？」

マルス「ブレイドってキックやパンチ使うじゃん。ダメ」  
メタナイト「剣士たるもの、剣以外など邪道だ」  
ブレイド「…シンジお母さん、あの人達が苛める」

龍騎「誰がお母さんだ。——とりあえずさ、あんたらも掴み攻撃する際に羽根で攻撃したり、膝で蹴ったりしてるじゃん」

マルス「つ、掴みは仕方が…」

龍騎「リンク君は柄で殴ってるよ？」

メタナイト「し、しかしそれ以外は剣で」

龍騎「第一、アイクはアイクでパンチしたりキックしたりしてない？」

アイク「ぬうん（↑肯定）」

龍騎「ごめんなさいは？」

マルメタ「……ごめんなさい」

アイク「ぬうん（↑謝罪）」

クウガ「…本気でお母さんだ」

龍騎「カズマも混ぜてあげなさい」

マルス「はい」

メタナイト「わかりました」

アイク「ああ」

ブレイド「ウエェ（↑喜ぶ）」

龍騎「はい、次…リンク君とタクミ君とウルフ」

ファイズ「何、その【チーム狼】」

クウガ「あはは…」

ウルフ「この爪に敵うものなし！」

ファイズ「この輝きに、勝るものなし！」

リンク「このチェーンハンマーに碎けぬものはなし！」

ウルフ「って、オイ！」

ディケイド「…お前、そんなもの持っていたのか」  
リンク「ははは」

ファイズ「軽っ！」

ディエンド「さて、そろそろ…本題のカービイと行こうか！」

ディケイド「そうだな！…メンバーは、面白そうだし海東とアス  
ムとワタルでいいか」

リンク「あ、目的覚えていたんだ」

カービイ「ねえねえ、仮面ライダーっておいしいの？食べていい？」  
ディエンド「え、ちょ、もう食べちゃ…うわあああ！」

響鬼「ししょーッ！？」

ディエンド「…あつ、…こ、これは…お宝の山だッ！」

キバ「誰かどうにかして…」

ディケイド「カービイって、食いものネタから逃れられないのか？」  
カブト「多分、な」

カービイ「ねーねー、僕、今日オムライスでいい〜」

龍騎「…駄目！焼き魚と酢の物、食べない子は夕飯抜きッ！」

カービイ「ええ〜！？」

響鬼「っていうか、——皆さん師匠を助けてくださいよおおー  
！まだ中にいるんですからーッッッ！！」

## 余談

士「……MOVIE大戦2010のパンフレットの対談、あそこにあった写真の一つにソウジショウイチカズマシンジがいたんだが」  
ユウスケ「？」

士「あれが家族写真に見えた俺は末期なんだろうか」  
ユウスケ「……まず、誰がお母さんなのか考えようか」

File 11【陳情！勝利セリフでキャラを立てる】（後書き）

次回予告

カービィ「仮面ライダー、食べたい！」

ピット「いきなり何を言い出すのこの子はっ!？」

リンク「そういえばカービィは、相手を飲み込んだあと…その相手のB技を真似できるんだ」

タクミ「へえ…」

アスム「でも、それとこれとは話が別ですよ!？」

ワタル「のーみーこーまーれーるー!」

ソウジ「——あんた方どこさ、肥後さ、肥後どこさ、熊本さ、熊本どこさ、仙波さ」

カービィ「ぽよぽよぽよぽよ……」

ユウスケ「何、あの『あんたがたどこさ』!？」

シヨウイチ「Σソウジが遂にご乱心だーッ!？」

NEXT・・・File 12【陳情！コピー騒ぎで再来・カブト注意報】

## File 12【陳情！コピー騒ぎで再来・カフト注意報】

カービィ。

それは、恐らくポケモンよりも謎の生き物。

体長約20cmの体だが、見かけによらず大変大食い。

一説によれば、カービィの胃はブラックホールに通じているとか……

とにかく不思議な生き物なのである。

カービィ「仮面ライダー、食べたい！」

ピット「いきなり何を言い出すのこの子はっ!？」

カービィ「食べたいよ！食べたいよ！！食べたいよっしたら食べたいよ……!!」

リンク「……買っちゃいな、買っちゃいな、買いたくなったら買っちゃいな」

マリオ「Σこらっ！そのマロマーケットハイラル店中毒者!!」

ヨッシー「カオスですねえ」

~~~~~

ピット「そんなわけで。以前、勝手に僕達をFFRした罪を償う意味でも、食われてください」

士「……大体意味がわからん！」

リンク「あ、でもカービィ。仮面ライダー食べるに当たって一言ワタル「Σもう食べる前提なんですか!？」

カービィ「ふぁい？」

リンク「——タクミに手え出したら全力で絞めるからな」

カービィ「いえっさー！」

リンク「……ってなワケで、じゃ」

夏海「ちよつと待ってー！」

ユウスケ「え、ちょ、それってタクミ君しか安全が確保されないってこと!？」

士「お前、せめて一緒に長く旅した俺に何もないのか!？」

リンク「……士は仲間、タクミは友達!以上!」

士「友達なら守るのかこの野郎!？」

サンダース「……ダース……」↑威嚇

フングメモリ「キー」↑上に同じく

カービィ「うわああん、なんか怖いよー！」

カズマ「サンダースとフング相手じゃなあ……」

〃
〃
〃

カービィ「まあいいや！それじゃ、残りのほうを…じゅるる」

シヨウイチ「俺は食っても美味くないぞ！…あの夏ザボン、あれがオススメだ！！」

夏海「私を売らないでくださいよ！？」

士「……ああ！ナツミカンは、食い応えがあるぞ！！」

夏海「…アギトの世界でおいしい汁は出ない、とか言っておきながら…？」

アスム（アギトの世界はアブノーマルの世界ですか？）

タクミ「大丈夫かなあ…」

リンク「カービィは排出いいし大丈夫だよ。…たまにそのまま残ってることも歩けど」

シンジ「いよいよ不安になってきたな」↑と言いつつ、カメラ装備
フィリップ「ゾクゾクするねえ」

カービィ「それじゃあ、————いーただーきまーす！ー！」

ギョゴオオオオオオオオ！！

士「うわーっ!?!」

翔太郎「な、何だ!このサイクロンジョーク……サイクロン式ソウジ機は!?!」

アスム「掃除機です、翔太郎さん!」

ワタル「ツツコミ入れている場合じゃないですよ!?!」

カズマ「うわー!うわー!うええええー!?!」

ショウイチ「吸引力が凄すぎるだろおお!」

ソウジ「死ぬ気で走らないと、……ほら」

ユウスケ「ぎゃあああーあああーああああーツツ!?!」

カズマ「ユウスケーツ!?!」

士「っしやあ!これで一旦、バキューム攻撃が消える!」

夏海「ユウスケ、グッジョブです!」

海東「たまには役に立つんだねえ」

ワタル「は、薄情すぎる……」

ユウスケ「ギヤアアアー!……あぐおっ!?!」

カービィ「ごっくん」

^{クウガ}
Kカービィ「……うおりゃー!」

士「な……姿が、変わった……カメンライドか!?!」

マリオ「あれがカービィのコピー能力。頭身的な都合で、姿そのものまでコピーはできないが……基本能力は反映される」

士「……ピンクで……変身、……俺のアイデンティティが……orz」

海東「おや、次の犠牲者は決定かな」

タクミ「というか、ユウスケさんは!?!」

ピット「大丈夫。あそこに排出されてるから」

ユウスケ「……まさにブラックホール」

カズマ「大丈夫かよ……」

シンジ「あ、……ちょっと入って写真撮りたいかも」

カズマ「シンジ？シンジー！？」

カービィ「クウガこんぷりーとっ（変身解除）……じゃあねー、

次！行ってみようか！！」

仮面ライダー「うげっ！」

カービィ「いーただーきまーす！」

夏海「きゃあああああー！？」

ショウイチ「ぎゃあああああー！」

リンク「そういえばカービィは、相手を飲み込んだあと……その相手のB技を真似できるんだ」

タクミ「へえ……」

アスム「でも、それとこれとは話が別ですよ！？」

ワタル「のーみーこーまーれーるー！」

士「俺の、アイデンティティをよくも……。……貴様なんか、貴様なんか……」

ワタル「士さん！？」

士「貴様なんか、ソウジでも食つとけえええー！！」↑ソウジ蹴り飛ばす

ソウジ「ぐふっ！？」

ショウイチ「何してるんだ貴様はああああーッ！？」

カービィ「はあーい！」

カブト
Kカービィ「……ふっ」

ソウジ「……」↑地面に倒れている

ユウスケ「……あああ……ソウジさんが……」

シヨウイチ「……まずいな（ボソリ）」

海東「でも、カブトの利点は回し蹴りによるライダーキック。… B
技なんて言う簡単なもので、クロックアップは出来ないだろう」
マリオ「まあ、最後の切札クラスならクロックアップはありえるん
だけだな」

士「実証するのに一番分かりやすいのは、ブレイドか？ ディアーサ
ンダーとか」

カズマ「ウエ！？」

シンジ「……写真…（キラキラ）」

カズマ「撮ってこないからな！？ 目を輝かせても駄目！ 駄目ったら
駄目ー！！」

海東「あ。……案外アギトとか」

シヨウイチ「……」

ユウスケ「……」

タクミ「……」

アスム「……」

ワタル「……」

士「おいおい、どうしたんだお前達」

カービィ（変身解除済み）「どったの？」

リンク「いや、後ろ……」

カービィ「？」

ソウジ「——ピンクの悪魔共、潰す」

士「ぎゃああー!？」

夏海「ソ、ソウジさん!？」

海東「……なんだろう、あのアルティメットD並みの殺気は」

シヨウイチ「お前達のせいだぞ…ピンクの悪魔共」

ユウスケ「…土が、ソウジさんを盾にするから……」

アスム「怒らせてはいけない相手が、怒ってしまったじゃないですか…」

ワタル「もう知りませんよ」

ソウジ「待てピンク玉」

ぐわしっ!

カービィ「あきやー!？」

ソウジ「——あんた方どこさ、肥後さ、肥後どこさ、熊本さ、熊本どこさ、仙葉さ」↑高速「あんたがたどこさ」

カービィ「ぽよぽよぽよぽよ……」

ユウスケ「何、あの『あんたがたどこさ』!？」

シヨウイチ「Σソウジが遂にご乱心だーッ!？」

ソウジ「仙葉山には狸がおつてさ、それを漁師が鉄砲で撃つてさ、煮てさ、焼いてさ、食つてさ」

カービィ「ぽよぽよぽよ……」

ソウジ「それを木葉でちよつと被……セッッッ!」

士「ぐはあッ!？」

カービィ「ぴゃああああん!」

ユウスケ「ストライク!バッターアウト!」

ワタル「ソウジさん懇親の、ディケイドドッジ……いえ!カブトドッジが当たりました!」

アスム「2583のダメージ!相手の門矢士は倒れた!」

くくく

カービィ「あきゅうつうつ」
士「うぐぐ…」

リンク「二人共、気絶してるなあ」
ピット「当然の末路だね」
アスム「ソウジさん、どうどう」
ユウスケ「大根食べて落ち着いてください」
ソウジ「——ッああ……」

シンジ「…」
カズマ「おい、シンジ君？まさかとは思っケド……何をしようとして
いるのかな？」
シンジ「——今こそシャッターチャンス！カービィの中、……撮
らせて頂きますッ！！」
カズマ「今回一番の輝きを、ここで見せるな——ッ！？」

海東「止めなくていいのかい……？」
リンク「…カービィの自業自得だ」

マリオ「それに、あいつにプライバシーなんてあつてないようなものだし」
ヨッシー「それに僕達も、カービィさんの胃袋…知りたかったんですよねえ」
ピット「シンジさんも胃の中に収まること覚悟でああ言ってるので、止める権利はないかと」

カズマ「どうでもいいから止めて！？ちよつ、……もうやだあああ
あ！チーズのピンボケ写真も含め、【仮面ライダーディケイド】におけるカメラマンってこんなものばかりなのかー！？」
シンジ「離せカズマ！今を逃がせば、もう二度とチャンスは…チャンスはないんだあーッッッ！」
カズマ「——うわあああああん！アスムー！！ワータルー！！！」

アスム「どうします？止めたら、後でシンジさんに殺されますよね」
ワタル「でもあのままだと、カズマも胃の中に収まりそうですし…とりあえず今は一緒に止めて、カズマがいない時にまたカービィの中に入れさせれば？」
アスム「ですね」
ワタル「じゃ、【一応】今だけ助けておきますか」

海東（……少年君、キバの王子に感染されすぎだよ）

File 12【陳情！コピー騒ぎで再来・カフト注意報】（後書き）

次回予告

海東「自信があるのなら、来るといい！士！！」

士「うおおおおー！！」

士「おい、なんだあの道場破り？」

ユウスケ「いや、お姫様だから！」

夏海「あの、どうしたんですか？」

ピーチ「決闘を申し込みに来たのよ！」

海東「え？」

シンジ「…ぶっふー」

ショウイチ「…バフー」

NEXT・・・File 13【恐怖！ピーチのポイズンクッキング】

File 13【恐怖！ピーチのポイズンクッキング】

士「…よし…これで、終わりだ」

海東「ふふふ…そう簡単に行くかな？士…」

士「運命さだめの切札は、俺のものだ！」

海東「自信があるのなら、来るといい！士…！」

士「うおおおおー！！」

シュツ！

士「——ぐあああああー！ファイズーッ！！」

海東「残念だったね士！さて、僕はゆっくりとブレイド狙いで行くか」

シヨウイチ「俺持ってないけどな」

海東「なん…だと…！？嘘だッ！」

シヨウイチ「マジだ！」

夏海「あの…何やってるんですか？」

ユウスケ「いや、ディケイドとディエンドのカメンライドカードを使ってババ抜きしてるんだ。ちなみに、ババことジョーカーは……スカル」

翔太郎「Σおやつさんを勝手にババにするなよ！？」

フィリップ「しかし、ディエンドはとかくディケイドのカメンライドカードは少ないだろう？よくゲームが成立したね」

（ディケイドは【一応】MOVIE大戦2010のを主役級に限

り使っていますが、サブライダーは全てディエンドのものです）
カズマ「うーん、確かにギャレンとかゾルダとか…土が持っていないカードはあるけど、その場合

ゾルダ×王蛇

ファム×リユウガ

イクサ×ライジングイクサ

レンゲル×ギャレン

カリス×グレイブ

ラルク×ランス

G 3 × G 4

ギルス×アナザーアギト

オーガ×サイガ

……みたいな感じで、接点のあるもの同士で抜けられるルール」

タクミ「しかも、FFRカードも混じってきましたからね…」

シンジ「更には、【オールライダー】と【CC／JJ】で役を作る
と言う大暴挙」

夏海「Σもう、ババ抜きとか関係なさ過ぎません!？」

ユウシンカズタク「でも俺（僕）達、ちゃんと抜けられたから」

夏海「……参加していたんですね」

ピーチ「たのもー!!」

士「おい、なんだあの道場破り？」

ユウスケ「いや、お姫様だから!」

夏海「あの、どうしたんですか？」

ピーチ「決闘を申し込みに来たのよ！」

海東「え？」

士「フツ、女だからって手加減しないぜ！」

ピーチ「あなたじゃないわ。——天堂ソウジ！あなたに、ケーキ作りの決闘を申し込むわ」

ソウジ「——それは決闘ではなく、血糖になりそうだな」

シヨウイチ「誰がうまいこと言えと！」

ワタル「なんでケーキなんです？」

ピーチ「だってこの人、ケーキ作ってたじゃない！……女として、勝負を申し込まずにはいられないわ！！」

アスム「……ああ、そういえば、作ってましたねえ……」

夏海「本当に、お店に出していいレベルのケーキでしたよ」

ソウジ「うーん、困ったな。……実はもう、おやつにアップルパイを作った後なんだ」

ユウスケ「準備いいですね！？」

ピーチ「いいわ！私も、既にケーキを作ってもってきた後だもの……
ティータイムも兼ねて、実食よ！！」

カズマ（この人も凄いご都合主義だなあ……）

リンク「ちよっ……待ったー！」

アイク「やめろ！全員……死ぬぞ！？」

ネス「駄目ええええー！！」

士「なんだって？」

夏海「どういことなんですか？」

リユカ「ピーチ姫の料理は……どんな超人でも葬り去ると評判の、地獄料理なんです……！」

メタナイト「……食べない方が、身のためだ」

デデデ「あれはまずい。二重の意味で、大変まずいぞい！」
ルカリオ『……灰になったり、緑色の血を出したり、粒子化したり、ゲル状になって消えたりするぞ』

ピーチ「もう、失礼ね！今日はちゃんと、分量測ったんだから」
翔太郎「まずそこからかよ！？」

フィリップ「……検索の結果、死亡確率は極めて高い。猛毒・麻痺・火傷・石化・鈍足・封印・氷結・呪殺・虚弱……状態異常のオンパレードだ」

シンジ「…オンパレード超えてない？」

ソウジ「——とにかく、まあ……食べないことには始まらないな」

~~~~~

ピーチ「さあ、どうぞ」

謎のケーキが現れた！

どこことなく、腐った蜜柑のようなにおいがするぜ！！▼

ソウジ「冷蔵庫に入れていたから、少し冷えているんだが…」

アップルパイが現れた！  
シナモンアップルのいい香りがするぞ！！▼

リンク「——ソウジさんの食べたいです！ピーチ姫のは、要らん！！」

タクミ「うわっ、リンク断言した！！」

メタナイト「だが、気持ちは分かる……」

カズマ「……マジ勘弁」

ユウスケ「いやいや……土のケチャップと醤油をぶちかました挙句に砂糖を投下したビーフシチューよりは……」

士「何言ってるんだ！カレー以外でんで駄目なお前に、言われたくないぜ！！」

シンジ「とりあえず一口……」

シヨウイチ「ああ……」

シンジ「……ぶっふー」

シヨウイチ「……バフー」

海東「一口だけで嘔いたーッ！？」

シンジ「ごめ、これ、食べられるってれれれべるるるる」

↑麻痺＋鈍足

シヨウイチ「ゴフツ、ゲフツ、……グハツ！？」↑猛毒＋虚弱

カズマ「嘘だろ……ユウスケのバイオレンス・おにぎりを食べても顔を顰めるだけだったシヨウイチさんが！」

ソウジ「……翔太郎のコーヒーを飲んで『個性的な味』としか言わなかったシンジが」

翔太郎「いや、俺のは飲めないってレベルじゃないだろ！？」

ユウスケ「俺のは砂糖と塩を間違えて、ついでに…中身にポケットの中に入っていた生キャラメル入れただけだよ!!」

ピーチ「ほらほら、皆食べて!——食べないと、カービィから鍋を借りて煮汁出すわよ?」

アスム「……臨兵闘者皆陣列在前……!」

ワタル「アーメン!アーメンツ!!」

士「遂には子供も祈りだしたぞ…どれだけなんだ……」

翔太郎「つか、リンクその他ファイターズは全員してソウジのアップルパイに食いつきやがった……!!」

フィリップ「これで僕達には、【死】しか道が残されなくなった」

カズマ「…ええーい、とりあえずもうヤケクソだー!!」

全「「ぶつはああああツツ!!?」「」

ワタル「……」↑猛毒+氷結

海東「兄さん、兄さん……兄さんにいさんニイサンniiisan

2-3……」↑麻痺+封印+石化

アスム「わ、ワタル!ししよ……ガクツ」↑呪殺

士「…ここが俺の死に場所、か……」↑鈍足+火傷

タクミ「由里、ちゃ……」↑麻痺+氷結+猛毒

翔太郎「——ああ、おやっさんが川の向こう側で手を振っている

ぜ……」↑封印+猛毒

夏海「……」↑石化

フィリップ「駄目だ、翔太郎…行くな……行く…ガクツ」↑鈍足+

氷結

カズマ「……ぐがっ!?」↑猛毒+麻痺+呪殺

ソウジ「……マズツ」↑封印

ユウスケ「……。……」

シヨウイチ「おい、ユウスケとソウジ以外ほぼダウトだぞ」

シンジ「ありえな……。ゲホッゲホッグアバッ」

ソウジ「ユウスケ、平気なのか？」

ユウスケ「いや、あのさあ、——俺だけかもしれないけど……ダメ  
ージが後から来るんだyyy yyy yyy yyy yyy」↑鈍足＋猛毒＋封  
印＋麻痺＋呪殺

シヨウイチ「ユウスケーッ！！？」

ソウジ「安心しろ、……。俺も……後から体が凍りつい……」↑追加  
効果：氷結

リンク「……ッ、……。涙が出るほどおいしい……」

ルカリオ「あの姫では到底作れない味だ……！」

デデデ「おかわりぞい！」

メタナイト「……」↑感涙

アイク「……逆に、士達には悪い事をしたな」

（（（

ソウジ「——まず、何を入れたらこうなるんだ？」↑寒いので半

纏装備

ピーチ「ええつと、卵にお砂糖にメープルシロップにフルーツカクテルにチョコレートも入れたかしら？それから、味覚を引き立たせるために塩コショウとバニラエッセンスとイチゴジャムとヨーグルト……」

カズマ「うつわ、糖尿病確定じゃん!？」

シンジ「最低だ……」

リンク「【最悪】じゃなくて？」

士「こりゃあ、ユウスケのおにぎりより酷いな」

ユウスケ「お前が言えた義理か!？」

海東「これだったら、まだキバの王子の“あれ”が可愛いもんだよ」

アスム「ですよねえ……」

ユウスケ「ああ……」

ルカリオ『どうした?』

海東「いやね、僕達はまかない当番を決めて料理をしているんだけど……先日はキバの王子が作ってさ……」

アスム「僕、悪い意味であの……あの生のままで入ったビーフ入りのオムライスは、忘れません」

ユウスケ「しかも、……ライスはケチャップベースでもサフランベースでもバターベースでもなく……トマトを丸ごと3個潰してるんだぜ……」

フィリップ「あれは一応、肉が生であることを除けば……食べられたよね」

翔太郎「……ライ스가トマトのせいで水っぽかったけどな」

ピーチ「くうつ……まさか、こんな【僅差】で負けるなんて」

士「Σいやっ、——圧倒的にお前の負けだーッ!」

翔太郎「そもそも、ソウジさんと比べること自体失礼すぎる!」

フィリップ「確かに！」

リンク（あ、フィリップ君も断言した）

ピーチ「でも、その青い彼になら勝てる気がするわっ！」

カズマ「…俺かシンジかシヨウイチさんかアスム君かはつきりしないと、分らないんだけど」

海東「ちなみに僕はシアンだよ」  
デューエン下

ピーチ「私の言葉に反応を返したあなたよ！あなたになら、確実に勝てる！！私の勘は当たる！！」

士「……まあ、俺がブレイドの世界に来た当初のカズマだったら勝てるわけでもないな、あなたのほうがきつと100倍不味い」

ユウスケ「シヨウイチさんも、結構料理できますよね？」

シヨウイチ「簡単なものならな」

夏海「アスム君も自炊能力高いですし」

アスム「ヒビキさんに作られましたから」

ピーチ「じゃ、そのオレンジの人」

翔太郎（あーあ、シンジ狙われた）

シンジ「あの、はつきり言っておきます」

カズマ「ああ、はつきり言っておく」

シンジ「——あなたに負けるほど俺の料理は不味くない」

カズマ「——あんたに負けるほどの料理だったら、俺は生きていない」

サンダース「……ダース」↑ピーチへの攻撃姿勢

リンク「……事実、シンジさん料理上手いよ」

翔太郎「余り物でも美味しい物作るしな……」

士「シンジは上京組で、自分で作る派なのか？」

シンジ「…っていうか、単に自分で作ったほうが節約できるっていうか…」

カズマ「うん、美味かった。サンダーも普通に食べてた」

ピーチ「くっ…だったら、今度会う時までにおにぎりを作れるようになっっておくわ！その時に、また勝負よ！！天堂ソウジと芦河シヨウイチと剣立カズマとアスム君と辰巳シンジ！！！」

リンク「Σ人数増えた！！」

タクミ「…っていうか、レベルが格段に下がってる！あの、そこ普通ケーキのリベンジじゃないんですか！？」

ピーチ「…またな！」

リンク「どこの芸人ッ！？」

シヨウイチ「……。…ところでおにぎりは何派だ？俺は梅干」

ソウジ「…昆布だな」

アスム「おほかです」

カズマ「うーん、結構あるけど…ツナマヨ？」

シンジ「好き嫌いはないなあ…あ、でも、…高菜かなあ」

夏海「逆に、やる気になってません…？」

ユウスケ「いや、夏海ちゃん。——あれただ単に、おにぎりトークしてるだけだよ……」

ワタル「エビマヨです」

タクミ「えっと、…梅干かな…」

ユウスケ「かくいう俺はツナマヨ派！」

### File 13【恐怖！ピーチのポイズンクッキング】（後書き）

#### 次回予告

海東「そういえば、亜空の使者でのムービー【五人の戦士】…あれは戦隊臭が物凄くした」

士「聞き捨てならないな。俺達も、レッツ・戦隊！」

カズマ「……俺はもう、諦めよう」

士「——たまには俺がレッドでもいいだろう！駄目なら、シルバーだ——！」

海東「いいや、士のポジションはピンクにしなければならない！これは、もう決定事項だ——！」

ユウスケ「俺も、できればレッド！」

ワタル「僕もレッドがいいです」

アスム「じゃあ…僕は、響鬼紅になります！」

シンジ「——いつでも赤になれる人達は、一生赤になれるカズマに一回譲ってあげなさいっ！」

カズマ「Σウエエエッ！！？」

ユウスケ「シンジさん！シンジさんが何気に一番酷いです——！」

N E X T . . . F i l e 1 4 【陳情！どうしてカズマは青いのか】

#### File 14【陳情！どうしてカズマは青いのか】

士「ついに公開されたな、3DS！」

ユウスケ「うんうん、何かリアルだった！」

海東「あれはいいお宝だ」

ワタル「発売日が楽しみですな」

リンク「……だけど、第一士達は今【スマブラの世界】にいるわけだし」

ピット「3DSはここじゃ出ませんよ」

海東「なん…だと!？」

士「くそっ！そりゃあそうか、任天堂が任天堂の中で任天堂のゲームを任天堂の奴に売る初がない……!!」

ユウスケ「しかも、世界ごとに時差は確定だろうし…うわっ、世界によつては数年先とか十年以上も先つてことも!？」

カズマ「うえっと、……その場合は…ダブルの世界が一番早いのか？」

フィリップ「いや、その場合は新作のオーズ（仮称）だね。…ファイズと被るなあ」

翔太郎「もういい！これ以上、ファイズのアイデンティティを奪うな!!」

シンジ「あ、そーだ。新作発表おめでとう」

リンク「どうもありがとうございます」

ピット「いやあ、まさか出るなんて思いませんでしたよ」

ソウジ「……【パルテナの鏡】って、…俺が8つぐらいの時に出たゲームだったつけ……？」  
シヨウイチ「あれは、前半が泣きを見るゲームだった。後半はそうでもないが」  
カズマ「バーチャルコンソールでも出てなかったつけ」  
シンジ「GBAでもあったけど」  
アスム「すいません、話の意味がまったく分かりません」  
ワタル「はい…」

ユウスケ「ムービーもカッコよかったよなあ！」  
ワタル「そしてナス（笑）」  
ピット「リンクさん、僕心からワタル君と一緒にじゃなくてよかったって思った」  
リンク「俺もだ」  
海東「ムービーねえ……」  
ユウスケ「どうしたんだ？」

海東「そういえば、亜空の使者でのムービー【五人の戦士】…あれは戦隊臭が物凄くした」  
士「聞き捨てならないな。俺達も、レッツ・戦隊！」  
カズマ「……俺はもう、諦めよう」  
リンク「なんで？」  
ピット「…ブレイドは、青色が基本で…」フォームは+金、キングフォームなんか完璧に金で……赤の要素が全くないんだって」  
リンク「ああ…」  
ピット「っていうか、あのムービーって正直…緑は2つもいらねえ状態でしたよね」  
リンク「俺の存在全否定か」

ピット「でも、あの地点だとフリーのブルーやブラックはいません  
でしたし……ソニックサボリだし」

~~~~~

フリリップ「さて、戦隊ポジションンカラーを中心としたものを纏めてみたよ」

クウガ↓赤、緑、青、紫、黒、金

アギト↓金、赤、青、銀

龍騎↓赤、黒

ファイズ↓黒、赤、白

ブレイド↓青、金

ヒビキ↓紫、赤

カブト↓赤、黒、銀

電王↓赤、青、金、紫、白（水色？）

キバ↓赤、黒、青、紫、緑、金

ディケイド↓桃、黒、銀

ディエンド↓青、黒、黄

キバラー↓白、紫

ダブル↓黒、緑、赤、銀、金、青、白

ピット「うつわ、面倒臭い！」

リンク「……ダブルは汎用性高いけど、二人で一人だから実質こちや混ぜカラーになっちゃうな」

フィリップ「大丈夫、ロストドライバーがあるから」

翔太郎「Σ何処から持ってきた!？」

アスム「これで考えてみると、

龍騎↓赤

ブレイド↓青

ディケイド↓ピンク

アギト↓黄色と強引に言い切れる金

ファイズ↓黒と強引に押し切る

……が、ノーマルフォームで安定していますよね」

士「ディケイドはマゼンタだ！」

アスム「いや、知ってますけど……戦隊じゃマゼンタも桃色も全てが【ピンク】じゃないですか」

ソウジ「それから、最強フォームだと

ファイズ↓赤

ディエンド↓青

ディケイド↓ピンク

ブレイド↓金だけど黄色と言い張ろう

キバラー↓白

……で、いいかもしれないな」

海東「ディエンドはシアン！」

シンジ「ハリケンブルーやマジブルーも、水色だけど【ブルー】だしー！」

リンク（皆が何の話をしているのか分からない）

士「しかし、ちょっと言いたい事がある」

ユウスケ「どうしたんだよ？」

士「——たまには俺がレッドでもいいだろう！駄目なら、シルバーだー！」

海東「いいや、士のポジションはピンクにしなければならない！これは、もう決定事項だー！」

ユウスケ「恨むなら、ディケイドのピンク色を恨め！」

士「……マゼンタだっ！」

リンク「士のこだわりって、おかしいよな」

ピット「マリオさんみたいなもんですよ」

士「だが、男なら誰だってレッドに憧れるだろう！？」

タクミ「まあ、確かに……」

ソウジ「そうだな」

シヨウイチ「気持ちは分からないでもないな」

ユウスケ「俺も、できればレッド！」

ワタル「僕もレッドがいいです」

アスム「じゃあ……僕は、響鬼紅になります！」

海東「じゃあ僕も」

シンジ「ちよっと！？皆でレッド希望しちゃったら……」

ピット「收拾が付かなくなりますよ！」

シンジ「違うッ！」

カズマ「……いいもん、いいもん。俺はブルーでいいもん…」

シンジ「——あれを見て、可哀相とは思わないのかッ!？」

士「別に」

ユウスケ「Σちょ!？」

シンジ「…辰巳家秘伝…」

フィリップ「ちよつと待った。今ちよつと士にピッタリのツボを検索し終えた」

全「え？」

フィリップ「じゃあ、リンク、ゴー」

リンク「……リンク一族秘伝、——【眠りのツボ】おおッ!」
士「Σあむらばっ!？」

士「…ZZZ…」

タクミ「うわっ、眠った!？」

海東「い、今の技は？」

フィリップ「君達は疑問に思わないのかい？昼夜問わず奔走するリンク一族が、いつも何処で寝泊りしているのか」

ユウスケ「えつと、……ダンジョンの中、とか？」

フィリップ「そうだ。ダンジョンだけではなく、フィールドや他人の家にも該当する。しかし、彼らは年中無休で働いていてもなお、元気だ」

ソウジ「ふむふむ」

フィリップ「彼らは、【眠りのツボ】により自己の睡眠時間とそれによる体力回復のコントロールができるそうだ。ツボの力強さによつては、1ヶ月近く眠る事もあるらしい」

翔太郎「…リンク、お前…何%で加減した？」

リンク「…12%？」

ショウイチ「微妙だな！？」

フィリップ「それだと、土は半日眠り続けるだろうね」

ワタル「12%で半日なんて、じゃあ100%は何なんですか…」

シンジ「土はどうでもいい」

ユウスケ「言い切った！？」

シンジ「それよりも、ディケイドはマゼンタは赤の仲間とか言い切れば何とかなるだろうけど…赤系の要素を一切持たないライダーだっているんだよ？」

カズマ「いーじゃん、いーじゃん、うええあうえー…」

ソウジ（クライマックス刑事か）

シンジ「俺は子供の頃、イエローになりたかった」

アスム「どうしてですか？」

シンジ「…カレー食べられるから」

ショウイチ「Σイエローじゃなくても食えるだろおおッ!？」

シンジ「でも、俺…龍騎だし赤しかないし、サバイブになれば他の色も入るけどブラックしかOKされなかったし！」

ショウイチ「カレー食べただけだったら、別にいいだろ…」

シンジ「煩いデフォルトグリーン（ギルスのこと）！」

ショウイチ「俺だって好きでギルスになったんじゃないッ！」

シンジ「第一、ダブルはともかくショウイチさんは贅沢だよ！グリーンブルーレッドイエローブラックゴールドシルバー！！何にでもなれる！！」

ショウイチ「グリーン（ギルスのことです）にはなりたくなかったがな！！」

ソウジ「…あーもう、二人共落ち着け」

シンジ「第一、土とかユウスケは普段着で赤じゃん」

ユウスケ「それ言っちゃったら、シンジさんオレンジになりますよ！？」

シンジ「とーにーかーく。——いつでも赤になれる人達は、一生赤になれないカズマに一回譲ってあげなさいっ！」

カズマ「Σウエエエツ！！？」↑大ショック

ユウスケ「シンジさん！シンジさんが何気に一番酷いです！！」

カズマ「うえあああああーッ！」↑逃走

タクミ「か、カズマさーん！」

ソウジ「お、追いかけるぞ！」

シンジ「カーズマー！土達が悪いなら謝るからー！！」

ショウイチ「Σ明らかに貴様のせいだああああッ！」

ユウスケ（ショウイチさんっていつも全力のツツコミだけど、よく喉疲れないなあ）

リンク「……そして次回へ続く」

ピット「えっ、続くの！？」

続きません

File 14【陳情！どうしてカズマは青いのか】（後書き）

次回予告

シンジ「ケータッチって、ライダーじゃなくても9つ揃ってればいいのかな？」

【KUGA BLADE RYUKI KIVA HIBIKI
KABUTO KUGA KIVA AGITO RYUGA
BLADE FAIZ KAVA】

士「あれっ、今リユウガ混じったぞ！？」

海東「自分がリユウガと認めたか！？」

ユウスケ「いや、“龍騎”と“クウガ”をタッチしただけだから！
ソウジ「……むしろ今、『カバ』とか聞こえたが気のせいかな？」

アスム「あ、じゃあこんなケータッチはどうですか！？」

【SISYO SISYO HIBIKI - SAN ZANKI -
SAN SISYO】

ワタル「——師匠がいくつあるんですかッ！？」

ソウジ「……リンク、何かいい案はないかな？」

リンク「——夏海・八代（陶子）・ビートル・レン・ハジメ・由里・コハナ・おばあちゃん・デビキ（牛鬼）」
士「Σちよっ！？」

N
e
x
t
.
.
.
F
i
l
e
1
5
【
C
o
m
p
l
a
t
e
.
ケ
ー
タ
ッ
チ
】

File 15【Complate・ケータッチ】

士「行くぞ、ユウスケ…」

ユウスケ「いつでも来い！士！！」

海東「それじゃあ、レディ……ファイッ！！」

士「クウガアギト龍騎カブトブレイドブレイドカブト電王アギトキバアギトファイズカブト龍騎カブト電王響鬼クウガ！」

ユウスケ「よし、はああ…、つしやあ、フツ…、ウェイ、ウェイ、フツ…、行くぜ、はああ…、にやー、はああ…、イエアー、フツ…、つしやあ、フツ…、行くぜ、たあー、よし！」

ユウスケは高速で各ライダーのポーズをしていますが、文章では説明しづらいのでCMH基準での口癖で解説しております

士「やるな」

ユウスケ「まだまだ！あの時から、俺は特訓を積み重ねてきたんだ…！！」

士「だが、次はできるかな？」

ユウスケ「やってみせる！」

海東「もう一回…レディ、ファイッ！」

士「クウガファイズ電王龍騎カブトファイズカブトカブト響鬼キバ

アギトブレイド」

ユウスケ「よし、イエアー、行くぜ、っしやあ、フツ…、イエアー、フツ…、フツ…、たあー、にやー、はああ…、ウェイ！」

士「……クウガ龍騎龍騎ピットアギトファイズリンクゼルダマリオキバ響鬼龍騎シンジカズマシヨウイチソウジワタルアスムタクミモモタロス俺ナツミカン海東リンクユウスケデイドー！」

ユウスケ「よし、っしやあ、っしやあ、……えっ！？…はああ…、イエアー、えっ…エアー、……ええっ！？ヒウウー…あっもう終わってる！？ええっと……にやー、たあー、っしやあ、——また戦ったのかこの人殺し！何処まで俺を馬鹿にするんだ！俺に何を！ん？キバット！師匠！やつめるおおお！俺参上！大体分かった、笑いのツボ、……エアー、…あねさん！ウッキー！！」

士「85点。まだまだだな！」

ユウスケ「いや、つか、途中からメチャクチャ仮面ライダーじゃなかったよな！？」

海東「と言つか小野寺君。今、僕だけ堂々とスルーしたよね？」

リンク「と言つか、……シンジさんとカズマが長すぎたのによく他の人の順番を覚えてたね？」

シヨウイチ「……カズマは『チーズ』で済ませられなかったのか？」

ソウジ「それを言ったら、シンジは『レンさん』でもいいな」

士「ソウジもやるか？」

ソウジ「ほう」

シヨウイチ「やめろ！させるな！……つか、こいつは本当にコンプリートできそうで怖い！！」

~~~~~

夏海「っていうか、何でケータッチごっこをしているんですか！」  
士「違う、カメンライドごっこだ！」

夏海「似たようなものです！」

タクミ「それにしても、ケータッチかぁ」

カズマ「見れば見るほどPS……」

ワタル「やめてくださいカズマ、それ、皆思っていることです」

シンジ「ケータッチって、ライダーじゃなくても9つ揃っていればいいのかな？」

【KUGA BLADE RYUKI KIVA HIBIKI  
KABUTO KUGA KIVA AGITO RYUGA  
BLADE FAIZ KAVA】

士「あれっ、今リユウガ混じったぞ！？」

海東「自分がリユウガと認めたか！？」

ユウスケ「いや、“龍騎”と“クウガ”をタッチしただけだから！」  
ソウジ「……むしろ今、『カバ』とか聞こえたが気のせいかな？」

夏海「でも、私も何かコンプリートしてみたいです」

士「やめとけ、どうせ女性ライダーでもコンプリートする気なんだろうが……生憎女性ライダーは少ない。というか、お前やファム、朱鬼ぐらいだ」

ユウスケ「……タックルは？」

士「ライダー扱いしていいのか微妙なラインだ」

カズマ「だったら、龍騎系統はいけるんじゃないか！？9人以上いるし、カードだし、なんか強そうだ！」

シンジ「……龍騎コンプリートフォーム……なんかやだなあ」

ソウジ「カブトコンプリートフォーム」

シヨウイチ「やめてくれ、CFなんてディケイドやディエンドだから似合うようなものなんだ」

士「お、嬉しいこと言うじゃないか」

海東「確かに。僕達みたいな選ばれた人間こそが、相応しいよ」

翔太郎（……芦河さんの発言って、確実に皮肉だよな）

フィリップ（だろうね。しかし、士も海東大樹も単純だ）

夏海「でも、悔しいです！…私達も、何かをコンプリートしてみましよう！…」

ワタル「する必要あるんですか？」

夏海「だって、このままじゃ疎外感満載です」

ワタル「それって、（ディケイド参入ライダーの）夏海さんだけですから」

アスム「あ、じゃあこんなケータツチはどうですか！？」

【SISYO SISYO HIBIKI - SAN ZANKI -  
SAN SISYO】

ワタル「——師匠がいくつあるんですかッ！？」

士「待て待て、アスム！」

ワタル「士さん！……期待していないけど、一応アスムを止めてください」

士「——ケータッチは8〜9がベストだ。それ以上やそれ以下は、認めん！」

ワタル「ああやっぱり」

アスム「大丈夫ですよ、天鬼さんや轟鬼さん、息吹鬼さん、バケガニも入れますから」

カズマ「ちよつ！ストップ！？」

ユウスケ「彼は止めない！海東が多いのも止めない！……だけどバケガニはああ！！！」

タクミ「シンジさんは？」

士「どうせ、レンさんコンプリートだろ？」

海東「そして、ファイナルレンさんライド」

ユウスケ「ああ、展開が読めすぎている……それだけに、何か切ない……」

カズマ「……そうかあ……？」

【ICHIJYOU ANOTHER - AGITO KAIZA  
WILD - CULLIS ZANKI CAUCASUS ZER  
ONOS RISING - IXA AXLE - TRYAL】

芦河・尾上・天堂・アスム・小野寺・ワタル「——ツツツ！！？」

↑顔面蒼白

カズマ「……ああ、やっぱり」

翔太郎「ちょい待て、…危ない！危ないの多すぎるーッ……」

フィリップ「しかも…一条とは、一般人のはずだ…何故オーデイン

を出さない！」

翔太郎「そこかよ！？確かにツツコミどころだと思っけどな！！？  
いやむしろシンジ自体が龍騎の頂点に達していいよっ！かもっ達し  
てるだろお前！！」

士「なんでレンにしないんだ！」↑同じく顔面蒼白

シンジ「——レンさんは、俺の心にフルコンプリート！」

士「アホかーっ！？」

海東「……どんなコンプリートなんだ」↑例に漏れず

カズマ「つかシンジ、サンダース仲間に入ってなくて凹んでる」

サンダース「……」↑激しく落ち込む

シンジ「うわっ、ごめん！……じゃあ、斬鬼を抜かしてサンダース入  
れるよ」

士「最強の盾<sup>一条薫</sup>を抜かせえええーっ！！」

ショウイチ「お前は何をコンプリートするんだ？」

ソウジ「そうだな……大根、こんにゃく、卵、がんもどき、はんぺん、  
餅巾着、牛すじ肉、ちくわぶ、じゃがいも……」

ユウスケ「おでんCFッ！？」

夏海「え、でも、ソウジさんの実家って3つしか具が」

ソウジ「まあそうなんだが、後6つないとケータッチが成立しない  
からなあ」

ショウイチ「——もいい、話題を振った俺が馬鹿だった。もう  
好きにしてくれ」

ワタル「駄目ーッ！ショウイチさん、あの人を好き勝手させたら駄  
目ー！！」

リンク「カズマは？」

カズマ「えつとなー、……モッツアレラ、カマンベール、マスカルポーネ、リコッダ、ゴード、パニール、ロックフォール、ゴルゴンゾーラ、チェダー……」

アスム「……『チーズ』繋がリッ！！？」

リンク「カズマもカズマでチーズ（っていうか土？）好きだよな！？」

ワタル「ユウスケは？」

ユウスケ「じゃあ、……レッドペッパー、ガーリック、サフラン、コリアンダー、シナモン、ジンジャー、ターメリック、ナツメグ、ベイリーフ」

海東「Σこっちはこっちで、スパイス！？」

士「お前はカレー屋になる気か！」

翔太郎「まあ、一応クウガネタは踏襲してるよな……」

フィリップ「そこだけは評価してあげようか」

リンク「翔太郎さんは？」

翔太郎「……おやつさんおやつさんおやつさんスカルおやつさんおやつさんおやつさんスカルおやつさん……」

フィリップ「Σ翔太郎！戻ってくるんだ、……ここは現実的にWの初期フォームを言えばいいんだっ！！」

翔太郎「おやつさんおやつさんスカルスカルおやつさんおやつさん……おやつさあああああああああああああーん！！！」  
フィリップ「翔太郎ーッ！！？」

リンク「……話題、振るんじゃなかった……orz」

ソウジ「……リンク、何かいい案はないか？」

リンク「——夏海・八代（陶子）・ビートル・レン・ハジメ・由

里・コハナ・おばあちゃん・デビキ（牛鬼）

士「Σちよつ!？」

アスム「そ、それ危ないですよ！」

カズマ「しかも、レンさんがいる地点で最強だ！」

ソウジ「いや、……おばあちゃんだ」

夏海「……確かに、ソウジさんのおばあちゃんは凄かったですね……」

リンク「だって考えるの面倒」

土「あ、考えることを放棄しやがった！」

タクミ「夏海さんは？」

夏海「私は……」

土「ナツミカンだからな。こいつの場合、

ザボン、ポンカン、ユズ、ボンタン、グレープフルーツ、いよかん、ハッサク、キンカン、カボス

「の、ファイナルミカライドだな！」

リマジ「…」  
↑全員退避

リンク「……」↑同じく

Wコンビ「」……「」↑既に逃走

夏海「つ、か、さ、く、ん……！」

士「――ダァーッハッハッハッハッハッハッハッハー!!!？」

「……余計な事を言わなければよかったモノを」

タクミ「ですよねえ…」  
ワタル「はい」

## File 15【Complate・ケータッチ】（後書き）

### 次回予告

士「サndaース、折り入って頼みがある」

サndaース「ダース？」

士「……ユウスケに、ちよつと、放電を……あだだだだだ、俺の頭を噛むなあああ！！？」

シンジ「余計なことを言うからだ！」

ショウイチ「お前ら、嫌われているんじゃないか？」

士「お前はユウヤの父親似補正っただけだろ！浮浪者フォームになつてみる、途端に電撃出すからな！？」

ショウイチ「人を勝手にグロージングやブランクなどの類にするなあああ！！！」

カズマ「どうして、…どうしてお母さんには懐くんだよおおおー

……！」

フィリップ「…【お母さん】？カズマの母親は、ここに来ているのかい」

カズマ「うんにゃ、シンジ」

フィリップ「……彼は君の血族関係ではないし、それに」

翔太郎「あーあーフィリップ、…もうその辺にしておけ。お前とカズマじゃ、一生活がかみ合わない」

N  
e  
x  
t  
・  
・  
F  
i  
l  
e  
1  
6  
【レギュラー転身・サンダース】

## File 16「レギュラー転身・サンダース」

ユウスケ「今まで散々、『劣化五代』だの『所詮リイマジ』だの『スペックの無駄遣い』だの、拳句には『クウキ』だの言われた俺だけど…デイクブラじゃ、俺もついにライジング状態！」  
カズマ「でも、時間短いよな」  
ユウスケ「…その現実とは後で向き合う！」

士「しかし、お前、機械に当たってその電流食らっただけでライジングとか…」

ワタル「ですよー」

ユウスケ「ワタルひどッ!？」

夏海「でも、敵（＝ガノンドロフ）は強かったですし…」

海東「むしろライジングマイティぐらいにならないと、小野寺君じゃ勝てないって」

ユウスケ「……皆ひでえ…orz」

サンダース「ダース」

ユウスケ「どうした…?」

サンダース「ダース、ダース！」

シンジ「『元気出せ』って言ってるんじゃないかな」

ユウスケ「うっつ……ありがとうサンダース、お前だけだよ…!」

士「サンダース、電気、…ライジング…」

アスム（あ、何か考えてますね）

ワタル（流石悪魔）

タクミ（余計なことしなければいいんだけど、士さんだしなあ）

士「サンダース、折り入って頼みがある」

サンダース「ダース？」

士「…ユウスケに、ちょっと、放電を…あだだだだだ、俺の頭を噛むなああ！！？」

シンジ「余計なことを言うからだ！」

サンダース「ダアアッス！！」↑威嚇

カズマ「うわっ！？シンジの時以上に怒ってるよ！」

フィリップ「ちなみにサンダースの本当の主人は、ユウヤという…

ユウスケそっくりの人間さ」

翔太郎「家族構成も母・八代、父・芦河という…なあ」

カズマ「…あれ、リアル年齢で歳合わないんじゃないか？」

ソウジ「あくまで【見た目が似ている】んだから、年齢までは似ていないだろう」

〃〃〃

士「く、くそ…俺はただ、ユウスケを完全なライジングにしたかっただけなんだ。それなのに何故噛まれる!?」

夏海「当然ですよ!」

シヨウイチ「まず、『ユウスケに電撃を浴びせさせる』行為がだない…」

士「それだけじゃない!俺は、本編でも焼きディケイドにされたんだ!…こっちは、善意あるブラッシングだぞ!？」

サンダース「…………ウルググググ」

カズマ「う、唸ってる…チーズの発言に唸ってる!」

シンジ「モモタロス、翻訳!」

モモタロス「久々の出番がこれかよ!?…………えつとお…?『お前のブラッシングは痛い!カズマ以上に痛い!』だ」と

カズマ（俺のブラッシング、痛かったんだ…orz）

サンダース「ウーグルルル」

モモタロス「『それにお前もカズマもシンジにべったりで悔しいからやった、後悔はしていない』」

カズマ「Σうっえーい!？」

士「こっ、この腹黒おーツ!？」

モモタロスの翻訳は、若干モモタロスの口の悪さも相まってか辛辣気味になっておりますが、実際サンダースはもう少し控えめに毒舌を吐いております

翔太郎「しかし、本当にシンジにしか懐かないよな。俺なんか、一回アフロにされたぞ」

フィリップ「その時の事を思い出すと、……ぷくくくくく」

翔太郎「おいつ、笑うんじゃねえ！こら、フィリップー！」

カズマ「アフロならまだ軽い。俺、引つ搔かれた」

士「ああ。俺なんか、風呂に入っている時に…闇討ちされたんだぞ」

アスム「あれ？頭を噛まれたり引つ搔かれるだけならまだしも、『

風呂に入っている時』に何をされたんですか？」

士「闇討ち」

アスム「いえ、ですから、サンダースにどんな技で……」

士「放電」

ユウスケ「それ、普通死ぬよな？」

ワタル「状況に応じますけどね」

カズマ「チーズ足ある？」

士「何なんだお前は！」

シンジ「サンダース？」

サンダース「……ダース」 ↑しょんぼり

シンジ「よし」

カズマ「あつ、シンジには素直に謝った！ひどっー！」

翔太郎「つか…何でシンジには懐いてるんだよ」

〃  
〃  
〃

海東「しかし、相当気難しいみたいだね」

夏海「私は触ろうとしただけで、フーッって威嚇されました…」

カズマ「いやいや、それだけならいいって！」

ワタル「そうですよ。カズマと士さんに比べれば…」

アスム「雲泥の差です」

海東「どれどれ、試しに僕が…」

サンダース「……フシュー！フシューッ！！」

シンジ「モモタロス翻訳」

モモタロス「えーっと、『寄るな水色根無し草、（転属的意味で）

同じ根無しのカズマの後ろで存在消しとけ』」

カズマ「Σ俺に一番失礼じゃね!？」

シンジ「いい加減に翻訳するとプリンなし」

モモタロス「……すみません、本当は『寄るな水モ!青色は同じ青

色のカズマに溶け込め!』です」

カズマ「結局意味は一緒じゃね!？」

海東「——ディエンドは、シアンッッ!！」

ユウスケ「土もだけど、しつこいなその拘り!」

アスム「サンダース」↑装備：ポケモンフーズ

ワタル「カモーン」↑装備：キャッチソーサー

タクミ「…来ないねえ」↑装備：専用ブラシ

サンダース「……」

モモタロス「士達のせいで不機嫌なだけだろ?」

シンジ「確実にな」

シヨウイチ「お前ら、嫌われているんじゃないか？」

士「お前はユウヤの父親似補正ってだけだろ！浮浪者フォームになつてみる、途端に電撃出すからな！？」

シヨウイチ「人を勝手にグローイングやブランクなどの類にするなあああ！！」

ユウスケ・シンジ「（クウガグローイングフォーム／龍騎ブランク体）に謝罪しろおおおお！！」

タクミ（Σあつ、共通点発見！）

カズマ「サunders…」

サunders「フシッ！」

アスム「怖っ！」

ワタル「完全に嫌われてますね、カズマ」

シンジ「ああもう。サunders、カズマだって頑張ってるんだからちよつとは許してやれよ」

サunders「ダース」

タクミ「あ、機嫌が直った！」

カズマ「どうして、…どうしてお母さんには懐くんだよおおおー

……！」

フィリップ「…【お母さん】？カズマの母親は、ここに来ているのかい」

カズマ「うんにゃ、シンジ」

フィリップ「…彼は君の血族関係ではないし、それに」

翔太郎「あーあーフィリップ、…もうその辺にしておけ。お前とカ

ズマじゃ、一生話がかみ合わない」

士「かみ合った例<sup>ためし</sup>もないがな」

翔太郎「でもよ、」  
全「？」

翔太郎「加入期間が期間とはいえ、サンダースって相手ドーパントに対して常に上位にいるよな」  
士「どういうことだ」

翔太郎「いや、考えてみるよ。」

モリブリンドーパント↓電撃を無効  
デイトードーパント↓液化化した際に放電で引きずりだす  
キマイラドーパント↓シンジを狙おうとしたところを電光石火による体当たりで阻止

……これまで、相手の能力を阻止したり窮地を救ったりと、攻撃の起点になってるじゃないか」

士「やめろ、翔太郎。……まるで俺達がサンダースより下みたいだ」  
カズマ「だけどサンダースがいなかったら、シンジだって大怪我してたし……デイトードーパントだって倒せなかったし、」

翔太郎「それにカズマですら逃げたドーパント相手に、立派に戦ってるんだ。結構凄いことだぞ」

サンダース「……」↑とことこ

翔太郎「ん？」

カズマ「？」

サンダース「……」↑ぴたっ

モモタロス「どうなってんだよ、あれ」

シンジ「多分、カズマや翔太郎さんが味方してくれたから嬉しいんじゃないかな。……結構、素直じゃないから」

サンダース「ダース」

タクミ（あれ、そういえばサンダースって若干カズマさんのこと認めてたよね……） 本編

タクミ（——でも、未だに電撃を出したり吠えたり……）

タクミ（まさか、ツンデレ……否、……シンジさんだけにヤンデ……）

サンダース「………ダース」

シンジ「タクミ君、今、何を思ったのかな？」

タクミ「ひいっ！ー！？」

## File 16 「レギュラー転身・サンダース」(後書き)

### 次回予告

翔太郎「左翔太郎のハードボイルドお悩み相談室。さて、今回の依頼人は…？」

リュカ「あの、その、……お友達が欲しいんです…」

翔太郎「同じPSIってのを持った、ネスじゃ駄目なのか？」

リュカ「そのネスさんに、…『僕以外の友達も作りなよ』って言われてきたんです」

フィリップ「成程ね」

シヨウイチ「安心しろ、俺なんか同性で【友】と呼べるのは過去に一人もいない」

アスム「僕も、同年代の友達はいないです」

ワタル「まず、ファンガイアの王という地点で制限が…」

シンジ「俺もあまり多くないほうだったなあ」

カズマ「俺も！怒りやすい、っていうのができない原因なのか……なあ」

士「俺も友達と呼べる奴はいないな！」

海東「奇遇だね。僕もだよ」

ユウスケ「……皆、友達作ろうよ…」

N  
e  
x  
t  
・  
・  
F  
i  
l  
e  
1  
7  
【Hの相談所／友達何人できるかな？】

## File 19【Hの相談所／友達何人できるかな?】

翔太郎「左翔太郎のハードボイルドお悩み相談室。さて、今回の依頼人は…?」

フィリップ「ハーフボイルドのくせによく言うよ」

翔太郎「怒るぞ…? フィリップ」

リュカ「ご、ごめんください」

翔太郎「お。最初の依頼人は子供か…」

フィリップ「彼はリュカ。僕らが最初に着いた【リュカの世界】の住人で、ネス同様PSIという力が使える」

リュカ「は、はい。そうなんです」

翔太郎「で…お前の依頼は？」

リュカ「あの、その、……お友達が欲しいんです……」

翔太郎「同じPSIつてのを持った、ネスじゃ駄目なのか？」

リュカ「そのネスさんに、…『僕以外の友達も作りなよ』って言われてきたんです」

フィリップ「成程ね」

翔太郎「こんなこと言うのもなんだが、……まず、その引っ込み思案な性格を何とかしないとな」

フィリップ「それを言ったら、本末転倒だよ」

リュカ「……ハイ」

翔太郎「第一、他のファイターとはあまり仲良くしていないのか？」  
リュカ「ポケモントレーナーさんとは、一応…亜空事件の際に仲良  
くなって」

翔太郎「なら、それでいいだろ」

リュカ「…ですけど、『だったらこの際ライダーでも何でもいいか  
ら、他に友達作ればいいじゃない』とか言い出してきて」

翔太郎「無茶苦茶だな！おい！！」

~~~~~

士「で、俺達がリュカの友達になれと」

翔太郎「なんでも、ネスの言い分だと『リュカは積極的に動かなき
や駄目』だの『こうでもしないと引つ込み思案が治らない』だの言
っているらしくてな」

夏海「何だかんだで、リュカ君が心配なんですな」

海東「しかし、友達になってくれと頼まれたからって簡単になつて
いたら、彼のためにはならないんじゃないかな？」

ユウスケ「お、海東がまともなこと言った！」

ソウジ「明日は空から梅干しが降ってくるのか…」

シヨウイチ「……それなら、サンマとかアジとか言ったらどうだ？」
海東「はっはっは。僕の発言は天変地異並みだと？」

翔太郎「さーてリュカ、自己紹介から始めてみな」

リュカ「あ、ああ、ああああ、あのっ、…僕…りゅ、りゅりゅりゅ」
士「リュ、リュ、リュ、リュウキ！」

リュカ「Σはうあっ!？」

ユウスケ「何虐めてるんだよ!？」

士「いや、緊張を解してやろうとだな」

夏海「士君は黙っていてください!」

リュカ「ぼ、ぼぼぼくののなまええええははは、りゅりゅりゅ
りゅりゅりゅかかかかか」

シンジ「……緊張しすぎでしょ……」

カズマ「何処の小学生……」

ワタル「え、彼そうじゃないんですか？」

アスム「年齢的に、辛うじて僕達より下ってぐらいですよね？」

リュカ「すすすきななのははは……ぐすぐす、ひっぐ」

タクミ「な、泣き出した……」

シヨウイチ「はい、ストロップ!」

ソウジ「一旦CM入りまーす」

リュカ「ひっぐ、ひっぐ……」

タクミ「……というわけで、」

リンク（保護者召喚）「……あー、そういうことだったんだ……」

リュカ「ご、めんな、さい……」

タクミ「大丈夫だよ。…それに、僕も君の気持ちはよく分かるから…」
リンク「実を言うと、俺もなんだよなあ。……あまり、同年代の輪に入り辛いつていうか」

シヨウイチ「安心しろ、俺なんか同性で【友】と呼べるのは過去に一人もいない」

アスム「僕も、同年代の友達はいないです」

ワタル「まず、ファンガイアの王という地点で制限が…」

シンジ「俺もあまり多くないほうだったなあ」

カズマ「俺も！怒りやすい、っていうのができない原因なのかなあ」

士「俺も友達と呼べる奴はいないな！」

海東「奇遇だね。僕もだよ」

ユウスケ「……皆、友達作ろうよ…」

夏海「皆さん、どんな青春時代を過ごしてきたんですか？私なんかとても充実していましたよ！」

士「……あの痛々しいTGクラブのことか」

夏海「痛々しいってなんですか！」

シヨウイチ「んー……まず、喧嘩に明け暮れていたな」

全（（よく警察になれたなアンタ！））

ソウジ「拳で語り合った後に、友情が生まれるとかはなかったのか」

士「あんたも相当古典的な方法を語るな！？」

ソウジ「俺の青春全てを語るには、最低でも作文用紙100枚以上必要だが」

夏海「やめてください、やるなら短く纏めてからにしてください頼みますから」

カズマ「……………うん、BOARDに入れたのって奇跡だったかも」

夏海「どんな青春ですか!？」

翔太郎「俺も、昔はやんちゃしていたなあ」

フィリップ「僕はデータ人間だから青春なんて存在してないし」

ユウスケ「Σ約1名ネタバレに近いこと言っただよ!？」

アスム「まず、年代で鬼の修行をしている人がなかなか…」

ワタル「ですよー」

海東「この2人は、仕方がなさすぎるなあ…」

士「シンジは別に、友達いなくてもレンさえいればいいんじゃないか？」

シンジ「あーそうかも」

ユウスケ「ちよっ、シンジさん…あれ」

カズマ「…どうせ俺はシンジを置いて逃げましたから」

サンダース「…ダース（訳：あんなに一緒に居たのに…）」

シンジ「——ごめん…」

士「それより、タクミはどうして友達がいらないんだ？」

夏海「これまでの学生生活で、由里ちゃんだけって事はないですよね？」

海東「それに、リンクもアイクやマルスなんかがいながら…どうしてだい？」

ユウスケ「第一、ピット君は（見た目だけなら）歳が近いし…」

タクミ「いたんですけど、——オルフェノクとばれてから…ね。
うふふふふふふふ」

リンク「……肉馬鹿とナルシー王子と昭和天使、この強烈な相手にどうやったら友達になれって頼める？」↑File 4を思い出した

士「…悪かった」

夏海「ごめんなさい…」

海東「…まあ、流石に無理かもね。特にマルス王子」

ユウスケ「アイクとは一緒に行動してるけど、…いい奴なんだけど
…なあ……」

リュカ「……よくよく考えたら、

士↓0（まず士＝仲間という概念が全員働いている）

ユウスケ↓ワタル（士は仲間、ワタルは友達、夏海は仲間、海東は
……）

夏海↓0（士は別の意味で意識、ユウスケと海東は仲間）

海東↓0（アスムとは師弟関係）

ワタル↓ユウスケ、アスム（映画でも仲良かったしね）

シンジ↓カズマ、サンダース（先程公認）

カズマ↓シンジ（士とユウスケは仲間）

タクミ↓リンク（士は仲間、由里ちゃんは恋人）

ショウイチ↓0（士とユウスケは仲間、ソウジは漫才の相手）

ソウジ↓ピット（友達と言いかむしろ同志、ちなみにショウイチは
漫才の相手）

アスム↓ワタル（海東とニコは師弟）

翔太郎↓アカリ、リュウ（フィリップは相棒）

フィリップ↓0（翔太郎は相棒さ）

リンク↓タクミ（士は仲間！）

……で、実際問題友達少ないんですよね皆さん」

ショウイチ「待て。——『漫才の相方』は取り消せっ！？」

カズマ「じゃあ……パパ！」

ショウイチ「何故そうなる！？」

シンジ「お母さん！」

ショウイチ「それはせめてソウジに言え初代母！」

ソウジ「……あ、……グランパ！」

ショウイチ「お前にだけは言われたくないッ！！」

士「……漫才の相方じゃないか」

ユウスケ「親子漫才、だな」

翔太郎「あー……まあ、リュカ。俺が言えるのは一つだ
リュカ「？」

翔太郎「……士達を反面教師にして、頑張って友達作っていけよ」
リュカ「……はい！」

夏海「あれっ、なんか綺麗に纏められてません！？」

士「……どうせ俺は破壊者、友達なんて必要ない」

ユウスケ「士、友達と仲間は表裏一体なんだって……まずは身近な人間と友達になっていこうぜ？な？」

File 19【Hの相談所／友達何人できるかな?】（後書き）

次回予告

翔太郎「左翔太郎のハードボイルドお悩み相談室。さて、次の依頼人は…?」

夏海「…サンダースが懐かないんです」

カズマ「見るこの頭」

士「見るこの引っ掻き傷」

海東「見てくれこの真っ黒ボディ」

翔太郎「…悪いが、そればかりは流石に専門外だ…シンジとユウスケと芦河さん頼れ」

ソウジ「♪」

ショウイチ（…脅した）

カズマ（脅し勝った）

シンジ（何あの人脅しのプロ?）

Next...File 20【Hの相談所／JとSと脅迫と】

File 20【Hの相談所／JとSと脅迫と】

翔太郎「左翔太郎のハードボイルドお悩み相談室。さて、次の依頼人は…？」

夏海「こんにちは」

翔太郎「お？どうした夏海」

フィリップ「やあナツミカン」

夏海「ナツミカンじゃないです、夏海です！」

土「…と、ついでに俺達もだ」

カズマ「こんにちはわー」

海東「こんにちわわー」

翔太郎「——フィリップ、塩。つか岩塩持つて来い」

フィリップ「わかったよ翔太郎。ついでに、君のハードボイルド（

超絶固い）ゆで卵も」

海東「…何故僕の扱いだけ悪いんだい？」

翔太郎「それは何故か？…お前が明らかに、土の状況を抜いても一番の不審人物だからだ」

フィリップ「そりゃ、殆ど石炭になっている人間に来られてもねえ」

翔太郎「で、依頼の内容は？」

夏海「…サンダースが懐かないんです」

カズマ「見るこの頭」↑アフロボンバー

士「見るこの引つ掻き傷」↑顔面から血が噴出
海東「見てくれこの真つ黒ボディ」↑さっき説明したとおり
翔太郎「……悪いが、そればかりは流石に専門外だ…シンジとユウスケと芦河さん頼れ」
フィリップ「翔太郎も、とばっちりを食らうよね」
翔太郎「…流石に最近は、余計なことばかり言うお前のほうが対象になっているけどな」

（（（

士「というわけで、ショウヤ&ユウヤ親子に似た奴らと…ヤンデレ周波数の合うやつに来てもらった！」
翔太郎「お前がサンダースに酷い扱い受けている理由はそれだよ」
ユウスケ「でも、俺はサンダースで困ったことはないんだよなあ…」
シンジ「まあ、うん」
ショウイチ「まあ夏ハツサク以外は…理由が分からないでもないが」
夏海「夏海です！」
海東「…僕は何もしていないのに!？」
士「お前はただ単にウザいんだろ」
海東「……orz」

シンジ「サンダースは生き物なんだから、生き物の気持ちになって考えてみないと」

士「愚問だな」

シンジ「は？」

士「——サンダースが俺に合わせればいい！」

翔太郎「アホか！？つか、愚問なのはお前のほうだ！！」

カズマ「…合わせたところで…電気が……」

サンダース「ダッ」

カズマ「——わあああーん！また舌打ちするうううー！！」

翔太郎「あ、…そりゃ…可哀想に（こいつも理由は分かるんだが、言ったらショック大きそうだしなあ）」

夏海「触ろうとただけでフーツと…嫌いなんですか」

翔太郎「いや、あいつ人見知りらしいし…慣れていないだけだろ。お前はまだ救いあるって」

夏海「そうでしょうか…？」

翔太郎「ああ、……他4人よりは遥かに」

海東「成程、サンダースのハートを盗めばいいのか！」

翔太郎「お前もう石炭になって化石燃料の足しになれ」

ユウスケ「翔太郎さん、…海東程度じゃ足しになりませんって」

翔太郎「それもそうか」

フィリップ「では、検索を開始しよう。…【サンダース】、【気持ち】、【生き物】」

翔太郎「——そういうのは調べるんじゃないくて、直接触れ合ええ

えー！」

サンダース「……」↑翔太郎の後ろで唸っている

士「おい！何で翔太郎はいいんだ！？」

海東「ずるい！僕が先に、ハートを盗むつもりだったのに！！」

フィリップ「抜け駆けかい翔太郎」

翔太郎「……お前らな」

ユウスケ「まずは餌をあげてみたら？」

士・カズマ・フィリップ・海東・夏海「トイトイトイ」↑ポケ
モンフーズ

サンダース「グルルルル」

シンジ「サンダース、とりあえず、誰でもいいから行ってきたな」

翔太郎「お前が一番心を許せる奴（もう分かり切っているが）のところに、行けばいいからよ」

サンダース「……」↑とことこ

士「来い！」

海東「カモン！」

フィリップ「来るんだサンダース」

（落雷）

サンダース「……」↑夏海の餌をパクパク

夏海「や、やりました！食べてくれました！！」

翔太郎「おー、おめつとさん」

シヨウイチ「デキレースのような気もしたが、まあ、いいか」

ユウスケ「ああ。——カズマも被害に遭っているけど」
カズマ「…俺、何もしてないじゃん…orz」

サンダース「…」

ユウスケ「サンダースは そつぽを むいている！▼」

夏海「orz」

シヨウイチ「まあ、ポケモンでいう…“ゲットしたばかり”の状況なんだ。ゆつくりやっていけばいい、夏いよかん」

ソウジ「お、」↑通りすがり

シヨウイチ「来たな混沌王」↑防御姿勢

ソウジ「いやいや、今日はシヨウイチをいじりに来たんじゃないんだ」

ユウスケ「Σいじり扱いなんですね！？」

ソウジ「いやー、少しサンダースを抱っこしたいと思ってな。前からしてみたかったんだ」

カズマ「え、…【抱っこ】！？」

翔太郎「説明しよう！——サンダースを抱っこできるのは、本当に選ばれし人間のみ…懐き度MAXじゃない限り、不可能だ。土なんかやろうものなら、死が待っている」

カズマ「いやいやいや、それはやめたほうが！」

シンジ「ホント、やめたほうがいいですって！死にますよ！？」

サンダース「グルルルルル！」↑針逆立て

ソウジ「——ん？」↑背後にハイカブオーラ

サンダース「↑ガクブル

ソウジ「♪」↑抱つこ中

シヨウイチ（…脅した）

カズマ（脅し勝った）

シンジ（何あの人脅しのプロ？）

ユウスケ「ソウジさんってさ、時々、オリジナルと唯一張り合える人だっと思うんだけど」

士「分かったぞ」

翔太郎「あーはいはい、で？」

士「…サンダースを従えるには、力を見せつける必要があるとな！」

翔太郎「おーい、シンジ、カードデッキ貸してくれないか？馬鹿一人、化石燃料にする」

シンジ「？を燃料にしても意味ないですよ」

File 20【Hの相談所／JとSと脅迫と】（後書き）

次回予告

翔太郎「新仮面ライダー・オーズ！」

フィリップ「いったいどんなライダーなのか。ぞくぞくするねえ」

リンク「えーっと、フィリップ君、ちょっと聞きたいんだけど」

フィリップ「何だい？」

リンク「あの人、誰？」

フィリップ「教えよう。彼こそは…」

映司「——この世界って、結構カラフルなパンツがあるんだなあ！ほら、このキノコ柄なんか」

マリオ「ぎゃー！ぎゃー！？」

ユウスケ「何あの人パンツコレクター！？」

Next・・・File 21【パンツとメダルと新ライダー】

File 21「パンツとメダルと新ライダー」

マリオ「えー、本日は…平成12代目・仮面ライダーオーズの紹介をして行きたいと思います！」

翔太郎「新仮面ライダー・オーズ！」

フィリップ「いったいどんなライダーなのか。ぞくぞくするねえ」
士「大体分かった。——タトバ！タトバ、タットツバ！」

ユウスケ「…」引いた目

士「おい、なんだその目は。言っておくがな、これが正規の変身音なんだぞ！？」

映司「そうそう。俺も驚いたんだよな！。最初は」

ユウスケ「いや、驚くなんてもんじゃないですよ？」

夏海「むしろ、啞然とします！」

映司「でも、慣れると結構…いいんだけど」

リンク「えーっと、フィリップ君、ちょっと聞きたいんだけど」
フィリップ「何だい？」

リンク「あの人、誰？」

フィリップ「教えよう。彼こそは…」

翔太郎「仮面ライダーオーズこと、火野…」

アंक（腕だけ来ました）「——うおおおい映司イイイ！？貴様、何和んでるんだアアアッ！？」

夏海「きゃああああ！動く腕ーッ！！」

ユウスケ「どわああああ！！」

ピット「いざ、南無三ー！！」

海東「ぎゃあああああああー！！」

映司「あ。アंक！？刑事さんはどうしたんだ！？」

アंक「マスターハンドとかいう奴が、30分の間だけあの刑事から離れても影響のないようにしてくれた。それにしても、何和んでるんだ！？」

映司「いや、なんかいつの間にか…な」

アंक「アホか！？」

カズマ「あ、ちょい待て。……その人、こっちこっち」

映司「？」

カズマ「チーズ、この人チーズの妹さんの恋人」

士「なん…だと…？」↑オーラがゴゴゴ

映司「Σええええええええー！？ちょ、何かいきなり殺気を向けられているんだけど！」

アंक「お前、何かしたんじゃないのか？」

映司「いや、何もしてないって！」

アंक「嘘つけ。どうせ、旅のどこかでそれっぽい女と（バキュー

ン)したんだろ?」

士「(バキューン)……!?!おい、貴様…小夜と(バキューン)したのかッ!?!」

映司「小夜!?知らないよ、そんな人!それに、俺…女性に(バキューン)したことないから!」

アंक「嘘をつくな。お前も男、性欲ぐらいはあるはずだ」

スネーク「性欲を持て余す」

映司「ない!ないない、なーい!」

アंक「嘘だッ!」

映司「本当だつて!(バキューン)は愚か、(ドキューン)に(ズキューン)なんて…したことない!」

士「何イ…?」

アंक「おい、待て。お前…その歳で(ズキューン)すらないとか……」

海東「生粋の童貞君だね」

スネーク「お前の聖なる泉は枯れてしまったのか!?!」

ユウスケ「放送禁止用語丸出しの会話の羅列に『聖なる泉』を持ち出すなッッッ!」

シンジ「……カーズーマ」

カズマ「だ、だって、中の人がその役を」

ショウイチ「中の人などいない!」

ソウジ「やるなら、士のいない時にやろうな」

タクミ「——仕事しろ」↑フェイスブラスター装備

リンク「あと、童貞馬鹿にすんなよ」↑チェーンハンマー装備

全「ハイ」

くくく

翔太郎「えー、気を取り直して…今回の新仮面ライダー・オーズに変身する、火野映司だ」

映司「どうも！」

フィリップ「そして、こちらの手が…メダル怪人【グリード】」
アंक「簡潔に済ませるなッ!？」

士「…本当に小夜と関係はないんだな」

映司「俺の明日に誓います^{パンツ}」

ユウスケ（あれ、今副音声で『パンツ』って聞こえた）

士「よし分かった。——とりあえずカズマ、尻出せ」

カズマ「チーズのセクハラ！」

ワタル「最低です士さん」

アスム「公衆の面前で、尻出せとか…」

リンク「タクミとユウスケと夏海さん以外全員奥歯へし折るぞ？」

↑メリケンサック装備

全「…すいませんでした」「」

フィリップ「グリードというのは、簡潔に言えば800年も昔…セ

ルメダルを使い人間の欲望を集め、自分達の力としてきた種だ」

翔太郎「で、その封印が解け…グリードは復活。現代の人間達の欲望をかき集め始めている」

フィリップ「そこで登場するのが、かつてグリードを封印したというオーズ」

翔太郎「オーズはコアメダルと呼ばれる、グリード達の【核】…まあ人間で言う心臓などの臓器みたいなものを使って様々なフォームにチェンジするんだ」

士「大体分かった。つまり……海東がセルメダルを入れられたら、世界の終わりということだ」

海東「士。人を欲望の権化のように言わないでくれるかな？」

夏海「大体、それを言ったら士君だって怪しいですよ」

士「俺に欲はない」

カズマ「嘘つけ出世欲」

士「カズマお前マジで尻出せ」

カズマ「チーズの変態！」

アスム「ヒソヒソ…」

ワタル「ヒソヒソ…」

士「……おい、アスムはともかく…ワタル。お前、カズマのこと嫌っている割には、仲いいな」

ワタル「『嫌っている』ではなく『避けている』、『仲がいい』ではなく『士さんを弄る口実』」

映司「ところでさあ」

マリオ「？」

映司「———この世界って、結構カラフルなパンツがあるんだなあ！ほら、このキノコ柄なんか」↑カラフルキノコパンツGET
マリオ「ぎゃー！ぎゃー！？」

ユウスケ「何あの人パンツコレクター!？」

アंक「お前、欲はないくせにパンツへの執着は強いよな」

映司「何言ってるんだ!俺の明日だぞ!？」

ユウスケ「Σそんなものが!？」

映司「……そんなもの?俺の【明日】が、“そんなもの”…?？」

↑メダジャリバー装備

ユウスケ「…ごめんなさい」

アंक(こいつ、もしオーズにならなかったらパンツへの執着心で怪人^{ヤミ}を出せそうだ……見たくないしその欲望を増幅させようとも思わないが)

映司「それに、ほら!この…龍の刺繍の入ったトランクスとか」↑
黒地に赤い龍のトランクス

シンジ「Σ!!!??？」

映司「何かの記号?が入ったパンツとか!」↑青空を連想する生地
にクウガのマーク

ユウスケ「Σ あゝ」

映司「ピンクに黒のストライプ」↑どう見たってディケイド柄
士「Σ(ODO)」

映司「それからこれと、」↑赤いフンドシ

キャプテンファルコン「orz」

映司「でっかい文字プリント」↑【宝】と書いてあるブリーフ
海東「……」

映司「スパッツ」

ピット「…ヲイ」

映司「虎柄パンツ」

フォックス「あぼーん」

映司「ネク…タイ？」

ドンキー（ポツ）↑顔赤らめ

映司「それから、。ユア。ン。ヤ。ンのプリントのパンツ」

ユウスケ「……あれ？それは流石に、誰でもないんじゃない？」

鳴滝「おのれデイケイド、貴様によって私の下着も露見されてしまった」

翔太郎「あんたかよ!？」

士「俺は関係ないだろ!」

アंक「つか、おい！映司！！パンツの評論なんか必要ないだろ！！」

映司「それから、お金のプリント…？大蒜…??」

ワリオ「コラー！俺様の、勝負パンツ!」

マリオ「やっぱりお前のか!？」

映司「へー、これが勝負パンツ…何に使うんだ？」

ワリオ「そりゃ、決まってるだろ。…大きなビジネスの時にだな…」

映司「これはイチゴ柄？」

ワリオ「Σ聞けよ!？」

ルイージ「orz」

マリオ「お前…だからあれほど、やめとけって…」

映司「おつ、アंक！お前これ好きそうじゃないか？」

アंक「俺にパンツの趣味はない」

映司「そうじゃなくて、この鷹の柄の入った派手なパンツ！お前、メダルの種類と腕の色から考えて、鳥の種族だろ」

アंक「ん、これはなかなか…って、アホかあああっ!？仕事しろニート!」

映司「仕事するよ!？日雇いバイトだけど!」

アंक「この自由人があああ!」

映司「でも、このパンツって一体誰の……」

オーズ・ガタキリバ「…あんだ、斬るぞ」

映司「あれっ、オーズ！？…って…俺のドライバーがない！え、あれ？そっういえば全身ガタキリバの色した人は」

オーズ・ガタキリバ「明日、裂くぞ」↑映司のハデ柄パンツ装備
映司「——すいませんでしたッ！」

ソウジ「あれ、リンクだな（二重の意味で）」

ショウイチ「ああ。いつの間に盗んだんだか（オーズドライバーの意味で）」

アंक「もう疲れた（映司の意味で）。俺は、先に帰らせてもら…」

マリオ「……おい、実はな…」

『話進まなかったから、次回もまたいで特集してね』

……って、マスターからの伝言」

アंक・ショウイチ「ウソダンドコードン！！」

ソウジ「仲がいいなあ」

File 21【パンツとメダルと新ライダー】（後書き）

次回予告

アंक「人間なんて、一皮むけば欲望の固まりだ。そんなわけで…」
フィリップ「アंकから得た情報を元に、ガジェットを作ってみた
…その名も！【ヨクミエール】！！」
アイク「『良く見える』か『欲見える』か、どっちかにしてくれ」
タクミ「…どっちも、では？」

アंक「…おい、コイツ完璧に欲の塊だ。腹の肉の地点で、それを物語っているぜ」

映司「大蒜パンツさん…」

ワリオ「ワリオだよ！」

マリオ「まあ、ワリオは仕方ないな…」

翔太郎「——俺さ、初めて…ソウジさんを尊敬する」

シンジ「むしろ、眩しい。眩しすぎて直視できない」

夏海「同じ空気を吸っていること自体が、罪のような気がします」
ソウジ「ん？」

Next…File 22【欲とワリオと絶滅危惧種】

File 22 【欲とワリオと絶滅危惧種】

翔太郎「前回のあらすじ：火野映司自重しろ」
フィリップ「さて！今回もオーズ特集だ！！」

アंक「人間なんて、一皮むけば欲望の固まりだ。そんなわけで……」
フィリップ「アंकから得た情報を元に、ガジェットを作ってみた
…その名も！【ヨクミエール】！！」
アイク「『良く見える』か『欲見える』か、どっちかにしてくれ」
タクミ「…どっちも、では？」

士「欲望の固まり、なあ…例えばどんなものが見れるんだ？」
フィリップ「そうだね。…こういうのはフェアに行こう」
翔太郎「どう『フェア』にするんだよ」
フィリップ「作ったガジェットは2つ。そのうちの一つは、アंक
専用だ」

映司「えっ、手に必要なのか！？それ！」
アंक「そこは気にするな」
フィリップ「欲望のない人間を募っても、皆言い出して収集がつか
ない…だったら後一つは、公平にする意味でも火野映司。君が持つ
べきだ」

映司「あんまり欲しくないデザインだな（分かったよ）」
シヨウイチ「おいつ、そこはオブラートに包め！カズマでもそこま
ではつきりとは言わない！！」

ソウジ「しかも、本音と（ ）が逆だな」

映司「おおーっ」

アंक「どうした映司」

映司「いや、凄いよ。このタカパン…」

リンク「——あ？」

映司「……ごめんなさい」

リンク「よし」

アंक「（強いな、あの人間）……なんだ、つまらん。ちつぽけな
欲しくない」

士「…え？」

タクミ「マジですか？」

ピット「あのマイペース大損体質男が？」

カズマ（ピットの言い分が一番酷い件について）

アंक「ああ。しかし、これは………ああ、…うん、……コイツ、
一歩間違ったら狂気に走るスイッチ持ってるぞ」

映司「あ、この赤色の？」

アंक「これはな、…【独占欲】っていつて…なんだろうな…。…
…つい最近、誰かコイツの友達か何かにちよっかい出さなかったか
？」

全「「え？」「」」

アंक「例えば、変な飯を食べさせたりとか…」

ピーチ「…」

アंक「ヘタクソな歌を聞かせて気絶させたりとか…」

カービィ「……」

アंक「操られた状態で思いつきりぶっ飛ばしたとか…」

ユウスケ「え？」

アंक「——心当たり、ないか？」

シヨウイチ（そうか、……タクミ関係か……）
ソウジ（そして土に軽くダメージが）
士「orz」

アंक「……おい、コイツ完璧に欲の塊だ。腹の肉の地点で、それを物語っているぜ」

映司「大赫パンツさん……」

ワリオ「ワリオだよ！」

マリオ「まあ、ワリオは仕方ないな……」

アイク「あまり聞きたくないが……例えば、どんな欲なんだ？」

アंक「まず、一番強いのが金銭欲だな」

全「……ああ……！」

アंक「そしてその次に、物欲」

マリオ「そうそう！」

アंक「更にその次は、食欲」

ピーチ「あるある！」

アंक「『出番が欲しい』とか」

ルイーダ「うんうん……！」

アंक「『俺様イケメン』とか」

クッパ「うむうむ」

マルス「そうそう」

メタナイト「ああ」

アंक「『俺様が一番偉いぜ』とか」

ガノン「そうだな」

ゼルダ「まさにその通り」

アंक「『もつと高級な飯を食いたいぜ』とか」

カービィ「だよね！」

ヨッシー「はい！」

アンク「『安売りの肉じゃなくて、もつといい肉出せよ』とか」

アイク「そうだな！」

アンク「『俺様最強！』とか」

ファルコ「あるなあ」

ウルフ「確かにな」

アンク「『美人のねえちゃんに酌されたいぜ』とか」

スネーク「そうだな！」

C・ファルコン「まあ、ワリオだしな」

シンジ「——そして、妖怪飛行腕の発言に同意したあんたらはまさにそのテの欲の塊であることが判明したり」

マリオ「……うん、そうだね。俺、新しい家欲しい。上手いキノコ食いたい」

ルイーダ「出番欲しい」

ピーチ「ケーキバイキングに行きたい」

クッパ「ワガハイはイケメンだぞ！」

メタナイト「間違ったことは言っていない」

マルス「何を言っているんですか。イケメンというのは、僕のことを刺すんです」

ガノン「…フン、ボロが出たな悪女」

ゼルダ「あなたに言われたくないですね」

カービィ「だって…」

ヨッシー「お腹空きましたもん…」

ファルコ「——俺、ウルフと同レベルなのかよorz」

ウルフ「ショックを受けたのは俺のほうだ！」

スネーク「…ファルコン…」

C・ファルコン「そんな同志を見るような目をしないでくれえええ！」

アंक「面白い。コイツにメダルを入れて、ヤミーにしてみるか？」

フィリップ「興味深い！ぜひとも、やってみてく！」

翔太郎「やめんかあああつ！？」

映司「大蒜パンツさん！逃げて！！」

ワリオ「ワリオだっつーの！？」

士「…ヤンデレ、マイペース不幸受け身体質ヤンデレ症状予備軍勇者、腹黒王女、鬼畜魔王」

ユウスケ「つ、士？」

士「———なんということだ。【ゼルダの伝説】チームが、トゥー
ンリンク以外壊滅だ」

ガノン「何がだ！？」

リンク「おい士！」

タクミ「ちょ、リンク落ち着いて…」

リンク「ガノンは鬼畜じゃないし、姫は腹黒じゃない！」

士「…………orz」

リンク「あ、あれ？」

ゼルダ「…リンク、………ツツコミを入れる場所が…そこですか？」

ガノン「………貴様は、『マイペース不幸受け身体質ヤンデレ症状予備軍勇者』を受け入れたとでも言うのか？」

トゥーン「リンク兄ちゃん…否定箇所が絶対間違ってるよ…」

リンク「え？え？？」

ピット「自分のことは後先考えない馬鹿なんです、放っておきまし

よう」

翔太郎「ああ、もう、慣れた」

リンク「ええ!？」

タクミ「でも、それがリンクらしいといえばリンクらしいし」

リンク「……? ? ? ?とりあえず、……タクミは褒めているって捉えていいのかな」

シンジ「っていうか、彼しかフォローしてないしね」

アंक「——おい映司」

映司「どうしたんだよ」

アंक「俺、さっきの発言取り消す」

映司「そうか。分かってくれたか……人にセルメダルを入れるなんてそんなの」

アंक「……あの辰巳シンジって奴に……セルメダルを5枚ほどぶち込みたい……!相当強い独占欲だ……ッ!!」

映司「シンジさん、【龍騎の世界】にお住まいの辰巳シンジさん!今すぐお被いして来てくださーい!!」

シンジ「……あ?」

カズマ(分かる気がする)

ショウイチ(オマケで、サンダースもな)

ワタル・アスム(ですよねー)

アंक「うわ、こいつも凄い物欲だな」

映司「宝パンツさん……!」

海東「いや、だからね?僕は物欲に支配されていない。そう、僕にあるのは……お宝が欲しいという使命だけ!」

ソウジ・シヨウイチ「それが物欲だッ！！」

ユウスケ「おお、漫才タッグがツツコミ入れた…！」

アंक「…映司に言わせれば、青空パンツになるだろうが……お前も、殺人欲が意外と強いぞ。ただ、対象が…あのお宝馬鹿のみだが」
ユウスケ「——うん、ちよつと、【アギトの世界】辺りからつて言うのは分かつてる。完全に火がついたのは、【BLACK RX】の世界からだけど…」

夏海「Σユウスケッ!？」

アंक「お前の場合は、支配欲だな…流石破壊者」

映司「ピンクと黒のストライプパンツ…お前…」

士「かーどーやーっかーさーっ！」

夏海「主に、どの辺りの支配欲が強いんですか？」

アंक「ん?……『ユウスケ俺の靴を舐める』とか、『海東俺の椅子になれ』とか、その手の」

ユウスケ「…っかーさあああーッ！」↑黒目U化

夏海「ユウスケ、気持ちは分かるけどそれは駄目ー!!」

アंक「——は冗談で、まあぶっちゃけ、『畜生ソウジとアスム攻略してやる、ついでにシヨウイチとワタル、あいつらユウスケのオマケ要素が強かったからな…それからシンジか、あいつもぶっちゃけその場のノリで済ませた感がある』……要するに好感度ゲーみたいなものだ！」

ユウスケ「それでも許されるものじゃないだろ士あああー!!」
士「待て、落ち着け！本当に落ち着け!？」

カズマ「俺は見なくていい。自分で分かかつてる。諦めた」

映司「そこまで清々しいのも、珍しいなあ…」

アंक「見る。人間は結局、一皮剥いたら欲望の塊なんだ」

映司「いや、そんなことないだろ!……多分…」

ワタル「おおっと、欲望の塊ばかりでオースがダウン寸前」
アスム「大丈夫でしょうか」

ソウジ「まあ、気にするな。人間には、黒い部分もつきもの…大事なのは、その黒い部分も含め、【その人】の全てを認める心だ」↑
後光

アंक「うおっ、まぶしっ！？こいつ、まったく欲が見えないッ！
目が焼けるッッッ！？」

映司「おおおお…！そうだよ、それだよカブトさん…！」

翔太郎「——俺さ、初めて…ソウジさんを尊敬する」

シンジ「むしろ、眩しい。眩しすぎて直視できない」

夏海「同じ空気を吸っていること自体が、罪のような気がします」
ソウジ「ん？」

ピット「い、今の内に押しておこう」

ユウスケ「天堂教でも作るべきかな…」

ゼルダ「ありがたや、ありがたや」

アスム「ありがたやー」

士「おい、お前ら…」

ショウイチ「騙されるな！——あれはただの天然だ！リンク以上のマイペースなんだ…！」

アंक「つか、そろそろ帰らないと…刑事死ぬぞ」

映司「Σあつ。だった…じゃあ、これで！」
アंक「次と呼ぶ時は、セルメダルを倍よこせ」
映司「こらッ!？」

File 22 【欲とワリオと絶滅危惧種】（後書き）

次回予告

フィリップ「秋には色々あるそうだ。スポーツ、読書、食欲、芸術……興味深い」

翔太郎「読書なら、いつもしているだろ……」

ピーチ「どうしたらいいの！？このままじゃ……ディケブラ本編に出た際、こんな醜い姿のままよ……！」

ユウスケ「い、いや、そもそも本編じゃ石n……」

士「馬鹿、ユウスケ！言うな……！」

リンク「折角本人がその気になっているのに……！」

ワタル「腕振りなさい、振りなさい。足上げなさい、上げなさい……」

カズマ「何その音頭……？」

ワタル「音頭じゃないです、イクササイズです！」

タクミ「Σなにそれ……？」

Next……File 23 【ハッスル・マッスル・フェッスル】

File 23【ハッスル・マッスル・フェッスル】

フィリップ「秋には色々あるそうだ。スポーツ、読書、食欲、芸術……興味深い」

翔太郎「読書なら、いつもしているだろ……」

士「俺は、写真ぶじやの秋だな」

シンジ「個性的な写真ですね（笑）」

士「まだ何も見せていないだろうが！」

シンジ「個性的な写真ですね（笑）」

士「いや、だから」

シンジ「個性的な写真ですね（笑）」

士「……もう、なんでもいい……」

ソウジ「やはり俺は、読書の秋だな」

タクミ「そうですね……って、ソウジさん。それ何の本ですか？」

ソウジ「【異形の花嫁】」

タクミ「……」

フィリップ「大体分かった。ファイズ正伝か」

アスム「やはり、秋といえばスポーツの秋です！」

ユウスケ「よし、じゃあ皆でキャッチボールだ！」

カズマ「バッチコイ！」

ワタル「ユウスケ！カズマ！アスム相手では、変身した方がいいで

すよー!!」

海東「僕は芸術の秋だね。そういうわけで…これから芸術鑑賞をするために、皆も美術館の絵でも盗んでこようかな」

シヨウイチ「——お前はよほど現行犯逮捕されたいようだな?」

翔太郎「全力で止めさせてもらうぜ」

夏海「やっちゃってください」

リンク「ごめんくださーい、翔太郎さんいますか?」

翔太郎「どうした?今日は【ハードボイルドお悩み相談室】はやつてないぜ」

リンク「そこを何とか…急用なんです」

士「なにやら、大変そうだな」

リンク「うん。まあ、……大変」

ピーチ「——わああああーん!」

全「「「!?!?」」」

シヨウイチ「あ!野生のブルンゲルが現れた!」

ソウジ「それは失礼じゃないか?」

ブルンゲル……ポケットモンスターにおける、5世代目。いわゆるメノクラゲポジション。

初期は結構いい見た目ののに、進化すると途端に残念な水ノゴース

トタイプ。

どのぐらい残念かって言うと、水を吸って膨張した豆。

ソウジ「まあ、色は合っているけどな」

シンジ「微妙な所を譲歩しないでくださいよ!？」

士「簡単に言うと、ピーチが激太りしたのか」

ユウスケ「何をどうしたらあんなったんだ!？」

リンク「いや、その、…この時期って【食欲の秋】と銘打って色々なデザートが出るんだけど…」

海東「成程。新作スイーツを食べに食べまくって、あんなったのか」
士「だとさ。夏海」

夏海「な、何を言ってるんですか。私は太ってません!」

士「嘘言うな。——最近、お前もスイーツ（笑）の食いすぎだろ」

夏海「士君!怒りますよ!？」

アスム「でも確かに昨日、体重計に乗りながら『うつ…最近食べ過ぎてやばいです』って」

夏海「（ギロリ）」

アスム「ひっ!?!？」

シヨウイチ「夏ユズ胡椒の“怖い顔”! アスムの素早さはガクツと下がった!」

夏海「ア、ス、ム、君…? ——弟子の無礼は、師匠の不始末ですよね…大樹さん…?」

海東「えええええ!？」

ソウジ「夏海くんの“やつあたり”! 効果は抜群だ!」
カズマ「二人共楽しみすぎじゃね?」

ピーチ「他人の不幸はどうでもいいのよ！」

タクミ「それもどうかと!？」

ピーチ「どうしたらいいの!?!このままじゃ…ディケブラ本編に出た際、こんな醜い姿のままよ!」

ユウスケ「い、いや、そもそも本編じゃ石n…」

士「馬鹿、ユウスケ!言うな!！」

リンク「折角本人がその気になっているのに!！」

タクミ「『その気に』ってことは、……普段から気をつけないんだね」

リンク「ああ…まあ、時々は言うんだけど…すぐに飽きたりとか、新しいデザートに食いついて」

士「悪循環だな」

ユウスケ「自業自得って気もするけど、あの人、解決しないと居座るだろうし…」

ショウイチ「付き合ってやるか、——ブルンゲルの退化に!」

ソウジ「ポケモンは一度進化したら、退化しないぞ?」

カズマ「ブルンゲルじゃない、っていうかそもそもポケモンじゃないし!？」

~~~~~

士「まったく、コイツ用のジャージを探すのも一苦労だぜ」

翔太郎「ソウジさんがいやに万能でよかったなあ…まさか、最大サイズのジャージを、更に大きくできるなんて」

ソウジ「おでん同様仕込まれたからな」

ピーチ「でも、このデザイン…ダサくないかしら？」

シヨウイチ「カビゴンが文句を言うな」

カズマ「ちょ！？」

シンジ「何、今日はシヨウイチさんSな気分！？」

ワタル「まず、基本は体を動かし…そして、脂肪を燃焼させることです」

モモタロス「そんなわけで、行くぜ！」

ワタル「夏海さんも困っているんですね？じゃ、一緒に」

夏海「……はあ」

ワタル「1, 2, 1, 2, 3, 4！」

全「？」

ワタル「腕振りなさい、振りなさい。足上げなさい、上げなさい」

カズマ「何その音頭！？」

ワタル「音頭じゃないです、イクササイズです！」

タクミ「Σなにそれッ！？」

モモタロス「行くぜ！行くぜ！俺、参上！！行くぜ！行くぜ！俺、参上！！」

ユウスケ「お前も何やってんだー！？」

モモタロス『知らないのか？——イマジンの間じゃ有名な、【イマジンブートキャンプ】だ！』  
ユウスケ「知るかッ！？」

夏海「こ、これは確かに、…痩せそうです…！」

ワタル「それでは、行きますよ！モモタロス…！」

モモタロス『行くぜ！俺達の…Wライダー必殺技…！』

ワタル「足上げなさい、上げなさい！」

モモタロス『足上げた後に俺参上！』

ワタル「尻振りなさい、振りなさい！」

モモタロス『振って、周って、俺参上！』

ワタル「腕振りなさい、振りなさい！」

モモタロス『右上げ、右下げ、左上げ！』

ワタル「腰振りなさい、振りなさい！」

モモタロス『体屈めて、クマの真似！』（クマ「キンタロス」泣けるで）

士「難易度が上がりすぎだろ！」

ユウスケ「…まだだ…」

リンク「ゆ、ユウスケ？」

ユウスケ「——士のイジメ的なカメンライドごっこ（15話）に対抗するべく！修練を重ねてきた俺に…！……この程度のスピードが出来ないと思うかああ…！！」  
アスム「ユウスケさん、燃えてます…！」

ピーチ「……ゼエハア」

タクミ「うわ、こっちは倒れてる！」

リンク「…最初の『足上げなさい』の時からなんだよ…」

士「ダウン早いな!？」

翔太郎「あー…きつと、急激に太っちまったもんだから、体力が著しく低下してるんだな」

フィリップ「動きについて来れない…というのも、あるんだろうね」

リンク「いきなり激しい運動はまずすぎた。というわけで…」

士「——カメンライドごっこ、開始だ」

翔太郎「大丈夫か…？」

士「まずは初級。——クウガ龍騎アギトファイズファイズ電王キババクト電王響鬼ブレイド！」

ワタル「よし、っしやあ、はああ…、イエアー、イエアー、行くぜ、にやー、フツ…、行くぜ、たあー、ウェイ！」

ピーチ「ゼエハアゼエハア」

翔太郎「いきなり駄目だぞ!？」

士「今度は中級だ。——龍騎電王響鬼ブレイドブレイドブレイドアギトキババクトクウガクウガアギトファイズ電王キバ！」

カズマ「っしやあ、行くぜ、たあー、ウェイ、ウェイ、ウェイ、はああ…、にやー、フツ…、よし、よし、はああ…、イエアー、行くぜ、にやー！」

ピーチ「コヒューコヒュー」

フィリップ「死に掛けているね」

夏海「きゃー！」

ユウスケ「甘いぞ士！…今の俺には、上級すら物足りない！！」

シンジ「何言い出してんの！？」

士「いいだろう！俺の全力を、受け取ってみろ！！」

カズマ「ちょおおっ！？」

士「龍騎ファイズ電王クウガクウガアギト響鬼電王カブトファイズ  
タクミリンクピットカズマ芦河ユウスケファイズブレイドカズマブ  
レイドカズマサッダースキノガツサキャプテンファルコン聖白蓮響  
鬼ディケイドシンジシンジシンジ龍騎城戸真司妖怪辰巳シンジ！」

カズマ「そうえええーいつ！？」

シンジ「ちょ、これ、死人出るってレベルじゃ…」

ユウスケ「っしゃあ、イエアー、行くぜ、よし、よし、はああ…、  
たあー、行くぜ、フッ…、イエアー、やめろおお、エアー、ワンッ  
て啼いてみる、チーズ、俺を呼ぶなあああ、あねさん、イエアー、  
ウェイ、チーズ、ウェイ、チーズ、ダース、キノッ、ファルコーン  
パーンチ、いざ南無三、たあー、ちよっとくすぐりたいぞ、あんた  
は俺達を裏切ったんだ、個性的な写真ですね、今は僕達がチームだ、  
っしゃあ、お前はなるべく生きる…蓮…、煩い！」

カズマ「できたあー！なんか1個だけスマブラとかライダーとか関係  
なかったけど、できたあああ！！」

シンジ「……ユウスケは両肩をへし折るとして、士は首を折るべき  
か？それとも首を抜くべき？」

ピーチ「」↑死に掛け

夏海「ピーチ姫が！もう殆ど息をしていません！？」

シヨウイチ「無茶しやがって……膨らんだ後の救命ジャケット」

海東「彼女はもう助からない」

リンク「Σ馬鹿言つてないで助けようよ！？」

〃  
〃  
〃

ピーチ「これでよく分かったわ。——私に、運動で痩せるなんて無理無理。楽しんで痩せる方法ない？」

タクミ「——成程」

リンク「ごめん皆orz」

士「まったく…くたびれ損とはこのことか」

ユウスケ「あ、待てよ…アレならなんとかなるかも」

ソウジ「まあ、とりあえず…健康的なおからパンケーキでもどうだ」  
ピーチ「わーい」

士「こらこら！今までの努力が、無駄になるだろうが！？」

ソウジ「大丈夫だ。何故ならこれは…」

ピーチ「うぐっ、お腹が……？　もう駄目えええええ！」

翔太郎「な、何が起こったんだ？」

アスム「お腹を壊したんでしょっか……」

ワタル「…あの、まさか……【アレ】を使っただんですか!？」

土「何なんだ、【アレ】って？」

ソウジ「——ワタルがカズマを半死半生の目に遭わせるべく作った、超強力下剤薬だ」

カズマ「ワタルおまあああー!？」

ワタル「…聞こえませーん」

ソウジ「しかし、流石にワタル特製。威力が大きいなあ」

シヨウイチ「カズマをほぼ殺すための下剤だ。確実に大量排便で瘦せるだろうな」

ユウスケ「ワタルって、料理を作るよりも毒薬とか作る才能がありそうだよな……うん」

土「さて、帰るか…」

翔太郎「だな。あー、無駄な時間に付き合わされたぜ」

夏海「でも、いい汗掻きました！」

土「後は体重が減っているかだな」

夏海「……」

翔太郎（……もう知らねー……）

## File 23 「ハッスル・マッスル・フェッスル」(後書き)

### 次回予告

フィリップ「僕は重要な事に気がついた！」

翔太郎「あーはいはい、で？」

フィリップ「僕を含め、士…ユウスケ…タクミ…リンク…ナツミカ  
ン。皆、一度は死んでいる若しくは仮死状態に陥っている！つまり、  
全員この世界ではファイズギアに適合しているんだ！！」

夏海「で、できませんよ？」

ユウスケ「やっぱり、仮死状態じゃ『死んだ』部類に入らないんだ  
よ」

士「つまり、完全に死んだ状態から生き返った人間じゃないと駄目  
だという事か？……人間としてある意味死んでいるシンジ、お前試  
せ」

シンジ「お前はカイザの末路を辿りたいのか？」

ソウジ「そもそも、他のベルト…カブトなんかはどうなんだ？」

ショウイチ「アギトやクウガは無理にしても、他もあるだろ。響鬼  
とか、ブレイドとか…」

フィリップ「勿論！すべて試そう！！」

全「えええー！？」

N  
e  
x  
t  
・  
・  
F  
i  
l  
e  
2  
4  
【変身ベルトの適合事情】

## File 24【変身ベルトの適合事情】

リンク「ライダーベルトって、たくさんあるんだなあ」

マリオ「そうだよな」

ピット「本当ですよねえ」

ヨッシー「僕達も、変身できるでしょうか!？」

カービィ「やりたいーい!僕、やりたいーい!」

ファルコ「…あいつ要らないだろ?おい」

ゲームウオッチ「知るか。でも、興味はあるよなあ…」

ロボ「自重シテクダサイ、ゲームウオッチサン」

ユウスケ「ところで、皆が好きなライダーって?あ、3人以内で」

リンク「ううん、シンプルなファイズもいいけど…スマートなアギトも捨てがたいし、独創的なダブルも…。…昭和だと、スーパー1とか…V3とか、Xかなあ…」

マリオ「俺は、BLACKとか、BLACK-RXだな。あ、平成はカブトとか、クウガ」

ピット「僕は平成だとアギト、昭和だとダントツで1号ですよ!」

ヨッシー「僕は…やっぱり、電王とかダブルですね!昭和は…あまり知りません。ごめんなさい」

カービィ「僕デイクイド!」

ファルコ「…だから、あまり変わらないだろあいつは!？」

ゲームウォッチ「お前は？」

ファルコ「スカイライダー、ブレイド、ファイズ、カブト、ダブルゲームウォッチ（全部、空飛べる奴らだろ。それ）」

ロボ「私ハ、ヤハリ……ファイズ”ヤイクサ”デスカネ？」

ゲームウォッチ「俺は……」

海東「黒いからBLACKだね」

ゲームウォッチ「昭和だと、スーパーかな。……平成はクウガ」

海東「……↑黒焦げ」

ファルコ「馬鹿野郎……制裁神・ゲームウォッチに逆らうなんて……本当に大馬鹿だぜ」

ユウスケ「海東だし」

フィリップ「……はっ！」

翔太郎「（げ、何か考えやがったな）……どうしたフィリップ？」

フィリップ「僕は重要な事に気がついた！」

翔太郎「あーはいはい、で？」

フィリップ「僕を含め、士……ユウスケ……タクミ……リンク……ナツミカン。皆、一度は死んでいる若しくは仮死状態に陥っている！つまり、全員この世界ではファイズギアに適合しているんだ……！」

リンク「へ？」

タクミ「本編でまだ明らかになっていない（……現在79話）なのに！なんてことを……！」

ピット「この悪魔ッ！」

フィリップ「僕は悪魔だ」

翔太郎「開き直るなッ！……リンクは本編待ちとして……残りはどう

ういう状況下だよ」

- ・土↓冬映画
- ・ユウスケ↓31話
- ・夏海↓26↓27話
- ・タクミ↓オルフェノクになっている地点で死亡している

フィリップ「レッツトライ、ナツミカン！」

夏海「夏海です！……ドキドキ……」

『Error』

夏海「きゃあっ！……で、できませんよ？」

ユウスケ「やっぱり、仮死状態じゃ『死んだ』部類に入らないんだよ」

土「つまり、完全に死んだ状態から生き返った人間じゃないと駄目だという事か？……人間としてある意味死んでいるシンジ、お前試せ」

シンジ「お前はカイザの末路を辿りたいのか？」

ユウスケ「シンジさん！シンジさん、落ちついてえええ！俺が試す、俺が試すからあああ！……」

『Complete』

Yファイズ「……出来ちゃった」

土「ず、ずるすぎる！貸せ、俺もやる！！」

Yファイズ「お前はカメンライドでいくらでもできるだろ！？」

カズマ「あ。……お前がありなら、海東は？」

海東「——ブレイド君。……【分岐されし未来】はこことは関係がないし……しかもそれは、明らかに嫌味海？」

カズマ「嫌味以外の何があるんだよ」

ソウジ「そもそも、他のベルト…カブトなんかはどうなんだ？」

ショウイチ「アギトやクウガは無理にしても、他もあるだろ。響鬼とか、ブレイドとか…」

フィリップ「勿論！すべて試そう！！」

全「えええー！？」

フィリップ「とはいえ、芦河ショウイチが言った通り…クウガとアギトは無理だ。恐らく、改造手術をしても取れない」

ユウスケ・ショウイチ「…するなあぁ！？」

フィリップ「加えて、…龍騎は制限が皆無。やってもつまらないし興味も湧かない」

シンジ「宣戦布告と受け取るぞ」

G 龍騎「———おー、できたできた」

ファルコ「って、…ゲームウォッチおまああああああっ！？」

〃  
〃  
〃

フィリップ「まずはファイズ。ファイズギアへの制限は、【死人、或いはそれに近い存在】だ」

リンク「だとすると、まず俺とユウスケ…土も一応クリアなのかな？」

士「フィリップも、OKだな」

シンジ「先生、カズマの消滅はカウントに入りますか？」

フィリップ「入らないだろうね。多分」

ユウスケ「他に、もうそれっぽい人は………あ」

シヨウイチ「どうした？」

ユウスケ「…なあ、これ…リュカ君がいないから言えるんだけど。

……彼のお兄さんだったら…」

シヨウイチ「Σそれは思っても言うなああっ!？」

フィリップ「今度はブレイド。【ダブルのジョーカーサイド適合】  
【スマブラの世界の人間ではない事】の2つ…ただし後者に関しては、ディケイドにも適応する」

カズマ「これは、既に翔太郎がOKだよな!」

翔太郎「ってか、カズマは本編でジョーカーサイドだったな。だって、ディケイドにもなれるんじゃない…」

カズマ「……俺、ブレイドしか使えないよ?つか、他が使えても龍騎に留まる」

翔太郎「…安心しろ、俺もディケイドになったとき…思考回路が既に『龍騎』『ブレイド』『ダブル』の三択だった」

士「こっちに関しては、ダブルが分からないとどうしようもないな」

フィリップ「そんな土の為に、教えよう。…ダブルの適合は、『信頼しあっている人間同士』と、その中で『生まれの早い人間がジョーカーサイド』の2つ」

士「だから、シンジにフアングという凶悪メモリが渡ったのか!」  
シンジ「人間フアングストライザー、かますぞ?」

サンダース「ダーツス」↑待機中

フィリップ「ちょっと早いけど、ダブルもやってみよう。…ちなみに、ファルコは一番信頼している人物…フォックスと1つ上だったんだね。納得納得」

ファルコ「待て、その口振りだと…テメエ、以前ブレイドにした時は…偶然かッ!?」

ショウイチ「…俺は絶望した」↑Jサイド

ソウジ「ははは」↑Cサイド

アスム「ショウイチさんに黙祷」↑Jサイド

ワタル「ついでに敬礼」↑Cサイド

ユウスケ「土、言いたいことは?」↑Jサイド

士「…お前の体を使うにしても、動かす権利は俺にあるからな?」

↑Cサイド

ユウスケ「お前は何処のアンクだッ!」

ゲームウォッチ「ま、こうなるわな」↑Jサイド

ロボ「ハイ」↑Cサイド

マリオ「…待て、あいつら、そもそもどうやってライダーに?つか、…平面にならないのか?」

ピット「あー、大丈夫。いくらゲームヲでも…ライダー龍騎になる場合は立体

だったから」

マリオ「Σそれも怖ええ!？」

タクミ「僕17だよね？」↑Cサイド

リンク「俺、一応16だよな？」↑Jサイド

翔太郎「どうなってんだこりゃ…」

フィリップ「多分、リンクは超適合力でジョーカーサイドが最優先されるんじゃないかな？ファングジョーカーになる場合は、ファングが優先されるみたいだけど」

フィリップ「今度は響鬼。こっちも特殊で、アスム君とリンク以外は…【戦いの経験が長いもの】しかできないらしい」

士「…じゃ、ライダー組はソウジで決定だな」

ショウイチ「Σ俺は無視か」

士「お前、アギト一年生だろ」

ショウイチ「……まあな……でも、……G3に関しては…そう、G3ユニットに関しては……ツorz」

士「G3はライダーに入るのか？」

ソウジ「ガンバライドで出ているんだ、入るだろう」

ショウイチ「…俺は今、初めてお前に感謝するんだが…」

翔太郎「いや。…G3使って戦っていたんなら、芦河さん断然ありじゃあ…何もライダー経験っただけじゃないだろ。判断基準」

ショウイチでもOKです

フィリップ「いや、芦河ショウイチはむしろ煌鬼だ」

ユウスケ「それは言ったらあかん！それだけはあかん！！」

G 響鬼「…任天堂の基盤舐めんなよ」

マリオ「なんつーか、その、…あいつの前だと、俺達本当に頭を下げるべきだよな」

ピット「大先輩ですからねえ」

リンク「うん。ゲムヲは凄い」

ソウジ「ゲームウオッチは良くやっていたなあ」

シヨウイチ「ああ…」

シンジ「ごめん、GB版しか…」

カズマ「あー、俺も！GCで初めてゲームウオッチ知ってさ、中古屋でGB版買った！！」

アスム「最後の四人の話題についていけません」

ワタル「ついて行かなくてもいい気がします」

キバット（なつかしー…）

フィリップ「続いてカブト。【カブトゼクターの認めた相手】なら、OKだ」

カブトゼクター『シユイイン』

ソウジ「『ライダー側だと、芦河シヨウイチと辰巳シンジとアスム』だそうだ」

シンジ「orz」

カズマ「なー、よく考えたらシンジも結構凄いほうだと思う」

シヨウイチ「…なんでゼクターに認められるんだ？お前は」

カブトゼクター『シユイイイン』

ソウジ「『ファイターだと、リンクとマリオと』…」

マリオ「お前さ、超適合力自重してくれない？お前、殆ど全てに対応してるよな？？」

リンク「っていうか、俺、年齢的には確実にサイクロンなのに…ジ  
ョーカーなだけど？」

ソウジ「」

シヨウイチ「——おいっ！ソウジが、ソウジが引きつった笑顔  
を！？」

ユウスケ「あんなソウジさん初めてだ！」

士「もう大体分かったが…誰だああっ！？」

ソウジ「…ゲームウォッチ」

士「…お前、ブレイド・ディケイドになれないぐらいで…リンクに  
順ずる超適合能力なんだな」

ゲームウォッチ「携帯ゲームの基盤だしな！」

ピット「そこは偉そうにする場所じゃないから…」

フィリップ「電王は、【憑依した相手との合意】並びに【憑依した  
人間が何らかの異端であること】…ただしマイナス制限は、【人外  
であること】」

士「おい、異端と人外は紙一重だろ」↑破壊者  
リンク「だよなあ…」↑超適合能力、作品によってはウサギや狼に  
変身

ピット「ですよねえ」↑天使、バーロー、ナス  
ゲームウォッチ「ああ」↑平面なのにスマブラ2作品に参加

ショウイチ「…どうせ俺はギルスだ」

ワタル「えーえーそうですねー僕ファンガイアですからー」

ファルコ「俺も含まれるんだよな、これ。…ユウスケはあれか？  
異端判定じゃなかったのか」

ユウスケ「…ギリOKってところかな…」

シンジ「…俺についてはどう片付ける？」

カズマ「タイムベント」

フィリップ「そもそも、君の場合はWの変身状態時…体がもぬけの  
殻だったからね。それで変身できたのかもしれないし」

モモタロス『Σ(。D)ガーン』

カズマ「…シンジ、…中に入れた状態で変身してやれよ。モモ可  
哀相」

シンジ「…嫌だ」

カズマ「なんで？」

シンジ「…だって中のひて」

士「——中の人なんていない！」

シンジ「(…ε´・`・)」

モモタロス『メチャクチャ嫌がつてやがる…』

カズマ「うえああー(訳：しーんーじー)」

士「息子泣いてるぞ。とりあえず、とつとと変身してやれ」

シンジ「はいはい、…へんしーん」

モモタロス『やる気ねえっ!?!』

『Full Charge』

全「あつれええええええええええ!?!変身できたあああー!?!」

S電王SF「もういいー?(怒)」

ワタル「あの人、根本的におかしいですよ!?!」

ショウイチ「逆に、あいつOKで俺達アウトなのが気に入らん!?!」  
ソウジ「…喜ぶ所じゃなくてか?」

フィリップ「キバは【人ならざる存在】…つまりは人外だね。電王の逆として見ていい」

ショウイチ「ワタルはともかく、俺とタクミはOKだな」

タクミ「あまり嬉しくないOKですけどね…」

ファルコ「人じゃないから、俺もOKだな。…勿論…平面人間・ゲームウォッチ神も……」

ピット「天使じゃ人外に入らないのが納得いかない…!」

マリオ「入りたいのかお前は!?!」

ピット「でも、リンクさんみたいに楽しがって空中ブランコこっこしたくもない」

マリオ「……リンカー、そろそろ戻ってこようなー」

「キバ」」

ワタル「でも、そもそもキバットは人体に魔皇力を注ぐんですよ?

フィリップ「ここは、自分の世界の常識が通用しない世界だ。魔王  
力も、そこまで人体に被害は与えないだろう」

ワタル「そうなんですか」

フィリップ「まあね」

シンジ「土、蹴るぞ？」

カズマ「ところでさあ、ユウスケって……」  
「異端」扱いされないだけなんだな」

「は？」

YキバdkbkF「……海東おおおッ！地球の肥料になれええええええええええ！」

夏海「？ユウスケーツ！？」

ワタル「ぼ、僕も制御がやっとのドカバキを……」

シヨウイチ「しかも、海東を埋没させるためだけに!？」

アスム「ししょおおおおーッ！」

シンジ「いや、あれ制御出来てない！暴走してる！！」

土「ユウスケ、正氣に戻れ！お前の聖なる泉はどうしたー！！」

カズマ「ユウスケって、  
“人外”扱いなんだなっ！」

ソウジ「キラキラした目で見る前に、止めようか…カズマ」

土「調べて分かったのは、リンクの異常性と……ついでにクウガ・ア

ギト・ブレイド・ディケイド以外のライダーになれることが判明した……ゲームウォッチ。貴様だ」  
リンク「うん、ごめん」  
ゲームウォッチ「ははは」

ユウスケ「後、リイマジも…比較的制限のゆるかったディケイドとダブルを除けば、

小野寺↓ファイズ、ブレイド、キバ

芦河↓ブレイド、響鬼、カブト、キバ

辰巳↓カブト、電王

尾上↓ブレイド（一応優先度ではリンクが」だが本来の制限はクリアしている）、キバ

剣立↓…

アスム↓ブレイド、カブト

天堂↓響鬼

ワタル↓…

——シンジさんよりも、ショウイチさんのほうが異常だということとが判明した!!」

ショウイチ「待て、それ以前にファイズになれたお前は人の事を言えないぞ!こらっ!!」

タクミ「っていうか、その次に異常なのはユウスケさんですよ!？」

士「——カズマとワタルが残念な結果になったな」

ユウスケ「そういえば、ワタルはともかく…カズマ、…あまり関わ

ってこなかったな……」

ワタル「ええ、人外とか異端とかそういう話になると…確実にカズマは相槌役でした」

カズマ「…俺だって好きで普通じゃないもん！」

ソウジ「いや、……普通が最高のアドバンテージだ」

ショウイチ「本日二度目の感謝、そして本日初の同意だ…」

シンジ「…異常とか異端とか妖怪タツミシンジとか言われるよりは、マシだぞ。カズマ」

カズマ「……うえーい」

ピット「…File 10でも思っていたけど、カズマさん、本当にあの【異常者集団】の中では至って普通に分類されますよね」

土「……実際は、桃井令子を殺した鎌田力ツターを生身で受けても死なない防御力だったけどな」

ピット「？あれっ！？それは、確実に【異常】ではっ！！？」

File 24【変身ベルトの適合事情】（後書き）

次回予告

士「ポケモン、スナアアアップ！」

ソウジ「ヤナップ？」

シヨウイチ「違う！一文字違う！！」

ユウヤ「ああ、では…【Aポケの世界】でたくさんポケモンが撮れる場所を知ってますから。そこに行ってください」

シンジ「ひたすら嫌な予感しかない…」

カズマ「俺も」

士「知るか。行くぞ！ポケモンスナップ！！」

士「」

夏海「土くううん！」

海東「あのオニゴリ…ディメンジョンシュートだ」

ユウスケ「やめい！」

Next...File 24【士のポケモンスナップ道】

## File 25【士のポケモンスナップ道】

士「ポケモン、スナアアアアップ！」

ソウジ「ヤナップ？」

シヨウイチ「違う！一文字違う！！」

リンク「士、お前、何してるんだよ……」

士「煩い！俺はポケモンスナップ道を極めるんだ！！」

夏海「あの写真の腕で、ですか！？」

翔太郎「やめとけよ。最低評価の連発だぞ」

士「……お前ら、『子供は褒めて伸ばせ』と教わらなかったのか？」

フィリップ「君は親に褒められた記憶があるとでも？」

士「……orz」

ユウスケ「皆、あまり士を苛めるなよ！」

ソウジ「どうどう」

ワタル「でも、ヘタクソなのは事実ですよ」

アスム「ですよね」

カズマ「……イエス」

タクミ「あ、でも由里ちゃんは味があっついていいって言ってたけど」

シンジ「個性的な写真ですね（笑）」

翔太郎「——今思ったんだが、シンジのあの返しは300枚分の  
オブラートに包まれているんだな」  
シヨウイチ「500じゃないか？」

カズマ「間を取って400」

シンジ「——千切ってそのオブラートに包むぞ？」

リンク「でも、別にポケモンじゃなくても…スマブラファイターの  
皆は？」

マリオ「俺達は！」

クッパ「いつでも！」

ワリオ「OKだぜ！」

士「俺は“これぞ”と思った被写体を取るんだ！」

ユウスケ「居候カメラマンが仕事選ぶなよ！」

ユウヤ「ごめんくださー……げっ、まずい時に来た」

リンク（この地点で悟っちゃったか）

士「…ユウヤアアアッ！！」

ユウヤ「ぎゃーっ！？食べないで、食べないでー！！」

夏海「土君、ユウヤさんを襲わないでください！」

カズマ「——辰巳家秘伝奥義・記憶改変チヨップ！」↑手刀ビシリ

士「ごふあっ！？」

ユウスケ「か、カズマ。なんで“辰巳”？」

カズマ「シンジの家の技だから」

ユウスケ「お前の家には、あくまで伝わっていないんだな？」

カズマ「…どうせ俺の家は普通です」

シンジ「一応まだ、『嘆きのツボ』とか色々あるんだけどね」

ユウスケ「凄っ！？」

ワタル「あーでも、僕の家にも『ヤンデレのツボ』があります」

アスム「ヒビキさんから『肩こり喪失のツボ』を伝授してもらいま

した」

ソウジ「『石化のツボ』なら」

シヨウイチ「『目の疲れ紛失のツボ』ならあつたな」

タクミ「オルフェノク用に編みだされた、尾上家秘伝『灰化のツボ』  
というのがあるんですけど…僕には意味ないんですね」

モモタロス「『別腹刺激のツボ』ならあるぜ」

ユウスケ「……安心しろカズマ、小野寺家にも、変なツボは伝わっ  
ていないから」

カズマ「うん、ありがとう人外」

士「……ポケモン、ヤナアアアアップ！」

シヨウイチ「違うだろ士、スナップ！スナップだ！！」

ソウジ「地面タイプでいそうだな」

シヨウイチ「いてたまるかあああ！？」

ユウスケ「本当に記憶が（若干）改変されたよ！？」

夏海「かくかくしかじか……というわけなんです」

士「ポケモンスナップ！」

ユウヤ「と言われても…サンダースは元より、シャワーズもフリー  
ダムですし、ドンカラスは論外、ウインディは写真とか嫌がるし、  
ハッサムはドンカラスのせいでまず掴まらない、キノガッサはいい  
んですか…」

士「物足りん！」

ユウヤ「……でしょう？第一、キノガッサもキノココ時代からサン  
ダースが苦手で車椅子をバリケードにしていますし」

キノガッサ「……」↑ガクブル

ユウスケ「他にはないのか？牧場とか…」  
ユウヤ「ああ、では…【Aポケの世界】でたくさんポケモンが撮れる場所を知ってますから。そこに行ってください」  
シンジ「ひたすら嫌な予感しかない…」  
カズマ「俺も」  
士「知るか。行くぞ！ポケモンスナップ！」

（ （ （

士「ポケモン、ヒヤアアアアップ！」  
シヨウイチ「わざとだろお前！？」

海東「ここが、かの有名なオーキド研究所か…ドキドキ」  
シンジ「…」↑ハネツコと遊んでる  
カズマ「お母さん、ポケモンに気を取られないで」  
ユウスケ「海東。…オーキド邸に忍び込んで、何か盗むような真似はするなよ！？」

ソウジ「やった地点で蹴り飛ばす」  
海東「失礼だな。僕がそんな事をする人間だとでも？」  
ユウソウ「…思う」  
シヨウイチ「ユウスケとソウジから、ここまで信頼を得られない人

間も初めてだな」

タクミ「たくさんいますね」

フィリップ「ここは、某永遠の10歳が捕まえたポケモン達がいるからね。中でも、目玉は二進化を遂げているジユカインにゴウカザル、ドダイトスにムクホークだ」

ワタル「例の如く、ピカチュウはいないんですね」

アスム「今はイッシュにいるんじゃないですか？」

翔太郎「最初のゲットは飛行タイプだな」

ソウジ「今頃、ミジユマルやポカブをゲットしていそうだなあ」

シヨウイチ「ジム戦をしている頃だな」

モモタロス「来週辺りには、夢の跡地に行つてそうだな」

リンク「更に再来週はメロメロを使うツタージャに出会いそうだなね」

夏海「…なんで皆さん、そこまで詳しいんですか？」

士「よし。…狙うは激レアショット…木々を移動するジユカイン！  
ユウスケ「士、それは難易度高すぎるって」

カズマ「ダーテングを越すジャンプ力のコータスとか、電撃耐性が異常なオオスバメとか、メタングやリザードンを頭突きでKOしたオニゴーリとか、木に上るヘイガニとかいるだろ？」

ワタル「カズマ、…ヘイガニはともかく、オニゴーリもともかく、他の二つはかなり難易度高そうです」

士「お、見つけたぜ」

オニゴーリ「？」

士「…なんだ、オニゴーリか」

オニゴーリ「（ビキッ）」

士「↑氷結

夏海「土くううん！」

海東「あのオニゴーリ…ディメンジョンシユートだ」

ユウスケ「やめい！」

カズマ「っていうか、あれチーズが悪い！チーズがオニゴーリに謝れ！！」

オニゴーリ「ゴォー…」↑完全に怒った

タクミ「ど、どうするんですか！？完全に怒ってますよ！？」

士「決まっている！…氷タイプには、炎だ！！」

「Kamen Ride DECAD E！」

「Kamen Ride HIBIKI！」

アスム「？…コラッツ！？」

海東「鋼も効くよ、士」

「Kamen Ride DI-END！」

「Kamen Ride GAI！」

シヨウイチ「ポケモン相手にオーバーキルすんなー！？」

シンジ「ポケモン苛めんな」↑D響鬼に顔面パンチ

D響鬼「ごふっ！？」

コータス「コッ」↑ディエンドに顔面飛び蹴り

ディエンド「ぐふおあッ！？」

ユウスケ「馬鹿」

士「いきなり言うか！？…っつ、鼻痛い」

海東「士はまだいいよ。僕なんか、鼻血が止まらない」

シンジ「ごめんなーあれもう忘れていいからなー、俺が写真撮るよー」

コータス「コオオー！」↑感動

タクミ（そういえばあのコータス、感動屋設定だったっけ）

ショウイチ（ディエンドを仕留めた時の顔からは想像できなかったがな）

アスム（…チハルさんのコータス思い出したなあ）

ケンタロス軍団「「ブモォー！」」

士「む！初代ではかなりレア度が高かった筈なのに、アニメでは30体もゲットされたケンタロス！！」

ユウスケ「そういえばケンタロスって、結構苦労したなあ…」

ソウジ「今は金銀リメイクのお陰で、金に大きな負担を出さずに手に入るからなあ…」

ショウイチ「それでも、出現率は低いがな」

士「よし、撮るぞ！」

カズマ「ちよっ、士、あれ…」

士「ん？」

シンジ「♪」↑先頭のケンタロスの上にいる

士「？何やってんだあいつはあああつ！？」

ユウスケ「すごっ！いつの間に！？」

ソウジ「あ。———そういえば、金銀にはシンジというサンダース・

ケンタロス・モンジャラ使いのトレーナーがいてだな……」

翔太郎「ソウジさん言うな……… ああああ、フィリップが検索し  
したああああ！」

フィリップ「シンジ…ケンタロス…金銀…」

ムクホーク「ムク、ホークッ！」

士「ムクホークか。あれもいいな…だが、ムクホークの真骨頂とい  
えば、猛禽ポケモンらしく足の強い事を証明するスナップ！」

ユウスケ「でも、そんなの撮れるのか？」

士「ある。…おい、ムクホーク」

ムクホーク「…？」

士「——あそこに丁度いいオニゴーリがいる、奴を攫ってその後  
池に落とせ」

ユウスケ「士あああー！？」

アスム「それは完全に復讐でしょうが！？」

海東「コータスもよろしく」

カズマ「お前も何言ってんだあああ！」

ムクホーク「……ムクホー」

オオスバメ「スバ？」 ↑呼ばれたので降りてきた

ムクホーク「ムツク、ムクホ」

オオスバメ「…」

士「 ↑オオスバメの翼パンチ貰った

海東「 ↑ムクホークのキックの後にオオスバメに燕返し貰った

シンジ「ごめんなー、馬鹿ばかりでホントごめんなー。これ食いなー」↑ポフィン提供  
ムクホーク「ムクホー！」  
オオスバメ「スバツ」  
ショウイチ「……もうこれ、【シンジのポケモンふれあい教室】でいいだろ」  
ソウジ「それでいける気がしたな。今回」

士「くそ、冗談だったのに」  
タクミ「馬鹿言わないでくださいよ。『オニゴーリ池に突き落とせ』と言った時の顔、メチャクチャ本気でしたよ」  
カズマ「あ、なあなあ！こいつとかどうだ？」  
ワニノコ「ワニワニワッ！」  
士「ワニノコか…興味ない」  
カズマ「ユウスケ、士に仕事が来ない理由分かった」  
ユウスケ「通りすがり関係なく、…仕事選ぶだろ？あいつ…」

シンジ「♪」↑ドンファン、フカマルと遊んでる  
ドンファン「ドンファン」  
フカマル「フカー」  
ユウスケ「同時に、……シンジさんのポケモン好きも露見されたけど」

カズマ「動物好きなんじゃない？一人だけ動物名字（【辰】と【巳】）だし」  
アスム「カズマさん、それ、動物と言うより干支って言うんですよ」

（そして帰る時間…）

士「くそっ、結局収穫なしか…まあ、ケンタロス軍団とベトベトンが撮れただけいいとするか」

夏海「あれ？土君、ベトベトンなんていつ撮ったんですか？」

士「ん？実は数分前に、海東が研究所に忍び込んでな…その際、オ―キド博士とでも間違えたんじゃないのか？いきなり押し掛かってきたんだ」

夏海「…ああ、だから海東さんが臭いんですね」

ユウスケ「いつも嘘くさいけど、今日は格段に臭うな海東！」

海東「小野寺君、苛めかい」

## File 25【土のポケモンスナップ道】（後書き）

### 次回予告

翔太郎「久々のハードボイルド相談所。さて、今日の依頼人は…？」

デント「実は、明日かなりの団体客が来るのですが…従業員が足りなくて」

翔太郎「悪いが、そう言うのは探偵の仕事じゃ…」

デント「…うちのレストランのディナー食べ放題券を報酬にどうですか？」

夏海「やりましようっ！翔太郎さん！！」

翔太郎「勝手に決めるなー！」

コーン「…だから…水が多いと言ってるだろうがああああッ！？」  
土「こまけえことは気にすんな」

コーン「気にするわああああ！？」

ポッド「落ち着けえええ！コーン、キャラ壊れてる！今すぐ作り直せー！！」

バオップ「バオーッ！」

ユウスケ「……ごめん、ポッド君」

N  
e  
x  
t  
・  
・  
F  
i  
l  
e  
2  
6  
【Hの相談所／サンヨウジムで大乱闘】

File 26【Hの相談所／サンヨウジムで大乱闘】

翔太郎「久々のハードボイルド相談所。さて、今日の依頼人は……？」

夏海「そんな事よりも、大変です！」

士「どうした夏海」

夏海「実は……ストックしていた、お米が切れてしまったんです！」

士「なんだと？おい、一昨日買ってきたばかりだろ！しかも、4袋も……！」

ユウスケ「でも、無くなってるんだよ！」

海東「なんだって？——だそうだよ、ハードボイルド君。今日の依頼は、米泥棒の犯人探しだ」

翔太郎「ハードボイルドじゃねえ！っていうか、もうそれ事件でもなんでもないだろ……！」

海東「なんだって……！」

夏海「これを事件と言わずして、何と言うんですか……？」

翔太郎「いいか？そもそも……ここは基本的に入出入り自由だ。そう、何者もな」

士「まあ、そうだな」

翔太郎「そして、そこから導き出される答えは一つ！——カービィ！ヨッシー！クッパ！アイク！スネーク！デデデ！ドンキー！ワリオ！……お前ら大食い集団だ……！」

大食い集団「……ギクッ……」

ユウスケ「アーッ！しかも、早速白ご飯食べてるし……！」

士「白ご飯だけじゃない！冷蔵庫の中のもの、全部食われてるぞ！？」

夏海「キヤーツ！？」

デント「あー」

士「お前ら！弁償しろ、弁償！！」

カービィ「べんしょうっておいしいの？」

海東「誤魔化さないでくれるかな！？」

コーン「失礼しますよ」

ヨッシー「ご、ごまかすって、何をですか？」

クッパ「さあーな？」

ユウスケ「じゃあ、その手のお茶碗と特売で買った肉はどう説明するんだよ！？」

アイク「これは俺達が持ち寄ったんだ」

スネーク「その通りだ」

ポッド「おーい…」

デデデ「お前達という証拠はあるのかぞい？」

ドンキー「ウツホ」

夏海「何言ってるんですか！その大蒜パンツさんが持っている、水…シアン色に黒のストライプ！それは海東さんのお茶碗です！！」  
ワリオ「あれー？俺様のと似てるなー偶然ってすげー？？」

モロコシ兄弟「」「気付けコラアアアアッ！！！！」

翔太郎「——はっ!？」

コーン「……失礼。あまりにも僕達を無視するので、つい口が」

デント「実は、依頼をしに来たんですけど……」

翔太郎「よ、よかった…俺だけでもあの不毛な争いから脱出させてくれ」

ポッド「大変だな、あんた……」

翔太郎「で? 依頼は? ……バオップ・ヒヤップ・ヤナップのいずれかの搜索か?」

コーン「ポッドではあるまいし、そのようなヘマはしません」

ポッド「俺もしいって!？」

デント「ポッドがなくなるのは、鉛筆とか消しゴムだね」

ポッド「いやっ、俺よりもお前らのほうが深刻だろ!? 幼稚園の泊まり保育の時に、事もあるうにそれぞれ着替えとパンツを忘れて…それで俺の」

コーン「……本当に、あの時は大変でしたね! ポッドが下着を忘れて……!」

デント「着替えを持ってこなかった時はどうなる事かと」

ポッド「…orz」↑涙

翔太郎「いい友達、紹介してやろうか? ……普通じゃないのに普通に扱いされる青色だけだ」

ポッド「…緑と青以外の色で」

翔太郎「……相談役だったら、メインカラーで緑と青を使わない人が一人…天然だけど」

ポッド「天然腹黒という例があるんで、天然もなるべく避けたいです」

翔太郎「……難しいな。鬼畜とヤンデレと微病み狼と苦勞人（ただし青）と鬼畜の遺伝子が残りだから…あ、どっかの全体的に可哀相なクワガタはどうだ？」

ポッド「その赤色って、あそこで今変な球体に食べられてる奴だろ。……すいません、青色でいいので苦勞人のほうで」

カズマ「へっぶしゅ！」

ソウジ「くしっ」

ワタル「プシュッ」

シンジ「シュバルゴッ」

タクミ「ムツコロ！」

ショウイチ「ぶえっくしゅい！」

アスム「へぶしっ」

ユウスケ「ブツシュン！」

コーン「それでは、話を戻しましょうか」

ポッド「是非そうしてくれ」

デント「実は、明日かなりの団体客が来るのですが…従業員が足りなくて」

翔太郎「悪いが、そう言うのは探偵の仕事じゃ…」

デント「…うちのレストランのディナー食べ放題券を報酬にどうですか？」

夏海「やりましようっ！翔太郎さん！！」

翔太郎「勝手に決めるなー！」

士「——仕事内容は？」

翔太郎「だから勝手に決めるなっ！？」

コーン「今日やっていただくのは…料理の仕込みと、テーブルのセッティング、それからワインの準備に…」

士「……面倒だ。ユウスケ！全部覚えろ」

ユウスケ「ええええー！？」

コーン「…」↑ビキッ

ポッド（うわ…あいつ、コーンに喧嘩売りやがった）

翔太郎（若いのに苦労してんな、お前）

デント「それから、明日も…接客や料理の手伝いをしていただきたいのです」

夏海「た、大変そうですね」

海東「しかし、君達の家って…有名なレストランなのかい？」

デント「いえ、ポケモンジムです」

士「待て待て、明らかにおかしいだろ？ジムなのに、レストラン？」

コーン「サンヨウジムでは、レストランも兼ねていますから」

海東「まさか、ジムリーダーなのかい？三人とも？？」

デント「はい」

ユウスケ「…もしかして、早い話…団体の客が来るのは別にいいんだけど、こういう時に挑戦者が現れたらどうにも追いつかないから、誰か雇いたいって事？」

ポッド「まあな！」

夏海「どうでもいいです！夕食のためにも、レッツ・バイトー！」

翔太郎「いや、これ、探偵の仕事じゃないだろ！？」

~~~~

デント「さて、それでは…テーブルのセッティングをお願いします」

ユウスケ「ええーっと…こうかな」

デント「……ストオーツプ！」

ユウスケ「！？」

デント「このテーブルクロスは敷き方、テーブルの置き方！どれをとっても、最低ランク！」

ユウスケ「はあ？」

デント「テーブルクロスは均等に！そして、テーブルを移動する際は、テーブルを引き摺るように押したり引いたりしては床やカーペットに傷跡が残るからやらないように！！」

ポッド「ごめん、あいつ一応ポケモンソムリエの資格を持っているだけに…細かいんだ」

ユウスケ「…はあ」

デント「それからこの花瓶！花が萎れているじゃないですか、これは駄目！！」

ユウスケ「いや、それ準備するのは夏海ちゃんのはずじゃ」

夏海「買ってきましたよ。これでいいんですよね」

デント「——買い直しッ！」

夏海「えええ！？」

デント「この花、開いている状態ですよね」

夏海「はい、綺麗だったから…」

デント「今の時間は、まだ夕方の6時！この時間に花が開いているものを置いては、10時開店前に花が開ききって花びらが落ちてしまふー！！」

夏海「はあ…では、蕾のままのものを買ってくればいいんですね？」
デント「いいえ！蕾を買ってくるのは正解です、しかし、閉じきっているものは開店後も花が開かず結果として質素なイメージを与えてしまうので、できれば後もう少し時間をかければ開くような、そんな繊細な状態が丁度です！！」

夏海「…………ええつと、具体的には？」

デント「後もう少し時間をかければ開くような、そんな繊細な状態」
夏海「いえ、ですから…そういう状態は、目で見てどのような感じの事を」

デント「そうですね…例えば、好きな人と初夜を過ごす女子、そんな女子は普段よりも繊細で儚げに思え…尚且つ愛おしく」
ポッド「…ヤナップ、お前の主人にソーラービームッ！！」
ヤナップ「ヤナー！」

デント「↑灰

ユウスケ「い、いいのか？やっちゃって！？」

ポッド「…流石にこれ以上は不味いと思った」

ユウスケ「うん、まあ、…な」

夏海「え？え？え？…………で、ですから、具体的にどんな…ッ！？そそそれに、初夜…初夜って…………！！？」
↑頭がパンク寸前

海東「大変だ！」

翔太郎「何が起こったんだ？」

海東「料理の仕込みをしている土とコーンが…」

ポッド「ま、まさか…」

ユウスケ「行ってみよう！…夏海ちゃんは、花をよろしく！…」

夏海「あばばば！？」↑オーバーヒート

コーン「…だから…水が多いと言ってるだろうがああああッ！？」

土「こまけえことは気にすんな」

コーン「気にするわあああ！？」

ポッド「落ち着けえええ！コーン、キャラ壊れてる！今すぐ作り直せー！！」

バオップ「バオーッ！」

ユウスケ「…ごめん、ポッド君」

ポッド「ヒヤップ！お前の主人に水鉄砲！！」

ヒヤップ「ヒヤ」

コーン「ボファッ！？」

ユウスケ「ついでにバオップ！土に火炎放射！！」

バオップ「バオー！」

土「あっづあああああ！？」

ユウスケ「落ち着いたかな？」

ポッド「いや…まだ続きそうな気が…」

コーン「…ですから、このスープの水の量は決まっていますのですよ」

土「くだらんな！料理というものは、その日の気温や空気の変化で変わるもの…つまりそれによって、水の量を変えなくてはいけない」
コーン「それにしてもですね、」

士「お前の料理は、レシピに忠実に作ろうとするあまり味がお粗末な…二流料理だ！」
ポッド「バツ…！」

コーン「——成程、それはいいご意見です」

士「分かったか」

コーン「あなたの言いたいことは分かった。ですがね……こんな鍋一杯に並々と注がれたスープを出す料理人が何処にいやがるんだあああああああ！！？」

士「沸騰して水が蒸発すれば何とかなるだろ」

コーン「ならん！この量だと蒸発するまでに開店時間が来てまうわ！…あんさんホンマに厨房のチーフ経験者なんでつか！？どげんしたらそうなるつとよおおお！！？」

ユウスケ「コーン君！色々混ぜて、もうワケが分からなくなってきたからー！？」

ポッド「…バオオオオオッ！あの馬鹿2人に、最大パワーのオーバーヒートだあああつ…！」

士・コーン「↑炭

翔太郎「おいおい、お前らなあ…」

ユウスケ「そういえば翔太郎さん、ワインセールには誰が行ったんですか？」

ポッド「あ、そういえば…」

翔太郎「は？俺は知らないぞ、お前と一緒にテーブルのセットをしていたし…」

ユウスケ「……あれ、そういえば…海東って今、どこにいるんだ？」
翔太郎「そういえば、リイマジはともかくフィリップ…」

ヤナツプ「ヤナアア！」

ポッド「何があつたんだ!？」

ヒヤツプ「ヒヤー」

バオツプ「バオ?バオバオツプ!」

ポッド「——はあ!？ワインセールが、荒らされてるって!？」

ユウスケ「ま、さ、か……!」

翔太郎「フィリイイーツプ!」

ユウスケ「海とおおおう!」

フィリップ「どうしたんだい翔太郎、今僕は、【ワインソムリエ】

について検索しているんだ……ゲプ」↑ファング初変身回のピザツプ

海東「やあ、小野寺君!伝説のワイン・シャトーゲラコーニユは僕のものさっ」

ユウスケ「……ヒヤツプ!最大出力の熱湯だーッ!」

ポッド「バオツプ!もう一発、オーバーヒートッ!」

翔太郎「ヤナツプは全力のソーラービームであいつらを大地に還せ

えええ!」

ヒヤツプ「ヒヤーッ」

バオツプ「バオオオツ!」

ヤナツプ「ヤーナーッ!」

海東「ぎゃああああ!？」

フィリップ「わああああー!」

海東・フィリップ「↑砂

ユウスケ「ったく…！」

ポッド「くつそ、なんでよりもよってこんな時に疲れる真似を…」

三猿「「ゼエゼエゼエ」」↑疲労

翔太郎「…おいユウスケ、大変なことが起きた」

ユウスケ「今更どうしたんだよ…」

翔太郎「夏海が壊れて、花瓶の中にライダーソフビ突っ込んでる」

夏海「綺麗なお花ですねーうふふふー赤い赤いお花…うふふふふふふふ」↑龍騎のソフビ押し込み中

ユウスケ「夏海ちゃんあああああああん!？」

ポッド「…え、ちょっと待て、これって続くのか?え?？」

翔太郎「——駄目だ、頭痛がしてきた…これ以上続けたら俺、倒れるぞ」

続きます

翔太郎「チーン」

ユウスケ「翔太郎さああああん！天に召されないでええええええ
！！？」

ポツド「あああああ何だよ何だよ何だってこんな事になってん
だよおおおお！！？」

File 26【Hの相談所／サンヨウジムで大乱闘】（後書き）

次回予告

タクミ「…無理無理無理無理！何で、僕達がこんなことを！？」

アスム「やるなら、勝手に依頼を受けた士さん達がしてくださいよ！？」

ユウスケ「…その士と他数名が倒れたから、こうなっただ…」

シヨウイチ「……三十路バンザイ」

ソウジ（俺は料理作るから関係ないんだけどな）

アスム「カズマさん落とさないでくださいよ」

ワタル「カズマこける」

ユウスケ「カズマ足元見るよ」

タクミ「カズマさん蟹股にならないで歩いてください」

カズマ「——なんで皆、俺に追い討ちかけるのっ！？」

ポッド「バオップ・ヒヤップ・ヤナップはアウト！…どうすんだーっ！？これー！！」

シンジ「しょうがない、」

ユウスケ「ま、まさか！？」

シンジ「——俺がやるッッッ！」

サンダース「ダース！」

N
e
x
t
・
・
F
i
l
e
2
7
【Hの相談所／リイマジン軍団奮闘記】

File 27【Hの相談所／リイマジ軍団奮闘記】

前回の、ハードボイルド相談室は…

ぶつちやけ、ポッド（CV・黒崎一護）が一番苦労していました。

ポッド「えー、そんなわけで…急ですまないが、使い物にならなくなったデント達の代わりに働いてくれ。——勝手にデントが注文した、メイド服で」

タクミ「…無理無理無理無理！何で、僕達がこんなことを！？」
アスム「やるなら、勝手に依頼を受けた士さん達がしてくださいよ！？」

ユウスケ「…その士と他数名が倒れたから、こうなったんだ…」
ショウイチ「…三十路バンザイ」↑メイドの刑から逃れられたソウジ（俺は料理作るから関係ないんだけどな）↑コック

ユウスケ「こういう時、一番頼れるのが…カズマだよな！」
カズマ「そりゃあ、確かにホールをやったり…料理も作ったりしたけどさ。基本は、皿洗いだぞ？」

ユウスケ「作者と対して変わらないじゃないか。行くぞ！」
カズマ「あー、ちょっと待ってー！？流石にメイドは嫌だああああ

あっ！？」

シンジ「カズマ。男らしくない」↑ウィッグ装着
サunders「ダース」↑ヘッドドレス装備

カズマ「…女装する気満々のお前には言われたくなかった」

タクミ「うっうっうっ…こんな姿、由里ちゃんには見られたくない…

…orz」

ショウイチ「お前の言う由里は、スマブラの世界にはいないだろ」

タクミ「いないけど、——いないけどっ…！」

ソウジ「それよりもタクミ君は、リンクが来ないことを祈ったほうがいいかもな」

アスム「ですよね」

ワタル「まあ、あの人なら事情を話せばノリノリでメイド服を着てくれそうな…」

タクミ「——全力でやります」

ユウスケ「…『それこそ避けたい』、って顔だな」
ソウジ「友達の力は偉大だ」

〃
〃
〃

ユウスケ「おかえりなさいませ、ジュリエット！」
ポッド「——ってコラアアア！いきなり出オチするなー！？」

カズマ「あー、そういえばユウスケ…働いてた。ホスト姿で働いてた」

シンジ「そうなんだ」

カズマ「夏海ちゃんもメイドだったんだよ」

シンジ「ふうん」

ワタル「その親子！もう、客が来てますよ！？」

客A「すいませーん、ズリの実カレーを3つと、ナナの実ジュースを2つ！」

客B「こっちは、オレンの実パイを2つにキーの実シチューを3つ…はやめて、モモンの実パフェを4つとロメの実グリルを2つ」

客C「ナナシの実アイスを3つ、カゴの実スープを4つ、ナナシの実アイスを取り消して、ラムの実ランチを2つとモモンの実パフェ4つ！」

アスム「ちよつちよちよ！？」

ワタル「別のゲーム混じってませんか！？」

タクミ「何あれ、鬼畜！？」

ユウスケ「ええつと、何がどうだったっけ…！」

ソウジ「——3番テーブルにおでん一丁！」

全「「「？えええー！？」「」」

ユウスケ「あの、ソウジさん！？おでんじゃないです、えーっと…木の实ごちゃ混ぜポフィンです」

アスム「それこそ間違ってますよ！？」

ソウジ「安心してくれ、【天堂屋】の味そのままに作っている！」「ワタル「そんな自信満々に言われても！」

ポッド「…フリーダムすぎね？」

ショウイチ「まあいい、持って行くか」

カズマ「え、ちょ…！」

ショウイチ「——おでん一丁」

客A「え？いや、注文と全然違…」

ショウイチ「…あ？」↑触手出す

客A「……おいしく食べさせていただきまーっす！！（滝汗）」

タクミ「…ぼったくりレストランだ」

ポッド「…おいおいおいおい」

アスム（っていうか、触手なんてものを見て…よく平気でいられま
すよね。ポッドさん）

ソウジ「木の实ごちゃ混ぜポフィンできあがり！」

ユウスケ「？マジで作ったよ！？」

ショウイチ「これは、お前が責任持って運ぶべきだな」

ユウスケ「…ふあーいず…」

ユウスケ「お待たせしました、…木の实ごちゃ混ぜポフィンです」

客B「ええつ、違うつて。オレンの実パイを2つにキーの実シチューを3つ…はやめて、モモンの実パフェを4つとロメの実グリルを2つだよ」

ユウスケ「は？」

客B「だから、オレンの実パイを2つにキーの実シチューを3つ…」

ユウスケ「——これでも食つとけ」↑RU寸前

客B「イエツサアアアー！…あ、意外とおいしい…」↑ガクブル

シンジ「うん、完全に…ぼったくりだ」

カズマ「っていうか、量が既にありえなくね？」

シヨウイチ「それ以前に、ソウジの奴ポフィンなんていつ学んだ？」
ポッド「レシピがあつたんじゃないか？よく、コーンがヒヤップ達に作っていたから…」

ソウジ「——6番テーブルの特盛り木の実パフェ出来たぞ！」

ユウスケ「うわっ、でか！」

タクミ「何mあるんですか！？」

カズマ「うえーい…」

ソウジ「カズマ、早く運ぶんだ！」

カズマ「俺えええー！？」

アスム「カズマさん落とさないでくださいよ」

ワタル「カズマこける」

ユウスケ「カズマ足元見るよ」

タクミ「カズマさん蟹股にならないで歩いてください」

カズマ「——なんで皆、俺に追い討ちかけるのっ!？」
ショウイチ（ああ、可哀相すぎる）

カズマ「あーうーあーうーあー!」

タクミ「うわああああ!落ちる、落ちるー!!」

ショウイチ「よくもまあ、あんなに高く作れたな!?お前、ポケモンドリームワールドでのアイス作りを…1m以上の高さでクリアしたことがあるんじゃないか!?!」

ソウジ「クロックアップの世界に居たからできない（どやっ）
アスム「どや顔になっている場合ですか!」

ポッド「しかし、この状況で一番困るのが…」

ユウスケ「困るのが?」

ポッド「…ジムの挑戦者が来ることなんだよな。このサンヨウジムって、かなり特殊で…俺達三兄弟の中から、選んで戦えるんだが…

…（アニメ仕様）

ユウスケ「だが?」

三猿「「ゼエゼエゼエ」」

ポッド「…昨日の疲れがまだ取れないらしいんだ」

ユウスケ「で、でも、大丈夫だって!流石にそんな都合よくトレーニングが…」

トウヤ「すみません!ジムに挑戦しに来ました!」

ミジュマル「ミジュジュ」

タクミ「——キター!!!」

ユウスケ「最悪の展開だああ!!」
ポッド「バオップ・ヒヤップ・ヤナップはアウト!…どうすんだー
っ!?これー!!」
シンジ「しょうがない、」
ユウスケ「ま、まさか!？」
シンジ「——俺がやるツツツ!」
サンダース「ダース!」

(数秒後)

トウヤ「——うわあああ!ミジュマルッ!」
ミジュマル「(瀕死)」
トウヤ「何なんだよー!最初のジムに、イッシュにいない!しかも
高レベルのサンダースが出るなんて聞いてないよー!!」

サンダース「ダッ」
ソウジ「『弱すぎて相手にもならない』だと」
ポッド「当たり前だーッ!?ここは、最初のジムなんだぞ!ポケモ
ンが弱くて当たり前だー!!」
サンダース「ダー」↑不機嫌
シンジ「シャドーボール一発で終わったもんなあ」
シヨウイチ「流石に、これ以上は来ないだろうと信じたいが…」

チエレン「最初のジム、勝たせてもらっよ」
ツタージャ「タージャ!」

タクミ「また来たー!!」

カズマ「逃げてー！デコ助（勝手に命名）君、超逃げてー!!」

チエレン「誰がデコ助ですか!？」

シンジ「フッフッフ。イツシユ最強のジムリーダー（仮）が挑戦を受けよう」

ポッド「コラァー！シャガさん（か、アイリス）差し置いて最強のジムリーダー語るなー!？」

（数秒後）

ツタージャ「タ、タージャ…」

チエレン「ツタージャ…！くっ、強すぎる…まさか本当に、イツシユ最強だというのは…!？」

サンダース「ダッ」

ソウジ「『おとといきやがれ』だそうだ」

カズマ「シンジ…もう駄目。これ以上は絶対駄目、サンヨウジムに迷惑がかかる」

シンジ「えー？」

N「ボクは、戦うのは好きじゃないけど。トモダチを解放するためにも…勝たせてもらおうよ」

タクミ「まだ来たー!!」

わたる「しかも、早口すぎて上手く聞き取れないー!!」

ユウスケ「もうやめてー!これ以上は、友達とか関係なく死んじやうううー!!」

サンダース「ダース!」

N「…!この、サンダース」

シンジ「?」

N「……君のトモダチの声、聞こえるよ」

全「「何この第二の天堂ソウジ!?」」

ソウジ「ん?」

N「君に凄く懐いている。大好き、って声が聞こえる…」

シンジ「あ、どうも」

N「——まさか、他にもいるなんてね。トモダチが、今いるトレーナーの事を好きだって言ってくれるような、トレーナーが……」

シンジ「あの、…バトル」

N「邪魔したよ。そのトモダチ、大事にね」

シンジ「あ、はあ」

シンジ「——で、あれ、なんだったの?」

ポッド「さあ…?」

カズマ「それにしても、どつと疲れたなあ…」

ソウジ「じゃあ、そろそろ…こちらも昼食にするか。おでんなら、出来るぞ」

全「「ゴチになります!」」

くくく

ユウスケ「ああ…疲れた…」

タクミ「でも、唯一の救いは…あの緑の人以降…挑戦者が来なかったことですね」

ショウイチ「まあ…」

ポッド「ありがとな。そうだ、折角だし…夕飯食べるか？俺様特性料理をたっぷり味わわせてやる」

アスム「ありがとうございます」

カズマ「楽しみー」

シンジ「じゃあ、閉店しましたって札を…」

カランカラン

マリオ「ああー、疲れた…」

カービー「おなかすいたー！」

ヨッシー「はい！」

ピット「いつもそうじゃん」

リンク「あのー、まだやってます…か？」

マリオ「……大変だーッ！リンクが！リンクが石化したー！」

ピット「……タクミ君のメイド姿のせいだ」

ユウスケ「ああっ！タクミ君も灰になりかけている！？」

カズマ「一番見られたくない相手に見られたせいだ！」

ポッド「だーっ！もう……何なんだよーッ！？」

File 27【Hの相談所／リマジ軍団奮闘記】（後書き）

次回予告

ソウジ「少し気になったんだが」

シヨウイチ「俺は何もしていないからな？」

ソウジ「リンクが仮面ライダーに変身した時の、決め台詞。…あれ
って、どうやって考えられているんだろうな」

カズマ「？シヨウイチさん無視したよ」

リンク「…は？」

タクミ「いや、真顔でそんな、『は？』って…」

士「大体分かった。お前、…その場で考えてるな」

ユウスケ「だったらクウガは、どんな感じかなあ」

士「『俺の不幸は！数え切れない！！』」

ユウスケ「おいしい！」

Next・・・File 28【リンクのその場のノリ台詞】

File 28【リンクのその場のノリ台詞】

タクミ「では行きますよ！ライダーカルター！！」

全「わー！！」

タクミ「…【疾】走る本能！」

ユウスケ「疾走…つまり、早く走るってことだ！だったら…」

カズマ「これは貰った！」

ショウイチ「おおおお！」

ユウカズショウ「取ったどー！！」

タクミ「えー…ユウスケさんがカブト、カズマさんがブレイド、ショウイチさんがオーズ…はい残念。お手つきです」

士「これはどうだ！」

タクミ「士さんは…ファイズ！はい、正解です！！」

ユウスケ「えええー！？」

カズマ「マッハじゃないのか…orz」

夏海「相変わらず、何をしているんですか…」

ピット「ライダーカルタらしいですよ。なんでも、暇で仕方がない栄次郎さんと鳴滝さんとマスターの共同制作だとか」

夏海「Σ何やってるんですかおじいちゃん達」

タクミ「えー…【運】命の切り札を掴み取れ」

シンジ「ブレイドとーった！」

士「くそっ！取られたか！！」

タクミ「次は……【目】覚めよ、その魂！」

士「うおらああああ！」

海東「ほあああああ！」

ユウスケ「うおおおー！」

士「アギト取ったりイイ！」

海東「はあー！」

シヨウイチ「ひでぶっ！？」↑二人から殴られた

ユウスケ「やった！アギト……ってシヨウイチさーん！！！」

シヨウイチ「貴様ら、…そんなに俺に搾り取られたいかあああ！！！」

↑触手

ワタル「わー！わー！！！」

アスム「やめてください！写真館が破壊されます！！！」

モモタロス『おのれアギトー！！』

~~~~~

リンク「成程。そんな事がねえ」

ピット「大変だったんですよ。主に、夏海さんが」

夏海「…あんなに笑いのツボを押したのは、初めてです」

タクミ「でも、楽しそうだったよね。カルタ」

ソウジ「しかし、【疾走する本能】に【目覚めろ、その魂】なあ……」

士「どうした？」

ソウジ「いや。…少し気になったんだが」

シヨウイチ「俺は何もしていないからな？」

ソウジ「リンクが仮面ライダーに変身した時の、決め台詞。…あれ  
って、どうやって考えられているんだろうな」

カズマ「Σシヨウイチさん無視したよ」

シヨウイチ「そのままお前の中から俺の存在を消してくれ」

ワタル「あんたも何言ってるんですか」

タクミ「でも、確かに気になるよね」

ピット「リンクさん。どうなんですか？」

リンク「…は？」

タクミ「いや、真顔でそんな、『は？』って…」

士「大体分かった。お前、…その場で考えてるな」

ピット「予想通り、ではあったような…」

リンク「うーん、分からないけど…何となく？かな」

士「駄目だこいつ。ファイズが、サンシャインになるはずだ」

タクミ「…映画のセリフの一部を狙った結果では？」

「ファイズは闇を切り閃き、光をもたらす」 by・園田真里

ユウスケ「だったらクウガは、どんな感じかなあ」

士「『俺の不幸は！数え切れない！！』」

ユウスケ「おいっ！」

リンク「いくら何でも、ユウスケ個人の事を言うわけには…」

ユウスケ「……」

リンク「あっ、ごめん、悪口ってワケじゃ」

ユウスケ「大丈夫。もう、慣れてる…」

リンク「…ゴメンナサイ」

シンジ「俺（龍騎）はどんな感じなんだろう」

士「…すべてを焼き尽くす、絶対の焰…」

海東「灼熱地獄の破壊龍」

夏海「士君、大樹さん。もう少し、それっぽく言いましょうよ…すべてを破壊する龍の炎は己と似た邪悪の闇すら打ち砕く、みたいなアスム「地獄からいずる炎の竜！止められるか！！」

ワタル「病みより這い出る紅蓮の龍」

モモタロス「闇じゃないのかよ…」

カズマ「憎しみを映し出す鏡なんて割ればいい」

ソウジ「そこはもう少し工夫して、リンクらしく言ったらどうだ」

ショウイチ「『お前の心が憎しみしか映さない鏡なら！その鏡、俺が破壊する！』…だめだ、デイクイド混ざった」

シンジ「とりあえず、カズマとソウジさんとショウイチさん以外は殴るとするか」

ピット「うん、その三人は間違ってるね」

士「だが、ファイズがサンシャインという現状を考えると…」

タクミ「違いますって」

ショウイチ「ファイズがサンシャインなら、キバは何なんだキバは」

海東「運命の鎖じゃなくて憎しみの鎖を振り切ったってあれ？」

ワタル「合ってるようで全然違います」

アスム「アクセル混ざってます、師匠」

「その心の闇、…この光で照らしてみせるッ！」by・Lファイズ  
「あなたのその…憎しみの鎖！今こそ、解き放つッ！」by・L

キバ

キバット『ウエイクアップ！憎しみの鎖を解き放て！………少しの違和感しかないのはどういうことだ』

モモタロス『じゃあ、電王は！』

士『あれじゃないか？クライマックスなのに、俺、惨状！』

海東『変身できずに、俺、惨状』

夏海『出番が皆無で俺、惨状』

カズマ『……お願い、モモタロスをこれ以上苛めないで』

アスム『俺、参上！』か『クライマックス』が固定されている状況下で、それ以上を思いつく発想があるかどうか』

タクミ『何かある？』

リンク『うーん……俺の、俺達のクライマックスはこれからだ！』

……やっぱりしつくりこないな』

アスム『最終回みたいですな』

ワタル『やっぱり、戦闘中の極限状態で考えさせた方がよさそうですよ』

タクミ『ダブルは？』

リンク『そっちもなあ……さあ、お前の罪を数えろ！』じゃありきたりだし』

カズマ『俺とシンジ、怖いこと言ってたような気がするよね？』

シンジ『そうだったけ？忘れた』

夏海『ジョーカーとサイクロンに因んで、『切り札は常に、風と共にある！』とかどうですか？』

シヨウイチ『ナツマンゴー、それは……戦闘中に使い辛いんじゃないか？』

夏海「夏海です！じゃあ、シヨウイチさんは何がいいんですか」

シヨウイチ「そうだな。…そもそもガイアメモリは地球の記憶なんだから…リンクの記憶喪失設定（？）と掛けてみるのもいいんじゃないか」

ワタル（Σあ、他人任せ！）

リンク「ううーん、『風の流<sup>ただめ</sup>れは変わりゆけども、変わらぬ君の確かな記憶。身につけたるは、運命の切り札』」

ユウスケ「こらっ！サンダーズの特性初発動回の、シンジさんのセリフ乱用！！」

リンク「だって疲れた…」

ユウスケ「まあ、な」

士「そもそもリンクは、敵に普通に襲われたぐらいじゃ変身しないだろ」

リンク「いつの間にか変身するんだよね」

シヨウイチ「こら」

士「というわけで！皆でどのライダーがどんなセリフか…ひたすら予想してみるぞ！！」

ユウスケ「士、それ、さっきまでの流れと全く似てる！似すぎているから！！」

（（（

（それでもやることになりました）

ユウスケ「orz」

リンク「どうどう」

士「クウガと龍騎はもうどうでもいいな。よし、じゃあ…アギト！」

ショウイチ「アギトのキャッチフレーズは、【目覚めよ、その魂！】

…それっぽくいくとなると、バリエーションが結構あるな」

シンジ「『その悪しき魂、俺が解き放つ！』みたいな？」

カズマ「ありきたりな感じがする」

ショウイチ「じゃあ、お前は何なんだ？」

カズマ「『神に等しい力の前に！悪しき魂は、抗えない！！』」

ソウジ「カブトと被っている。アウト」

「総てを見通す天道の光には！如何なる罪も抗えないッ！！」

by・Lカブト

カズマ「難しい…」

ワタル「被らない前提で行くとなると、難しさが増しますね」

アスム「うーん。じゃあいつそのこと、土さんの説教を参考にするとか」

ショウイチ「あー、確かお人好しの馬鹿だの逃げ腰だの言っていた」  
士「勝手に曲解するな！……ユウスケに関しては『死んだ女の面影

を追ってすべてを捨てようとしてみたり』、お前については『大切な人を巻き込まないために、自分一人で逃げ続けたり』…だ！！』

シヨウイチ「冗談だ」

士「ソウジの本気ジョーク並みに笑えないんだよ…！」

タクミ「俺にとっての大切な居場所は、仲間がいる場所だ。その仲間を守るために！俺は、すべてを解き放つ！！』……うーん、微妙」

ソウジ「そもそも、アギトに変身するにはシヨウイチの腹を裂かないとな」

シヨウイチ「やめろ！？」

ソウジ「冗談だ」

シヨウイチ「…ああ、本当に笑えない。笑えなくて、泣けてきた」士「だろ？」

カズマ「次、響鬼」

タクミ「リンク個人は何がいい？」

シンジ（禁断の直訊き！？）

リンク「うーん。やっぱり、響鬼って和風だから…それっぽくいきたくないあ」

ユウスケ「和風といえば、シンケンジャーだよな」

リンク「なら、『未来に明日を受け継ぐために！邪なる心を清めるために！…いざ参るッ！』ぐらいでいいかな」

アスム「あつ、…ちゃんと【清め】も入っている！」

ワタル「しかもアスム入ってますよ！？シンケンジャー要素も！」

タクミ(…やっぱり、本人のほうがいいの考えるなあ)

士「俺は、鬼と掛けたいな」

シンジ「ええええーっ!? この、『もう響鬼はリンクの意見でよくね? by ゲームウオッチ』の雰囲気の中、なんで言うの!?!」

士「思いついたぞ!」

シンジ「聞けよ!」

士「『紫の鬼は清めの音撃! 打ち立てフレッシュ、キュア響鬼!』」

シンジ「しかもファイズ以上に自重してないし!」

海東「だったら僕は、『ポケモンスナップ回時のオニゴーリを打ち砕く炎』と」

カズマ「シンジ、空間裂け。オニゴーリ、呼べ」

シンジ「もう本人がファイズアクセル顔負けの速さで来てる」

オニゴーリ「——ゴオオオー!!」↑アクセルクリームゾン頭突き  
海東「ごっはあ!?!」

タクミ「……あのオニゴーリ、素早さどんだけ振ってるんだろうか」

ワタル「じゃあ、今度はディケイドで」

ユウスケ「【破壊】に【旅】に【通りすがり】…たくさんあるな」

リンク「無難に、『それが間違いだと言うのなら! その概念を、破壊するッ!』ぐらいは言っておこうかな」

タクミ「でも、そういえばファイズ変身回で…ロイにテンプレ通りの『お前は一体何なんだ!』って言われたのに、リンク、『なんでもいい』的な発言をしたよね?」

リンク「うん、だって、俺別にそういうの気にしないし」

ユウスケ「それで、いいのか…？」

カズマ「そもそも、ファイズフラグしかなかったのにディケイド的なセリフを言うかな？あの状況下で」

ソウジ「決め台詞に使えるかは別として、…『人は己を知るために、心の旅をしている。数々の出会いを経て、自分を知り、高める！』…みたいな？」

ワタル「【旅】の要素はしっかり入っていますね」

海東「破壊ねえ。……某永遠の10歳のゴウカザルは能力・特性ともに破壊されつくしたチート猿だよね」

シンジ「どうしてお前は俺に喧嘩を売るかな？」

カズマ「頭突きに定評のあるオニゴリさんまだ残ってるぞ」

タクミ「このまま頭突きの熟練度あげたら、ロケット頭突きかアイアンヘッド習得しますよ」

オニゴリ「…」↑頭突き体勢

海東「ごめんなさい」

士「もうこれ以上はないだろ」

カズマ「ないとは思うけど、…まだ、……タトバが」

シンジ「タトバか…」

ショウイチ「あの、タトバか」

ソウジ「タトバ、な」

士「おいおい、タトバなんて出るかどうか分からないものを…」

ユウスケ「——あの、【オーズ】なんだけど」

リンク「…オーズは、映司さんの『手を伸ばさなかったら』がいよね」

アスム「それ以外は？」

リンク「…えっと」

ワタル「ないんですか」

リンク「…ごめんなさい」

タクミ「まあ、オーズは始まったばかりだし…うん。仕方がない」

海東「じゃあ、タトバを使ったセリフなんてどうかな？」

士「それ、難しいだろ」

海東「結構簡単だよ。例えば…『例えこの体が朽ち果てようとも！止められないよ、バナナへの愛！』」

リンク「Σドンキーじゃないか！？それ！」

士「決め台詞にもならんだろ！」

海東「えー、じゃあ『大したことないよね、登場回数が少なくて、バトルが無敗扱いってだけなのに』」

オニゴリ「…」↑怖い顔＋いちやもん＋挑発＋怒り＋絶対零度＋悪の波動

カズマ「海東！オニゴリに謝れ、土下座どころか頭が地面に突き刺さるまで謝れ！！」

シンジ「アクセルクリムゾン頭突きってレベルじゃないぞ！今度のは…！」

海東「え？」

（しばらくお待ちください）

海東「↑氷結

士「今回ばかりはお前に非が大きい」

カズマ「あほ」

ユウスケ「そのまま一生凍ってろ」

夏海「二人とも、容赦ないですね」

リンク「海東さん。…いくらなんでも、今は酷過ぎると思う」

タクミ「しまった、火がついた…！」

リンク「確かに、出番は少ないかもしれないけど。それでも仲間のために頑張っていたんだ。——そんな彼を侮辱する行為は、許されることじゃない」

士「なんだってー」↑海東の代わり

リンク「あなたを裁くのに、同情は要らない。……心を鬼にし、氷のように冷たき心を…打ち砕くッ！」  
<グレイリー！>

カズマ「海東どうでもいいから、それレイラに返してあげてリンク！」

士「でも、…この世界原産のグレイリーには確実に変身できるだろうなあ」

カズマ「Σチーズ何言ってるの」

この後、海東はおいしく冷凍されました

File28【リンクのその場のノリ台詞】（後書き）

次回予告

士「タトバ、ラトラータ、ガタキリバ…」

シンジ「どうしたんだよ、士」

士「オーズって、どんだけコンボがあるんだ！？おい、これダブル超えるんじゃないのか！？」

カズマ「まあ、メスールとガメルのメダルの存在考えるとなー」

海東「大体わかった！こちらも、対抗するためにコンボを考えればいいんだ！！」

カズマ「それ根本的な解決？」

ソウジ「おっと、カズマが黒い」

士「オオスバメ！ヘイガニ、ジュカイン！…スーガアーイイーン！！」

シンジ「やめて！オオスバメは頭部じゃない、腕あたりに装着させたほうがいい！！」

ユウスケ「それもやだよ！？」

N  
e  
x  
t  
・  
・  
F  
i  
l  
e  
2  
9  
【コンボと暴走と辰巳の逆鱗】

## File 29【コンボと暴走と辰巳の逆鱗】

士「どうやら、オーズドライバーやコアメダルの売れ行きは上々らしいな」

ユウスケ「だよな。もう、どこに行っても売り切れで！」

海東「フツ。僕はちゃんと発売日にゲットできたよ！」

夏海「本当に凄いですよねえ。ガチャガチャも、もう在庫無しですもん」

シンジ「でもさー、ダブルに続いて今度は集める形式。……人間の欲望の片鱗を垣間見た」

カズマ「うん。人間って凄い」

ユウスケ「そうだな」

ショウイチ「…その言い分だと、お前ら、まるで人間外の生物の視点から見ているようだな」

ワタル「妖怪とアンデッド予備軍と超回復能力とギルスですからね」  
ショウイチ「って、俺も入ってるんかいッ！」

リンク「でも、面白いよな。タトバ！タトバ、タットツバ」

ピット「その調子で、勢い余ってオーズにならないでくださいよ」

リンク「」

ピット「えっ、何そのやりたそうな顔！？ちょっとやめてくださいよ！！？」

士「…待てよ」

カズマ「？」

士「タトバ、ラトラータ、ガタキリバ…」

シンジ「どうしたんだよ、士」

士「オーズって、ただだけコンボがあるんだ！？おい、これダブル超えるんじゃないのか！？」

カズマ「まあ、メズールとガメルのメダルの存在考えるとナー」

ユウスケ「今判明しているのは…タトバ・タトラータ・タカキリバ・タカキリター・ラトラータ・ガタキリバ・ラトラバ・ラキリバ・ラキリター・ガタキリター・ガタトラバ・ガトラータ…かな？」

タクミ「基本フォームと三色コンボ以外、分かりにくいですよネ」

翔太郎「おいおい、この地点でダブル越えてるぞ！？」

アスム「正直、フォーム数多すぎて…青と白（？）が増えるのが嫌ですね」

士「大体分かった、サゴーズ・シャウタ・タジャドルだな」

夏海「Σネタバレ禁止ッ！」

士「ああっははははははは！」

夏海「まったく…」

海東「大体わかった！こちらも、対抗するためにコンボを考えればいいんだー！」

カズマ「それ根本的な解決？」

ソウジ「おっと、カズマが黒い」

マリオ「折角【スマブラの世界】なんだし、スマブラならではのコンボ（+歌）も考えようぜ！」

カズマ「……えええ？」

シンジ「逆に台無しにならない？」

士「だったら、歴代ライダーコンボも考えるぞ！」

ユウスケ「ああ、またこのノリか」

〃  
〃  
〃

夏海「判定は、ピカチュウ（not永遠の10歳の手持ち）とルカリオとポケトレ君です！」

ピカチュウ「……どうしよう、怖い」

ルカリオ『…私もだ』

ポケトレ「もう、寒気しか感じない」

士「オオスバメ！ヘイガニ、ジュカイン！…スーガーイイイーン  
！！」

シンジ「やめて！オオスバメは頭部じゃない、腕あたりに装着させたほうがいい！！」

ユウスケ「それもやだよ！？」

ピカチュウ「っていうか、何その某10歳のハウエン手持ちど根性トリオコンボ！？」

ユウスケ「その場合、省かれた二体が可哀相だな」

シンジ「……陳情……」↑薔薇三本

カズマ「Σ久し振りにキターツ……!」

ワタル「はいはい!その場合は、ドンファンと混ぜて重量級コンビ……」

シンジ「ドンファンは金銀編!」

ワタル「進化したのAGじゃないですか!??」

シンジ「確かにAGで進化した。だが!その方式で行ったら、DPで進化したマグマラシはどうなる?……マグマラシは金銀だろうツ……!」

ワタル「そりゃあ、マグマラシは金銀のイメージしかないですよ!でも、ドンファン……っていうかゴマゾウはAGで長く連れていた印象しか」

シンジ「そんな事言ったらエイパムこそどうなるんだ!」

ワタル「エイパムは……DPでいいじゃないですか、期間的に!AG時代短かったんですし……!」

シンジ「それだったらオニゴーリはどうなるんだああ!」

ワタル「オニゴーリよりも不幸なのは即研究所行きのベトベトン達でしょうがああ!」

シンジ「あいつらリーグとか通信で散々出番あるだろ!オニゴーリは再登場までにリアルに何年かかったと思ってるんだああ!」  
ワタル「それで言ったらマグマラシはどうなるんですかああ!」  
シンジ「EDとかでも出ただろおお!オニゴーリ映画にも出てないんだぞおお……!」

ワタル「そりゃあ、あんなタイミングで抜けてりゃ出るわけないでしょおおっ!」

タクミ「なんなんだろう、あそこの、異様な空気は」

アスム「……纏めたら、『ぶつちやけピカチュウ以外の扱いって酷くね?』では」

ユウスケ「まあ、確かに……主人公がゲットするタイプのポケモンじゃないよなあ……オニゴーリといいベトベトンといい」

士「リンク。…オニゴーリ・コータス・ベトベトンで、何コンボになると思う」

リンク「え、えっと、オニコーベ?」

タクミ「何処の地名!?!」

リンク「でも、なんでそんな事……はっ」

オニゴーリ「……↑怖い顔+悪の波動+絶対零度+恨み発動中

コータス「……↑巻き込まれ

ベトベトン「……↑オニゴーリに続く

士「それでは、……オニコーベコンボの発動だーッ!」

リンク「わーっ!落ち着け、落ち着けー!!あとオニゴーリの場合、シンジさんは一応君の味方みたいだから手加減してあげて!!」

ワタル「……次、行きましようか」↑ヘドロ爆弾と火炎放射と冷凍ビーム食らった

シンジ「うん……」↑ヘドロ爆弾と火炎放射と凍える風食らった

士「凍える風は手加減なんだろうか」

リンク「冷凍ビームと比べたら手加減の内だよ」

夏海「それでは……ファルコ・ウルフ・フォックス!」

ウルフ「待て!何で鳥が、最初なんだ!!」

夏海「だ、だって…あの人(?)、頭部部分が合いそうな気がして…」

士「鷹メダル方式か、大体分かった」

フォックス「まあ、ファルコは鷹とか隼というより、雉なんだけどな」

ユウスケ「え、じゃあ、赤コンボの脚部分じゃなくて…胸部分?」

カズマ「ファッファッファルス、ファ・ファ・ファルスッ!」

ゼルダ「じゃあ、トライフォースコンボは?」

ガノン「というと…ワシと貴様と、小僧…?」 ↑ 寒気

リンク「…えええ」

タクミ「あからさまに嫌そうな顔したね」

リンク「だって、…バランス悪そう…」

士「まあ、一応考えてみると…足をガノンにしたほうが安定性あるか…?」

ピット「そうしたら、…ゼルダ姫が胴体なら魔法使えそうですよね。で…」

リンク「俺が、頭部…?…ああ、考えたくない…orz」

ユウスケ「一応、名前は…リンゼルガ…?」

シヨウイチ「なんだそのトドゼルガの亜種は」

アスム「じゃあ…カービィ!メタナイト!デデデー!」

士「カタナイデ!カタナイデ!カタカータナ・イ・デー!」

ユウスケ「ベルト音声が既に『勝つな』って言っちゃったよ!?」

シンジ「ヤミーの心境語っちゃったね」

ピット「じゃあ、…そうだなあ…マルスさん、ドンキー、アイク」

カズマ「ママ!ママ!マードーノーク!」

マルス「何それ新手のイジメ!?もうちょっと、いい素材使ってよ」

！」

ピット「えええ？例えば？？」

マルス「そうだなあ、僕の気品を生かすためには…胸部にゼルダ姫、脚の部分にゼロスーツサムスさんを…」

士「ポポ！ナナ！オニゴーリ！！」

シンジ「ちよっと！？バランス悪ッ！どう頑張ってもバランス悪ッ！！」

オニゴーリ「…」

ナナ「なんでそうなるの！？」

士「だって、お前から既に二組だろうが！それで属性を合わせたら、オニゴーリしかいなくなっただけだろ！」

マルス「ちよっと！？僕を無視しないでよ！」

士「…お前はワリオやベトベトンと合体したらどうだ？」

シンジ「うん、お似合いww」

ポポ「それにしても、…せめてオニゴーリは頭に…」

ナナ「そういう問題！？」

マルス「あの、」

オニゴーリ「オニオニ」

サンダース「ダース？…ダースダース」

シンジ「士、『その2人の体格だとユキワラシやタマザラシのほう安定するんじゃないか』って言うてるみたい」

士「そうか。…ユキワラシ、ポポ、ナナ…ユキポナ？」

カズマ「タマザラシ使ったら、タポナ！」

マルス「ちよっと！僕h」

シンジ「——黙っとけ出番なし」

マルス「orz」  
カズマ「すご、一撃必殺」  
士「あっちにもただけだな…」  
出番が少ない皆様「orz」

~~~~~

夏海「次はライダー編ですね！」
ワタル「僕にとっては、…先程から黙っている人が凄く心配なんですけど…」

モモタロス「じゃあ…クウガ・ブレイド・カブトの虫トリオ！」
ユウスケ「…」
モモタロス「な、何だよ？」
ユウスケ「モモタロス、お前、…クウガに似ているからってアギトを虫と勘違いするほど馬鹿じゃなかったんだな…！」
カズマ「ついでに言うと、ブレイドを虫と認識していたんだな…！」
モモタロス「何なんだよお前はああ！？馬鹿にしてんのかーッ！」

シンジ「褒めてるんじゃない？」

タクミ「まあ、あえて言うとなると…クレイトコンボ？」
士「クーツクク、クレイドオオオーツ！」

シンジ「じゃあ、アギト・龍騎…キバのドラゴントリオ！」

ワタル「…僕は龍じゃないですよ！？」

シヨウイチ「飛翔態」

シンジ「タツロット」

ワタル「…アレは紅さんだからできるものですorz」

アスム「アリユウバコンボ」

夏海「アーリユーバー！」

海東「じゃあ、僕と士でコンボだ！」

士「馬鹿言え。誰がお前とコンボなんてするか！」

夏海「それに、一人足りないじゃないですか」

海東「そこは…ほら、少年君を見繕って」

士「響鬼は電王SFとダブルになった方がいいっての！鬼同士！！」
カズマ（オニゴーリをネタに出さないのは、これ以上はもう殺されるって分かってるからなんだなチーズ）

ユウスケ「それに、お勧めはできないけど…ディケイドとディエンドってバーコードモチーフだろ？だったら、近代的なファイズのほうが響鬼よりはいいと思うんだけど」

リンク「そうになると、ファケイドかな」

海東「ちよっと！ディエンド要素は！？」

リンク「『ド』」

海東「それはディケイドも入ってるものだろう！？」

リンク「…ファ！ファ！ファケイド」

カズマ「リンクがスルースキルを習得した」

シヨウイチ「っていうか、ちょっと待て。…今回本当にソウジ何処行った？」

カズマ「俺にツツコミ入れて以降、ないよな…？」

Hカブト「……あ、」↑流れ着いてきた

全「」「あ」「」

Hカブト「…間違えた」

『Hyper Clock Up』

士「ちょっと待てええええー!？」

ユウスケ「えっ、あのハイカブって、え、え、……だよな!？」

夏海「はい!」

タクミ「…ソウジさん、ここにも流れ着いていたんだ…」

ソウジ「あれ、もうコンボ談議は終わったのか？」

全「本物キター!？」

シヨウイチ「おま、どこ居たんだ？さっき凄いもの見たぞ…」

ソウジ「トイレ」

おまけ。

士「シンジに関しては、オノノクス・サザンドラ・ガブリアスのオ
ノアスコンボがお似合いだよな」

海東「え？ボーマング・ガブリアス・カイリユーのボブリューコン
ボじゃなくて？」

龍騎「……」

『SURVIVE』

ユウスケ「Σ二人共逃げろーッ!？」

File 29 【コンボと暴走と辰巳の逆鱗】（後書き）

次回予告

マリオ「なあ、すつごく気になったんだが」
士「どうした？」

マリオ「お前らは変身して戦闘能力つくけど、…生身だと何処までいけるんだ？」

海東「いや、こればかりは流石に某妖怪の圧勝だよ」

士「そうだな…某龍神の勝利だ」

ユウスケ「…怒られても知らないぞー」

シンジ「だが許さん」

アスム「…しまったあああ！三十路コンビの存在を完全に忘れていたーッ！ー」

ワタル「っていうか、ショウイチさんとはかく！ソウジさん！？」

タクミ「なんなんだろう、あの人達」

Next...File 30 【100人組み手！驚異の素ペック】

File 30【100人組み手！驚異の素ペック】

（ある部屋の中）

士「うおおおおおっ！」

ユウスケ「土あああぁっ！」

海東「覚悟してくれたまえ、士！」

鳴滝「とおおおおっ！」

（部屋の外）

夏海「な、何をしているんですか！？……はっ、まさか……」

士「俺はすべての破壊者だ！破壊してやる！！！」

ユウスケ「やはりそうか、この悪魔め！」

海東「…容赦しないよ、士」

鳴滝「ははは！やはり貴様は破壊者なのだ、ディケイドおおお！！！」

夏海「やめてください！ここで、ライダー大戦なんて……」

——Time Up！

——ICE CLIMBER！

夏海「…は？」

士「…あーっ！よりもよって、鳴滝に負けるなんて！」↑使用キャラ：カービィ

鳴滝「いやっほーい！」↑使用キャラ：アイスクライマー

ユウスケ「くっそー、3位か！…でも海東より上だしいか」↑使用キャラ：アイク

海東「…小野寺君、君、僕狙いすぎだよね」↑使用キャラ：スネーク

夏海「…ちよつと」

士「ん？夏海もやるか、スマブラ」

ユウスケ「俺のGCコントローラー貸すよ？」

海東「士と鳴滝さんを止めてくれ」

鳴滝「私は容赦しないがな」

夏海「…人を心配させておいて、ゲーム…？…あなた達はあああっ！？」

（しばらくお待ちください）

マリオ「おーい、栄次郎さんから借りてた本を返しに…」

リンク「タクミー、遊びに来…」

ピット「ソウジさん。頼まれていた漬物…」

アイク「シヨウイチー、ちよつと…」

ファイター達「…無理そうだな」…

士「あはははははははははは…！」

海東「うははははははは！」

ユウスケ「あひゃひゃひゃひゃ……！」

鳴滝「うえっへへへへへへへ……ゲホブホ」

ピット「あ、タコ巻きが咽た」

リンク「何がどうなって、こうなったんだ？」

ショウイチ「……ナツポンカンが、士達がつきりライダー大戦をしているものだと思います……」

ソウジ「まあ、勘違いしても仕方がないな。あれは」

タクミ「夏海さん……笑いのツボの応酬で。もう、本当に凄くて……」

アスム「あの時の夏海さんは、悪魔でした。破壊者でした」

ワタル「でっすよねー」

カズマ「うわーっ、サンダース強ッ！？」↑使用キャラ：ピット

サンダース「ダースダース！」↑使用キャラ：ネス

シンジ「ちよっ、強い。酷いぐらいに強い！」↑使用キャラ：ルカ

リオ

モモタロス（栄次郎憑依）「ぎゃー！やられたー！！」↑使用キャラ：サムス

アスム「……あんたら、楽しそうですね」

ショウイチ「つか、え、……サンダースの奴……Wiiコン使ってないか！？ヌンチャク付きで！」

マリオ「なあ、すっごく気になったんだが」

マリオ「どうした？」

マリオ「お前らは変身して戦闘能力つくけど、……生身だと何処までいけるんだ？」

ワタル「……つまり、僕達でリアルファイトをしろと？」

マリオ「いや、例えの話だよ。……どうしてもやりたいって言うなら、まあそれなりに用意するけど……」

翔太郎「先手必勝。——俺はやらないからな」

フィリップ「僕は、見ているほうがいいね。それに肉体労働には向かないんだ」

ワタル「僕もしませんよ。ってか、無理」

モモタロス「肉体あればいいんだが、流石に爺さんの体使うのはダメだろ……」

夏海「当たり前です！……あ、私もしませんからね！？」

士「となると、俺達だけか」

リンク「あれ、やる前提なんだ……」

マリオ「大方予想はできていたからな。……とりあえず、ルールは何がいい？」

士「決まっている。100人組み手だ！」

マリオ・リンク「はあ！？」「」

海東「解説しよう。……100人組み手とは、ザコ敵を相手に殴りまくりふっ飛ばし、100人すべてを倒せばクリア。途中で負けたらその場でアウトというルールなんだ」

アスム「結構難しそうですね」

ソウジ「ルールは、スマブラの状態で？」

アイク「することになるだろうな。……ああ、ちなみにスマブラを知らない人のために簡単に……リンクが説明する」

リンク「俺！？」

アイク「頼む」

リンク「ええーっと、…簡単に言うと…ダメージを溜めてステージ外に吹っ飛ばす。一番多くふっ飛ばした人が勝ちってルール」
シヨウイチ「それを、ライダーに変身しないで生身だと？…殺す気か」

海東「いや、こればかりは流石に某妖怪の圧勝だよ」

士「そうだな…某龍神の勝利だ」

ユウスケ「…怒られても知らないぞー」

シンジ「だが許さん」

カズマ「泥棒とチーズ逃げて、シンジいつでもリアルファイトできる」

ユウスケ「カズマは！？」

カズマ「サンダースに吹っ飛ばされる」

ユウスケ「…だよなあ、シンジさんがカズマ殴るところが…あんまり想像できない」

士と海東は仲良くシンジに殴られました

カズマはサンダースに吹っ飛ばされませんでした（ソウジと【亜空の使者】してた）

（（（（

マリオ「準備完了だ！いつでもいいぞ」

リンク「100人組み手を一人ずつやるのは（文章的意味で）無理なので、エンドレス組み手を一斉にやってもらって…倒した数を計測しまーす」

ピット「ちなみにエンドレス組み手とは、自分がふっ飛ばされるまで相手を倒し続ける組み手のことです」

士「よし、いつちやるか！」

ユウスケ「確か100人組み手やエンドレス組み手って、ザコ敵が吹っ飛びやすく設定されているんだよね？」

海東「そうさ。ただし、後半になるにつれてダメージが蓄積される上に連戦だからプレイヤー側が疲労してくる。つまり、70体目ぐらいからが過酷というものさ」

アスム「む、難しいですね…」

ユウスケ（…ワタルは知ってて逃げたのか、それとも本当に素での格闘戦に慣れていないのか、……俺達…っていかカズマのやられる様を見たいのか）

1番目が25%、2番目が40%、3番目が35%の割合

ピット「それでは、Ready…Go！」

士「よつと！」

アスム「はっ！」

マリオ『士は現在4人抜き、アスムは10人だ』

ピット『アスム君、パンチで一氣に3〜4体吹っ飛ばしているからねえ…』

カズマ「ぎゃーっ!？」

アイク『カズマが集中砲火くらってるぞ』

リンク『ちなみに、彼は現在5人…流石に認証が下りるまでは生身で戦うしかない、BOARD社員だよなあ』

ピット『ダメージ%も、現時点で40越えのEース級だけどね』

マリオ『…流石に、素だとそれほど強くな…』

シンジ「邪魔」↑肘打ち

ザコ敵「ゴボッ!？」

マリオ『——いわけでもない奴がいたな、あそこに』

ゲームウオッチ『流石、妖怪…』

リンク『あ、見に来たんだ』

ファルコ『暇だったしな』

(10分経過)

ピット『現時点で、士さん30体・ユウスケさん21体・泥棒野郎24体・アスム君39体・タクミ君18体・カズマさん29体・シンジさん35体!』

ファルコ『まあ、敵が分散されているから…俺らのペースと比べて少ないのは仕方ないな』

マリオ『…おい、本格的に自称：カメラマンの辰巳シンジが危ないか』

アイク『鬼と接戦だからな…』

リンク『いや、それよりも、——カズマある意味怖い！今の時点でダメージ90%ッ！』

ゲームウォッチ『…脱落フラグ凄いな』

ロボ『待ッテクダサイ、マダ凄イ人達ガイマス！』

マリオ『妖怪辰巳シンジと鬼子アスム以上に、凄いのなんて要るのか！？』

ピット『カズマさんのダメージ95%を超える人が！？』

ロボ『…流石ニ、ソレハナイデス』

シヨウイチ『…いつまで続くんこれは…！？』↑触手締め中

ソウジ『ん』↑ザコ敵蹴り飛ばし中

マリオ『なん…だと？…この地点（土達のペースを考えて）で70人抜きと75人抜き！？』

アスム『…しまったあああ！三十路コンビの存在を完全に忘れていたーッ！』

ワタル『っていうか、シヨウイチさんとはかく！ソウジさん！？』

タクミ『なんなんだろう、あの人達』

ピット『ってか、——カズマさん！ダメージ130！！ちょっと食らいすぎですよー！！』

リンク『カズマがそろそろ危ない！危なすぎるー！！』

カズマ『……』↑もう文句すら言えない

アイク『あ、じゃあ…三十路コンビが100体倒したら一旦終了と

いうことで」

ファルコ『その前にカズマが死ぬっつーの！？つか、あれだけ食らってよく落ちないな！』

シンジ「カズマは強い子！」

ファルコ『——【強い子】にも限度があるわあああつ！？』

〃
〃
〃

（空気を讀んだ三十路コンビが3分で100人抜き達成しました）

夏海「お疲れ様です」

士「くそっ、39体だった…」

アスム「48体でした！」

シンジ「45体」

海東「はあ…32体だった」

ユウスケ「よっしゃ、最低でも海東は越えた！」↑33体

タクミ「……生身は苦手なんですって…オルフェノクにならない限り……」↑26体

ソウジ「お疲れだな」

シヨウイチ「…そうだな」

三十路コンビ「カズマ」

カズマ「……」↑ダメージ150%越え

シンジ「カズマ頑張った。えらいえらい」

アスム「…僕、結果的に43%だったんですけど…え、……どれだけカズマさんに集中していたんですか？敵」

ワタル「というか、カズマは無駄な動きが多すぎるんですよ。だから途中で大量にダメージを貰うんです」

ファイター達（（でもよく吹っ飛ばなかったな…）（））

士「しかし、…ここまで来ると…ソウジとショウイチを情け無用組み手に投げ込みたくなるな。あと、興味本位でカズマ」

ソウジ「それはやめろ」

ショウイチ「つか、お前がやれ」

カズマ「……………」

シンジ「『士、お前これ以上俺を殺す気か』だって」

マリオ「俺も、流石に情け無用だけはやめたほうがいいと思うな…」
リンク「あれって敵の強さが格段に上がるだけじゃなくて、自分達も吹っ飛びやすくなっているんだよ」

ピット「うまく立ちいかないと、すぐにヤラレチャッタですよ」

士「ライダーに変身してもか？」

ユウスケ「ライダーに変身したら、今回の実験（？）の意味がなくなるだろ…」

アスム「それにしても、二人とも強いですね。素で」

ソウジ「ZECTで戦っていたからなあ」

ショウイチ「…俺がどれだけ警察でこき使われてきたと思っているんだ」

ソウジ「まあ、……なんだ」
シヨウイチ「ああ」

ソウジ「……シンジ、カズマ、どちらかZECTに来ないか？（
戦力的な意味と、防衛ライン的な意味で）」

シヨウイチ「G3-Xの装着員になってくれ。特にシンジ…（シ
ンジは戦力、カズマは防衛ライン）」

シンジ「やだ」
カズマ「…」

士「『俺じゃなくてアスム誘って』か。——アスムはどうだ」
アスム「丁重にお断りします」

マリオ「…でもカズマの防御力は、……キノコ城の兵士に見習わせ
たいなあ…」

リンク「ハイラルの兵士にも…」

ピット「他の親衛隊にも…」

アイク「名も無き兵士にも…」

ファルコ「志願兵って言えよ、アイク」

上4人「……シンジさん、カズマください」「……
ファルコ「こらっ!？」」

シンジ「だが断る」

File 30【100人組み手！驚異の素ペック】（後書き）

次回予告

アイク「…たのもおおおおー！」

士「ぎゃーっ！ユウスケがーッ!?」

シンジ「大丈夫。ユウスケは……強い……子?」

ユウスケ「沈黙が長い上に疑問詞使わないでください!?!」

カズマ「あ、起きた」

アイク「団長である以前に、男なんだ！憧れるんだ!!」

リンク「そういうものなのかな」

ファルコ「リンクがその手のものに疎いだけで、そういうものなん
だろ。男って」

アスム「だったら、響鬼なんてどうですか?」

士「…ただし、変身を解いた瞬間……脱げるがな!」

全「「えっ!?!?」」

ワタル「じゃあ、アスムの服って…え、……ええええええ!!?!」

Next...File 31【アイク団長の変身願望】

File 31【アイク団長の変身願望】

士「……はあ」

夏海「どうしたんですか？士君」

士「いや、もうすぐ【仮面ライダーディケイド】スマブラの世界】
が終わると思うと、なあ……」

ユウスケ「あー、分かる分かる。ここまで長く続くと思っていなか
っただけに、感慨深いものがあるよなあ」

夏海「そうですね」

海東「まあ、僕達は次の旅を楽しめばいいさ。今までそうしてきた
じゃないか」

シンジ「お前らはいいけど」

カズマ「俺らは？」

ワタル「ですよ」

アスム「僕達、ここでログアウトですか？」

タクミ「可能性を考えるなら、D C D本編のクロックアップの暴走
でネタが書けそうなソウジさんと……【Lost memory o
f The RYUKI】のようにクロスオーバーが比較的楽）
と言っていた）な僕やカズマさんはともかく」

ソウジ「残りはどうなると思っている？」

シヨウイチ「【おいでよライダータウン！】で馬鹿やるぐらいの出
番しかないんだぞ？」

士「……あー、ここで一気に2つなくなって息抜きのライ街だけに

なると、テンション的にもなあ…作者の就職活動もリアルにやばいし」

ユウスケ「まあ、悩んでいても仕方がないし…ここは皆でパーツと祝おう！」

夏海「そうですね！ディケブラ本編では、お祝いできませんでしたし」

ユウスケ「そうと決まったら、俺、ジュースとお菓子買いに行くよ！」

ワタル「…。…そしてこの時を境に、小野寺ユウスケは消息を経ったのであった…そう、シュナイメモリ事件の真犯人の手によって」

アスム「Σ何不吉なこと言ってるんですか」

ワタル「いや、こうでもしないと面白みが…」

アイク「…たのもおおおおおー！」

バン！

アイクは勢いよく扉を開けた！▼

扉を開けようとしたユウスケに

クリティカルヒット！▼

ユウスケはたおれた！▼

士「ぎゃーっ！ユウスケがーッ！？」

シンジ「大丈夫。ユウスケは…強い…子？」

ユウスケ「沈黙が長い上に疑問詞使わないでください!？」
カズマ「あ、起きた」

アイク「最終回目前と聞いて、やって来た」

士「ああ、それは分かる」

ユウスケ「ああ、耳から血が…」

カズマ「ユウスケそれやばくないか？」

ユウスケ「大丈夫、鼓膜は破れてないみたいだ」

アイク「頼む!こういう場でないと、頼むことはできない!…だからこそ!」

全「？」

アイク「——俺も仮面ライダーに変身したいんだッ!」

}}}

士「というわけで、リンクやファルコ、ピットに来てもらったが…」
ピット「ホントごめんなさい。後1話で終わりだよーって軽く言ったら、焦りだして」

アイク「団長である以前に、男なんだ!憧れるんだ!」

リンク「そういうものなのかな」

ファルコ「リンクがその手のものに疎いだけで、そういうものなん
だろ。男って」

ワタル「でも貴方、ダブルになれませんでしたよね」

アイク「……orz」

カズマ「そ、そのことはもう放って置いてあげろよ……」

タクミ「ああ、アイクさんのHPが一気に1に……」

ワタル「だって本当のことじゃないですか」

アイク「そりゃあな、あのマルスじゃ……マルスじゃなあ。……せめ
てセネリオか、ライか、リュシオンだったら……」

シンジ「リュシオン王子はやめたほうが、……あ、……うんやめたほ
うがいい。ダブルの制限を思い出したら無理だった」

士「大体分かった、リュシオンをサイクロンにしたかったがどう考
えてもアイクがサイクロンでしかなくなるということか」

スマブラの世界におけるダブルの制限は、「信頼しあっている人
間」と「生まれの早い人間がジョーカー適合」

リュシオン王子は鷲の民というラグズのため、見た目以上にアイ
クより長生き

アイク「じゃあ、一番打倒なのはセネリオか」

ユウスケ「なんか、鼻血出して喜びそうだな」

カズマ「でも、二人共いないんじゃないやどうしようもないじゃんか」

アイク「なんだよなあ……」

士「スマブラファイターに友達はいないのか？」

アイク「……いないな。辛うじてピットぐらいか……」

タクミ「えっ、マルス王子は」

アイク「…マルス？何だそれ美味しいのか？」↑怪訝そうな顔
夏海「かなり嫌っていますね」

ファルコ「まあ、マルスは王族だから…アイクは苦手意識強いんだ
ろ」

ピット「それに、前は大人しかったみたいなんですけど…スマブラ
ファイターになってからかなりはっちゃけたみたいですし…所謂
ロイみたいな原作クラッシャー」

士「もはや、ソウジとシヨウイチより最悪な仲なんだな」

リンク「え、その2人で例えるのやめようよ…シヨウイチさんとは
もなく、ソウジさんは…好意的だし」

ユウスケ「どっちも偉そうにしないのが救いだしなあ」

フィリップ「とりあえず、File 24を参考にすると…君が変身
できる可能性があるのは

- ・ 龍騎（制限なし）
- ・ 響鬼（戦いの経験が長い者）
- ・ ダブル（先述）

……ぐらいかな。カブトは、ゼクターが認めない限りは難しい」

アイク「意外と少ない…orz」

ピット「リンクさんとゲームウオッチが異常すぎるんだよ」

ファルコ「確かリンクって、全部OKで…ゲームヲはブレイド・ディ
ケイドになれないぐらいだったよな…？」

士「その次は、お前だけだな。ピット」

アスム「だったら、響鬼なんてどうですか？」

士「…ただし、変身を解いた瞬間……脱げるがな！」

全「「えっ！！？」「」」

ワタル「じゃあ、アスムの服って…え、…………ええええええ！！？」
カズマ「どうなってんの！？」

アスム「——妖精さんが直してくれているんです」

全（（どう考えても無理な言い訳だああ！？）（））

タクミ「思えば、アスム君はイブキさん・ザンキさんと違って描写が一切なかったから…師匠のヒビキさんも含め」

士「デイケイド七不思議の一つだな」

夏海「そんなものがあるんですか！？」

ユウスケ「残りの六つってなんなんだよ！？」

アイク「……念のために、ブルーカラー用の服を持って来ておいてよかった…！」

タクミ「Σ準備良すぎるッ！？」

アスム「じゃあ、音叉貸しますね。軽く壁なんかで叩いた後、額に向ければいいですから」

アイク「…変身！と叫ばないのか？」

リンク「そこはアイクの自由でいいんじゃない？」

チャッ

キーン…

アイク「変身……！」

「響鬼「おおつ、変身できた！……このまま、肉でも焼いてくるか」
アスム「響鬼の力を焼肉に使わないでくださいよ！？」」

士「超個人的な使い方だな……まあ、俺もたまに龍騎にカメンライド
して肉を焼くが」

ワタル「あ、……シャボン玉遊びする時にバツシャーになったこと
が」

シンジ「スクープを撮るためにミラーワールドに入ったことなら……」
カズマ「遅刻しそうになった時、ブルースペイダーにマツハを使っ
たことなら」

タクミ「あーごめんなさい、ファイズエッジ使って交通整備のバイ
トしたことがあります。……でもそれ、僕の分の電光棒が壊れていた
だけであって邪な理由では……！」

アスム「まあ、かく言う僕も……焚き火を起こすときに使ったことが
ありますが」

ユウスケ「俺も、青のクウガの力であねさん追いかけていたっけな
あ」

海東「ディエンドライバーでライオトルーパーを呼んで、部屋の掃
除してもらったことがあるね」

フィリップ「ルナジョーカーになって、遠くの物を取ったこともあ
るよね」

翔太郎「エクストリームになって、剣でキャベツの千切りを……した
こともあったな」

ショウイチ「……お前らな」↑アギトはおろかギルスを有効活用した
ことがない

ソウジ「……ライダーシステム没収するぞ？」↑そもそもクロックア
ップが壊れている

I 響鬼「さてと…じゃあ、次行くか」

ソウジ「ちょ、ちよつと待て！ここで変身を解く気か！？」

シヨウイチ「ナツライム！ナツライムがまだ！！」

アイク「ふう」↑変身解除

全「「あ」「」」

夏海「——きゃあああああああああーっ！？」

（暫くお待ちください）

男全員「「「」」」↑笑いのツボで撃沈

夏海「はあっ…はあっ、……変身解除するならするって言うてくだ
さい！？」

ソウジ「ははははは、俺達は、はははは…」

シヨウイチ「止めた、…はは、止めようと…あははははは！」

アイク（着替え済み）「……ふう…。さて、…次は龍騎か」

リンク「これは簡単でしょ」

シンジ「じゃあどうぞ」

アイク「変身！」

I 龍騎「おおっ、変身した！」

士「良かったじゃないか」

I 龍騎「…鳥肉でも焼くか」

ファルコ「!!?」

ショウイチ「だから、そんな事に使うな！俺だって使ったことがないというのに…」

ソウジ「……バーニングフォームは焼き加減が調整できないもんなあ、ショウイチのバーニングは知らんが」

ショウイチ「…悪かったな制御できてなくて！orz」

ピット（そういえば、バーニングになる描写一切なかったなあ…）

フィリップ「さて、残るはダブルだが…」

翔太郎「ピットと試してみたらどうだ？ドライバーは貸すからよ」

アイク「…駄目だ」

ピット「まあね、そりゃあね」

ファルコ「ピットのツンパネエ」

ピット「だまれトリ」

リンク「あ、じゃあ俺とか…」

アイク「お前は俺とそこまで親しかったか？」

リンク「……ですよねー」

ツイハーク「お邪魔しまーす。…あれ、ここカフェじゃなかったっけ」

アイク「…っしやあああああ！」

ワタル「救世主キター！」

海東「そういえば、作者の【蒼炎の軌跡】においてアイクとツイハークは常に一軍、撃破数1・2フィニッシュ！更に【暁の女神】プ

レイでは…大抵の場合支援Aで撃破数こちらも1・2フィニッシュ！！」

夏海「大体分かりました、作者の貢献で何とかするんですね！」

士「あ、……だけどツイハークじゃ…アイクより年上だからあいつがジョーカーにならないか？」

アイク「…ッorz」

シンジ「諦めようアイク。それに、ぶっちゃけダブルって基本的にサイクロンサイドが主人公みたいな者で、ジョーカーはただ巻き込まれただけの存在だった」

翔太郎「うおい！？」

ツイハーク「えっと、…よく分からないけど…『スマッシュシティに行くなら僕も』と言って、セネリオも来ているんだが」

全「…え？」「」

セネリオ「アイク！元気にしていましたか！？怪我なんかは…」

アイク「セネリオ、俺と相乗りする勇氣はあるか！？」

セネリオ「えッ！？」

夏海「なんでそんな告白紛いのセリフを！」

ユウスケ「まあ、それフィリップ君のセリフだけどな？公式だけどな！？」

セネリオ「アイク…、……あなたと、合体したい！」↑理性崩壊

シヨウイチ「お前も落ち着けええっ！？」

アイク「よし。……行くぞ、セネリオ！」

<ジョーカー！>

セネリオ「はい！」

<サイクロン！>

アイク「……変身！」

<サイクロン！ジョーカー！！>

ダブルJサイド「さあ、お前の罪を数えろ！…くう、これが言ってみたかったんだ…！！」

ダブルCサイド「ああ、まさかアイクと一つになる日が来るなんて…！来てよかった…！！」

士「…もう、つつこむのやめるか」

ピット「でっすよねー」

ツイハーク「でも面白そうだな…」

リンク「やっぱり男の人って、変身したいと思うものなんですかね？」

ツイハーク「まあね。…そうだなあ、…なつてみたいといえは…カブトとかアギトかなあ。ファイズも捨てがたいけど」

ファルコ「いやー、アギトは元よりファイズは無理だろ。第一、適合条件が」

『Standing By』

ツイハーク「変身！」↑無断で借りた

タクミ「ちょおおおおおおつ！？」

ユウスケ「弾かれますって！ちょ、やめたほうが…！」

『Complete』

全「…え？」「」

Zファイズ「あ、できた」

カズマ「Σまさかの超適合キターツ！？」

士「い、いやっ、もしかしたらモルフ…いや、ゾンビとか……」とに

かくその可能性だつて！」

ピット「でも、リンクさんもある意味『（今は）死んだことはない』
んでしょう？……ねえ、ブレイドかデイケイド貸してみたら？そ
れで確定するから」

ユウスケ「貸したら貸したで、怖そうだけどな…」

Zファイズ「——俺は、ベオクとラグズが手を取り合う世界を夢
見ている。……その世界のためにも！負けられないッ！！」

全「「何リンクみたいなことしてんの！？」」「」

リンク「え、俺あなの！？」↑いっつも無意識

File 31【アイク団長の变身願望】（後書き）

次回予告

士「だーっ！サンダーズの野郎、俺のカメラに放電しやがって！！」
サンダーズ「ダッ」

海東「まったく酷いよ。この間なんか、僕のお宝コレクションに放電を仕掛けて…お陰でせつかくのお宝が台無しだ」

シンジ「2人がサンダーズを怒らせたんじゃないのか？」
アスム「シンジさん、目が怖いです」

ユウスケ「サンダーズって、昔からああなのか？」

ユウヤ「まあ…そうですね。よくキノココ…今のキノガッサが被害に遭っていました」

士「大体分かった。結局何処の世界でも、ユウスケは不幸な立ち位置ということか」

ユウスケ「おいっ！？」

士「くそっ、ユウヤ！サンダーズの弱みを教えろ」

ユウヤ「自分のポケモンの弱みを話す馬鹿はいないですって！？」

ユウスケ「諦めるよ、士！」

海東「よし分かった、アンカーを盗んできてケツアンカーだね」

シヨウイチ「貴様に刺すぞ」

ソウジ「その後決るぞ」

タクミ」そして海に沈めます」

Next・・・File 32【リクエストS/6Vサンダーズ伝説】

File 32【リクエストS / 6Vサンダース伝説】（前書き）

サンダース「——ダーッス！」

バリバリッシュー！！

カズマ「おい、何、今のゼクロム」

シンジ「モエルーワ！」

タクミ「何言ってるんですかシンジさん」

ショウイチ「……土の部屋からだぞ、またあいつ何かしたのか」

土「だーっ！サンダースの野郎、俺のカメラに放電しやがって！！」
サンダース「ダッ」

海東「まったく酷いよ。この間なんか、僕のお宝コレクションに放電を仕掛けて……お陰でせつかくのお宝が台無しだ」

シンジ「2人がサンダースを怒らせたんじゃないのか？」

アスム「シンジさん、目が怖いです」

ユウスケ「まあ、詳しいことを言うと……土が不意に龍騎の世界の写真を落としてしまったがばかりに、サンダースがレンさんに復讐の炎、いや、雷を」

シンジ「……写真にしたのか？」↑般若の顔

カズマ「いや、シンジが映ってるから写真は無事だろ」

ユウスケ「うん。腹いせに土のカメラを放電しただけなんだよ……だから、シンジさん落ち着いて」

アスワタ「ガクガクブルブル」

ソウジ「…かなり震えているな」

ユウヤ「お邪魔しま……うわ、また悪い時に来た」

ユウスケ（ご苦労様です）

士「ユウヤアアアア！お前、あいつにどんな教育を施したんだ！？」

ユウヤ「と言われても…サンダースもシャワーズも、人のいうことをあまり聞かないし……たまに部屋中が荒れる兄弟喧嘩をするし」
タクミ（それ、かなりやばいんじゃない？）

ユウスケ「サンダースって、昔からああなのか？」

ユウヤ「まあ…そうですね。よくキノココ……今のキノガッサが被害に遭っていました」

士「大体分かった。結局何処の世界でも、ユウスケは不幸な立ち位置ということか」

ユウスケ「おいっ!？」

ハルルのHGにあるデータでは、キノガッサのはルアーボールでゲットされた性格“おっとり”のNN『ユウスケ』

ちなみに、FLでは性格“れいせい”の種族・パラセクトのユウ

スケが存在　ただしオスメス進化未進化関係なく8体ぐらい存在

ワタル「しかし、強いですよねえ…サンダース」

アスム「6Vってやつですね」

シンジ「サンダースは強いもんなー」

サンダース「ダース！」

カズマ（……何でシンジには甘えるのに、なあ…）

士「くそっ、ユウヤ！サンダースの弱みを教えろ」

ユウヤ「自分のポケモンの弱みを話す馬鹿はいないですって！？」

ユウスケ「諦めるよ、士！」

海東「よし分かった、アンカーを盗んできてケツアンカーだね」

シヨウイチ「貴様に刺すぞ」

ソウジ「その後決るぞ」

タクミ「そして海に沈めます」

カズマ「それにしても、ユウヤとユウヤのポケモン達って仲がいいよなあ…前から思ってたけど」

ユウヤ「まあ、色々ありましたし」

ユウスケ「え、それって何？」

カズマ「そういえば、この話って他の皆にはしてないんだっけ？」

ユウヤ「そうですね。じゃあ、教えましょうか」

士海「サンダースの弱点をッ！？」

カズマ「てめえらはこういう時ぐらい黙ってる」↑シンジ直伝の凶悪オーラ

士「…カズマが、遂にチーフである俺に対して偉そうな口を叩きやがった…！」

海東「くうう、まさかブレイド君に言われるなんて…」

ユウスケ（俺も初めて今、カズマに恐怖を覚えました…）

ユウヤ「…カズマさんにはもう話したんですけど、あれは…結構前のことだったなあ」

File 32 「リクエストS / 6Vサンダーズ伝説」

——それは、ある日ある世界での出来事だった——

某所の、一見普通の民家。

そこでは、車椅子の少年が… 車椅子を走らせていた。

彼の名はユウヤ。

生まれつき足が悪く、車椅子での生活を余儀なくされていた…

父は彼の手術費を稼ぐために、単身戦いの絶えない国で戦っている。その事を思うとユウヤは心苦しく、一時は死のうかと考えたこともあった。

そんな彼を慰めるために、その時ポケモンブリーダーとして名を馳せていた母親・アイコがユウヤのためにガーディとキノココをゲットしてきた。

外に出られないユウヤの遊び相手として、そして心の支えとして。彼女の思いが通じたのか、心を閉ざしがちだったユウヤはガーディやキノココと毎日楽しそうに遊んでいた。

ガーディは頭が良くボールを投げればすぐユウヤの元に持ってきたりし、キノココは困らせることが多かったものの… 明るいムードメーカーとして機能していた。

そして、今日。

アイコの長年のパートナーであるグレイシアと、キュウコンと交換で手に入れたリーフィアにタマゴが見つかったそうだ。
それも…同時に、2つも。

丁度、家に起床していたショウヤから聞いたユウヤは、慌てるように車椅子を走らせる。

「——母さん！」

息を荒くしながら、ある部屋に入るユウヤ。

その部屋の中には…

クッションの上に2つ、タマゴが安置されていた。

「ユウヤ」

「タマゴ、生んだって聞いて…」

「生んだ、というのは間違いかもしれないわね。いつの間にか持ってきていたのよ」

「持って、きた？」

ポケモンというのは奥深い生き物だ。

一般的には、育て屋という施設に相性のいいポケモンを二体、それも異性同士で預けると…見つかることがあるそうだ。

しかし、それは“何処から持ってきたのか分からない”というもの。それはそうだ。

動物…たとえば犬や猫なら、お腹の中に胎児がいるからそれで分かる。

だが、ポケモンはそういう素振りも見せずいつの間にかそこにあるのだ。

こういう現象も含め、ポケモンは奥深い。

オーキド博士は「ポケモンは全部で151種類」と最初に報告した数よりも、更に発見されている。

更にシンオウのナナカマド博士は、「ポケモンの90%は進化する」という研究報告を出している。

その上、ポケモンには色違いという種族も存在している…

オーキド博士の元にポケモンを預けたトレーナーがいるのだが、その中に一体、色違いのヨルノズクがいる。

普通は茶色の羽なのだが、ヨルノズクの色違いは金と橙…

このように、ポケモンというのは調べても調べても、新たな発見がされる生き物。

もしかしたら人もポケモンの一種なのでは、という説も上がるほど。

——そしてポケモンは、ある意味で研究者泣かせであるのだろう。何故なら自分達が生きているうちに【ポケモン】という種族のすべてを解明できるはずが、ないからだ。

ユウヤはクッションに置かれている、二つのタマゴを見ていた。色も形も一緒。

唯一違うのは、右に置かれた卵の方が、若干大きいところか。

アイコはグレイシアとリーフィアの頭を撫でながら、ユウヤに言う。

「グレイシアとリーフィアのタマゴだから、…生まれるのはイーブイね」

「イーブイかあ…2つ同時に見つかったのなら、双子みたいなもの

かな」

目を輝かせながら、タマゴを見るユウヤ。

キノココやガーディも、そんな彼を見て楽しそうである。

それを見たアイコは、こんな提案を出した。

「そうね。——ねえユウヤ、この子達を育ててみない？」

「え？」

「キノココもガーディも私がゲットしてきたポケモンだし、ちゃんと馴もした状態で渡したけど…ユウヤが一から育てた子はまだいいでしょ？」

要するに、情操教育の一環である。

それに前々からユウヤが、「自分の育てたポケモンが欲しい」と思うようになっていた。

キノココとガーディは実質ユウヤのポケモンになるのだろうが、ゲットしたのも育てたのもブリーダーの母。

アイコはそれを見抜いており、今回の件はまさに丁度いい事だったのである。

「あなたに限ってそんな事はないでしょうけど、ちゃんと面倒を見るのよ。いいわね？」

「…ありがとう！」

くくく

それから一月。

ようやくタマゴが孵り、最初に生まれてきたのは右のタマゴ。予想通り生まれてきたのはイーブイで、呑気に欠伸もしている。

「…ブイ〜」

「わ、生まれた!」

「キノツ」

「ワウツ!」

「ブイ?」

嬉しそうな顔で喜ぶユウヤ達を、イーブイは見る。

そして…

遊び相手だと判断したのか、イーブイはいきなりユウヤに飛び掛ってきた。

「ブイー!」

「うわああっ!?!」

「ブイ、ブイ」

「…ビックリした。このイーブイ、甘えん坊なのかな…」

「ワウツ、ワウ!」

ガーディが、激しく吼える。

一体どうしたのか。

そう思っていると、左のほうの卵ももうすぐ孵りそうだった…

そして。

二つ目のタマゴも、イーブイが無事孵る。

こちらはいきなり飛び掛るようなことはしなかったが、少しユウヤ達を警戒している。

ユウヤは一匹目のイーブイを頭に乗せながら、二匹目のイーブイに声をかけた。

「…おいで、怖くないよ」

「……ブイ」

ユウヤの優しそうな表情に、イーブイは心を開いたのだろう。

素直に、彼の膝に飛び乗っていた。

そしてそのまま、頬ずりする…

「ブイー！ブイー！！」

「ブイ」

「はは、これは騒がしくなりそうだなあ…」

「キノツ！」

キノココも、ユウヤに飛び乗ろうとする。

が…

——その直後、二匹目のイーブイがサンダースでもないのに二本足で蹴り飛ばす“二度蹴り”を放っていた。

勿論、それはキノココに直撃。

キノココはそのまま、5mは転がっていった…

「キーノー……」

「キツ、キノココ！」

「ブツ」

二匹目のイーブイはキノココに、威嚇する。

…本当に、大変そうだ…

そう痛感しながらも、ユウヤの中には『自分が何とかしなければいけない』という責任感が芽生えていた。

~~~~~

イーブイが二匹孵って、いくつかの時が流れた。

ユウヤは双子と判断した二体だが、二体の性格はまったくの正反対。最初に孵ったイーブイは、遊ぶのが好きで自由気まま。

二番目に孵ったイーブイは、人見知りだが物への執着が強く、特にユウヤとご飯が一番強い。

一応これでも見分けはつくのだが、…粗相をするのは二体ともであるため、たまに間違って片方を叱ることがある。

その際一番厄介なのは、二番目のイーブイだ。

……所謂ヤンデレなのだろうか、ユウヤに叱られると不機嫌そうに

キノココに当たる。

流石に一番目と間違っただけの場合が厄介と考えたか、ユウヤは父・シヨウヤに相談した。  
すると…

彼はうーんと考えながら、ユウヤに提案する。

「——進化？」

「ああ。イーブイは石や昼夜、環境の違いで進化するポケモンだ。  
……即効性があるのは、石の進化だな」

進化。

それはユウヤも考えたことだった。

しかし、昼夜で進化するイーブイやブラッキーは、なつき度が高かったとしても、レベルを上げる必要がある。

二匹目はともかく、一匹目を進化可能のレベルまで引き上げるのは難しいだろう。ユウヤが車椅子なら、尚更だ。

環境の違いで進化するリーフィアとグレイシアは、母と同じポケモンなので論外。

となると…自然と、石で進化するシャワーズ・サンダース・ブースターに絞られる。

「でも、進化の石って結構高いんじゃない？ 2100円ぐらいじゃないかな？」

「それなんだが、…俺の悪縁が【進化の石8点セット】を買ったらしく…だが丁度、炎・水・雷・リーフの石で進化するポケモンがないとかで煩かった」

「父さん……友達いたっけ」

「…仕事先で、何故か絡んでくる…あれはまるで、ドククラゲの“からみつく” ……いや、…ソーナンスの特性『影踏み』レベルの男だ」

シヨウヤは、勤務態度は真面目だがそれ以外の交流が少なく、口数も少ない上に、無愛想なので仕事以外では敬遠されがち。アイコと結婚できたのも、もはや奇跡みたいな者なのだ。…正直、ユウヤは…

【この父さんに臆せず絡んでくる、度胸の据わった人がいるんだなあ】

———としか思わなかった。

父が、それで芦河シヨウイチ並みの受難を受けていたとも知らず……

「癪に障るが、一応頼んでみよう。…丁度ガーディもいる、あいつもそろそろ進化させればいいんじゃないか」

「そうかも…」

~~~~~

二日後の夜。

ショウヤは、疲れきった顔で帰ってくる。

その手には、袋が握られていた…ついでにその背後には、ハッサムの姿も。

——父さん、いつハッサムなんて手に入れたんだろう…

——クサイハナぐらいしか持っていなかったはずなのに…

ユウヤはそう思いながらも、お疲れ状態のショウヤを迎えようとしていた

その時だった。

「ブーイー！」

「ぎゃああああああつ！？」

ショウヤの持っていた袋を…

片や遊び道具と勘違いし、片や食べ物と勘違いし。

二体のイーブイは、ショウヤに飛び掛っていた。

ユウヤは慌てて止めに入るが、二体は既にそれぞれ水の石と雷の石を口に咥えていた…

すると。

二体の体は光りだし…

——光が収まった頃には、シャワーズとサンダーズがそこにいた。

「シャワ？」

「…ダース？」

「し、進化しちゃった……って、父さん大丈夫？」

「…俺に質問をするな…」

コウヤはボロ雑巾のように倒れているショウヤに、声をかける。

母親のメタグロスを呼ぼうとしたが、その前に彼と一緒に帰宅したハッサムが起こす。

騒ぎを聞きつけ、ガスの火を止めてやって来たアイコは…

サンダース達よりも真っ先に、ハッサムを見て驚いていた。

「きゃ！？……どうしたのあなた、そのハッサム」

「え、そっち…？」

「…前に話しただろう、……人にいちいち絡んでくる…生きるドククラゲ、いや、ソーナンスが」

…ドククラゲもソーナンスも生きてますが。

そんなツツコミを母子は考えていたが、今はそれどころではない。

ショウヤは頭を抑え、その場に座り込みつつ…話していた。

「———それに、余った石を譲ってくれないか掛け合ったんだ。

すると、案外すんなり…『無償^{タダ}でいいぞ』といってくれてな」

「あら、良かったじゃない。セットで買うと、結構高いのにくれたんだから」

「そうだよ、…ね？」

「だが、———その引き換えに俺のクサイハナと自分のストライクを交換してくれと言いだした」

つまり、タダで譲る代わりに…クサイハナをよこせ、というものだ。

恐らく、余った石でラフレシアにする気なのだろう。
尚…その【生きるソーナンス】は、太陽の石を既にヒマナッツに使
ったらしい。

「別にいいじゃない」

「だが…だが俺は、目的の物を手に入れたと同時に……その悪縁が
未来永劫切れないものになったような気がする……ッ！」

「……ハッサムに進化したってことは、メタルコートでも持た
せていたのかしらね」

「父さん、…ハッサム…僕が育てるよ。……なんか、そのほうが父
さんもハッサムも幸せのような気がしてきた」

ショウヤを堂々と無視したアイコ、父に同情するユウヤ。

残った炎の石は、自然とガーデイ行きになるだろう…

そう思いつつ、ユウヤが石を拾い上げようとしたその時だった。

「——カーッ！」

ショウヤが開けっ放しにしていた扉から、ヤミカラスが入ってくる。
そして、ヤミカラスは炎の石を見つけると…

それを足で掴み、持ち去ろうとしていた。

「「ああっ！」」

「カーッ、カーッ！」

「が、ガーデイの石が…」

「…ダースッ！」

「ワーズ♪」

呆然とするユウヤ一家をよそに、サンダースとシャワーズが追いかける。

ヤミカラスは空中を移動できる特性を活かし、また、夜ということもあってかその黒い体を闇に隠そうとしている…

そもそも暗闇でヤミカラスを追うのは、難しい。

だが…

「——ダース！」

「カアアッ!？」

サンダースの飛び蹴り（本来なら覚えられません）が、相手の的確に捉えた。

その際ヤミカラスは、石を落としてしまう…

ヤミカラスはそのまま地面に落とされたかと思うと、シャワーズが“体当たり”で追撃をする

——というよりも、むしろ、【追いかけてっこ】と認識していたシャワーズは急には止まらなかったただけの話である。

「…サンダース、シャワーズ！」

「ワウッ！」

「キノッ！」

「ハッサムッ」

車椅子はハッサムが押した状態で、ユウヤ達が追いかけてくる。

だが、目の前のヤミカラスはかなりダメージを負っている…

「そっだ」とシヨウヤはモンスターボールを取り出し、ユウヤに渡

す。

「……こうでもない、やる機会は滅多にないだろうからな。お前が投げる！」

「あ、うん！」

「カ……」

「いけっ、モンスターボール！」

ヤミカラスは未だに目を回しており、ユウヤは狙いを定めて投げる。それは見事ヤミカラスに、渾身のヒット。

ボールの中にヤミカラスが入り、ぐらぐらとボールが揺れる。

そして……

——『カシュン』、という音が鳴り、揺れも収まる。

つまりは、ゲットの成功ということだ。

ガーディがボールを咥え、持って来る。

ユウヤはそれを大事そうに受け取ると、——もはや一生言つことはなかったであろう言葉を、叫んでいた。

「ヤミカラス、……ゲットだ！」

~~~~~

「ふうん、そういうことがあったんだなあ」

カズマは、ユウヤの部屋でココアを飲みながら話を聞いていた。  
リンク・フィリップと一緒に部屋で寝ることになった彼が、何故ユウヤの部屋にいるのか？

…それは、フィリップの質問コーナーと…それに律儀に付き合うリンクのせいで、煩くて寝られなかったからである。

カズマは基本、遅くまで起きることはない。

そんな事があるとすれば、残業とかぐらいであろう。それ以外は、早くて9時・遅くても10時に就寝する。

「それで、そのヤミカラスは…あのドンカラス？」

「うん。母さんが昔のブリーダー仲間から、闇の石を貰ってね。…

…石好きなのか光物好きなのか知らないけど、また奪っちゃって」

「その拍子に進化したんだなあ」

そう言うこと、とユウヤは苦笑する。

その足元では、シャワーズが心地よさそうに眠っている…

ウインディは既にうつらうつらとしており、キノガッサもウインディに寄りかかるようにして眠り被っていた。

ハッサムは、ユウヤの分のココアを淹れている。——ここまで来ると、もはや執事が使用人に思える。

「でも、大変だろ。ドンカラスにしても、サンダースにしても、シ

「ヤワーズにしても」

「まあ…確かに。でも、皆がいたから僕は…今がとても楽しいんだと思います」

「……そうだな」

——ユウヤと、ユウヤのポケモン達を見れば分かる。

それがどれぐらい、楽しく、そして充実した日であるのかを。

ポケモン達の存在は、車椅子のユウヤにとっては…大切な友達であり、家族であり、心の支え。

ユウヤの存在も、ポケモン達にとってはなくてはならないもの。

（例えるなら……土と、ユウスケや夏海ちゃんみたいなものかな）

今頃シンジや翔太郎とテレビでも見ているであろう、素直じゃない男。

彼にとっても、今の仲間は大事な居場所であり心の支え。

…カズマは“土の大事な仲間に似た顔”を見ながら、微笑ましそうにココアを飲んでいた。

## File 32【リクエストS / 6Vサンダース伝説】（後書き）

### 次回予告

士「しかし、……お前らは何で段ボールで変装してまでジャッカ―に侵入しようとしたんだ」

シヨウイチ「…ソウジの馬鹿だけを責めろ！」

シンジ「もう、ありえない…敵もカズマもソウジさんもカズマもソウジさんもカズマも…」

カズマ「Σ俺多くない？」

タクミ「そういえばモモタロスって、なんで一時期甲冑だったんだろ…？」

リンク「確かに、そうだな」

シヨウイチ「……いつの間に見つけてきたんだ？あんな物」

ファルコ「なんだよ！【アイクの世界】ってああいうのしかないんだから、仕方ないだろうが！？」

モモタロス『ぐうううう…！』

リンク「…まあ、その手前の…俺の故郷もなあ」

アスム「仕方ないですよね」

Next . . . File 33 【リクエストS / ファルコとモモと甲  
冑劇場】

File 33【リクエストS／ファルコとモモと甲冑劇場】（前書き）

ユウスケ「うわっ、何だ！？この着ぐるみ！」

士「何？…げ、」

夏海「なんでこんなに散らかっているんですか！？」

翔太郎「悪い…実は、フィリップが検索に嵌っちまって……」

フィリップ（ピカチュウ着ぐるみ装備）「…翔太郎！興味深いよ、」

翔太郎「あー、何がだ？」

フィリップ「……着ぐるみの中は、暑い」

翔太郎「当たり前だッ！？」

アスム「あー、そういえばヒーローショーとかって…夏場は地獄らしいですね」

ワタル「ヒーローショーに限らず、特撮の撮影自体もでは…」

海東「見たまえ、士。大ショッカーに潜入した時の衣装だ！」

士「うわ、懐かしい…」

ユウスケ「俺達は、【アマゾンの世界】で着たんだよな」

カズマ「へー」

タクミ「…これは？」

ショウイチ「おいっ！これはG3だろっ！？」

リンク「jeeすりー？」

ショウイチ「俺の世界のものでな…未確認生物を倒すために造られた、バトルスーツみたいなものだ」

ユウスケ「あ、俺…G3-Xなら装着したことありますよ！」

海東「僕もだね」

アスム「……これは？」

シンジ「うわ、サイガだ」

タクミ「…何でスーツアクター用のスーツもあるのかな」

カズマ「そういえば、ファイズ系のスーツって…視界が0って訊いたんだけど」

シンジ「えっ、そうなの？」

カズマ「発光するとそうみたい」

タクミ「それ以上嵌めた発言なので、控えましょうか…」

士「これだけあると、潜入作戦とかできそうだな」

夏海「しないでくださいね？」

士「しっかし、……お前らは何で段ボールで変装してまでジャッカ―に侵入しようとしたんだ」

ショウイチ「…ソウジの馬鹿だけを責めろ！」

シンジ「もう、ありえない…敵もカズマもソウジさんもカズマもソウジさんもカズマも…」

カズマ「Σ俺多くない？」

ソウジ「だが力作だ（どやっ）」

ショウイチ「どや顔やめいッッッ！」

タクミ「そういえばモモタロスって、なんで一時期甲冑だったんだろ…?」

リンク「確かに、そうだな」

ショウイチ「…いつの間に見つけてきたんだ? あんな物」

ユウスケ「あ、それは…ははは」

モモタロス「マジ最悪だったぜ…」

シンジ「何」

カズマ（シンジってイマジンには冷たいのね）

モモタロス「蒸れるとか、暑いとか、そう言う次元の話じゃねえ!

…最悪だったぞ!？」

ファルコ「なんだよ! 【アイクの世界】ってああいうのしかないんだから、仕方ないだろうが!？」

モモタロス「ぐうううう…!」

リンク「…まあ、その手前の…俺の故郷もなあ」

アスム「仕方ないですね」

士「じゃあ、もし他の世界だったら何が調達できたんだ?」

ファルコ「…まず、【マルスの世界】 【ピットの世界】は…同じ惨劇だったな」

アスム「【トゥーンリンクの世界】は… …やっぱり甲冑ですかね?」（タートナック）

タクミ「【サムの世界】も…パワードスーツとかしか…」

ワタル「…【マリオの世界】…うーん、…雪だるま?」

シンジ「【リュカの世界】は、… … “ぜったいあんぜんカプセル”」

カズマ「シンジ、それモモタロス出れなくなる」

シヨウイチ「【ネスの世界】だったら、きっとロボットだな」

ソウジ「大体分かった。最終決戦の際に、ネス達が…」

ユウスケ「はい、知らない人のためにネタバレは禁止！」

アスム「でも、どのぐらい最悪だったんですか？」

モモタロス「それはだな…」

### File 33【リクエストS／ファルコとモモと甲冑劇場】

【アイクの世界】での戦いを終え、次の世界に行こうとしたユウスケ一行。

…だが。

立ち去ろうとする彼らに、ツイハークがモモタロスを見ながら訊ねていた。

「——？なあ、ちょっといいかな…」

「どうしたんですか、ツイハークさん？」

「俺達は急いでいるのだから」

呼び止められ振り返るユウスケ、文句を呟くガノンドロフ。

特に、ガノンドロフに関しては…

ゼルダが高いヒールを利用し、力強く彼の足を踏みつけていた。

…何気に、魔力を込めて。

「ぐっ！？…こ、この…」

「なんででしょうか？」

「『なんででしょうか』じゃない！…よくも、俺の足に…」

「あなたの足？——すみません、てつきり大きな団子虫が徘徊しているのかと思ひまして、踏ん付けてしまいました」

火花を散らす、ガノンドロフとゼルダ。

この2人の仲の悪さは、何処から来るのだろうか……  
ワタルは呆れながらも、無視することにした。  
だってこのような低俗なケンカには、加わったほうが負けだから。

ツイハークはモモタロスの方をまじまじと見ている。  
チラチラと見ている彼の態度が気に食わないのか、モモタロスは突っかかる。

『おい、何じろじろ見てんだ？』  
「こら！モモタロス！！」

ユウスケが、慌ててモモタロスを叱る。  
しかし、モモタロスは悪態をつく……  
ツイハークは苦笑しながらも、本題を切り出していた。

「ごめん、不快にさせて。……少し気になったただけなんだ」  
「気になった……？」  
「ああ。……あそこにいる、ラグズ……の仲間みたいなもの。モモタロスだったかな。彼って……実体を持たないのかい？」

“実体を持たない”  
それを訊かれ、ユウスケ達は頷く……  
そもそもモモタロスは、野上良太郎という青年に憑依し、彼の記憶を元に構成された実体を持っている。  
……が、イマジンというのは契約者の願いを叶えない限り実態を手に入れない。例外は、デンライナーという時間を越える電車の車内だ。

良太郎もいない上、デンライナーもない。

これが意味することは……モモタロスは普通のイメージと変わらず実体を得られなくなり、尚且つ、自由に電王に変身できないということ。

「……まあ、ちよつとした事情で」

「体がないと、不便じゃないのか？さっきの戦いでも、適当な兵士を器にして戦っていたみたいだけど……それだけじゃあ、不満なんじゃないかな」

『まあな……』

モモタロスは、深く溜め息をつく。

この「スマブラの世界」において、イメージの力関係はかなり低い。憑依されても根気さえあれば、自力で相手を自分の中から押し出すことが出来るからだ。

モモタロスとしても、例え特異点ではないとはいえ……この世界においては他の人間の体も易々と使えない状況。

彼としても、自由に使える体が欲しいのである。

ファルコは腕組みをしながら、ツイハークに訊ねる。

「とりあえず、モモタロスの体の代わりを見つけていってからでも遅くない……って言いたいんだな？」

「ああ」

「……まあ確かに、ホイホイ乗っ取られたんじゃないかとこっちが先にくたばっちゃうな」

『てめつ、トリ野郎！？』

「ああ！？」

ガンを飛ばしあう、モモタロスとファルコ。

正直、どっちも子供すぎる……

子供であるワタルはそう思いつつも、キバットを投げつけてモモタロスを崩す。

「はいストップ」

『ぎゃー！？』

「……ツイハークさんの言う通り、モモタロスの体を見つけてみましょう。ただし、人体以外で」

「しょうがねえ、探すか」

こうして、ユウスケ達の【モモタロスの体を捜そう作戦】が……始まった。

ちなみに、反対した某魔王は…

……ファルコに顔面を、ゼルダに男の急所を蹴られていた。

~~~~~

「と、言ってもなあ……」

メンバーはいくつかに分かれ、体の代わりになる物を探していた。
ユウスケとファルコは、一緒のメンバー。

とりあえずユウスケは近くにあった、卵巣汚れた甲冑の兜を持ち上げる。

…意外と重く、少しよろけた。

「おつとつと!?!?…ふう」

「おいおい、大丈夫かよ」

「何とか。…これとかいいんじゃないかな」

「ん?……兜か…これだけだと、まるで生首が浮遊するみたいだな」

ファルコの言葉に、ユウスケはその光景を思い浮かべた…

勿論、言った本人も。

そして

——あまりにもありえない光景に、もはや2人の腹筋は崩壊寸前だった。

「……ッ、…怪奇現象レベル…だよな」

「まあ、中身がモモタロスだからまだ救いがあるだろうなあ………はは」

とりあえず、これはこれでキープだろう。

そう思ったユウスケは一旦兜を地面に置き、持ち直した。

ファルコはというと、…地面に突き刺さった状態の剣を抜く。
長い間そこにあったのか、刀身は少し歯が欠けていた。

「…ファルコ、その剣」

「ん?……いざとなったら、これでもいいんじゃないかって」

「駄目！モモタロスが暴れたりしたら、こっちも斬れるから！！」

ファルコの意見を、ユウスケは必死で却下する。

——正直、あれにモモタロスを憑依させたら……もはや怪奇現象を飛び越えB級ホラーだ。

しかも、自分達にも被害が出る恐れだっでありえる。

「本当に仕方がねえな」と呟きながらも、……何気に剣をキープしているファルコ。

ユウスケはどうかモモタロスがあの手を気に入らせよう、と願いながら……別の場所を探していた。

「それにしても、本当に困った奴だな。モモタロスはよ……」

はあ、とファルコは大きく溜め息をつく。

口では文句を言っていたが、……ユウスケにはどうも違和感を覚えていた。

そもそも、ツイハークの意見に最初に同意したのは……他でもないファルコだ。

そして今も、口での文句は絶えなかったが……ちゃんとモモタロスの体の代わりになりそうな物を捜している。

それを見たユウスケは、苦笑していた。

それに気付いたファルコは、その辺に落ちていた痛んだ右手用の防具を拾い上げながら、ユウスケを睨む。

「……何笑ってたんだ？」

「いや、ごめん。……ファルコって、素直じゃないだけなんだなっ
て」

「はあ？」

「だって、最初にモモタロスの体を探そうって言ったのはファルコじゃないか」

鋭い所を突かれ、ファルコは一瞬動揺する。

だが、それでも彼は視線を反らしながら反論していた。

「…な、……気のせいだろ。それに、言い出したのは……」

「そりゃあ、提案してきたのはツイハークさんだけど。俺達の誰かが同意する前に言い出したのは、他でもないファルコじゃないか」

「……だ、だからなあ……」

「モモタロスのこと、心配してるんだな」

笑顔でそう言うユウスケ。

ファルコは激しく動揺しながら、照れ隠しにユウスケの顔に拾ったばかりのガントレットを投げつけていた。

…もちろん鉄製なので、痛い。

「——あだっ！？」

「馬鹿なこと言うんじゃないやねえっ！…俺はさっき言った通り、あのままモモタロスが誰かに無差別憑依しまくったら面倒だから言ったまですだー！」

「……あたた、…そうかなあ」

「そ・う・だ！——ほら、さっさと戻るぞ！！このあたりには、もう目ぼしい物はないみたいだからな」

そう言いながら、ファルコはガントレットを拾い上げ…待ち合わせの場所に向かう。

ユウスケは何とか体を起こし、…多少顔面に鈍い痛みを残しながらも…ファルコの背中を見ていた。

「…なんか、ファルコって……土に似てるなあ」

初めて会った時から、ユウスケはファルコと土がどこか似ていると思っていた。

素直じゃなくて。

ぶっきらぼうで。

口は悪いけど、仲間思いで。

でも、そういう自分の魅力に気付いていないのか、否定して。

そう思っていると、ユウスケの中に笑いが込み上げていた。
別に、侮蔑とかそういう笑いではない。

…単なる思い出し笑いだ。

「……ぷっ！」

「おい、ユウスケ！ポケットとしてないで行くぞ！」

「はいはい！」

——ホント、土に似てるな。

ユウスケは改めてそう実感しながらも、ファルコの後を追いかけていた…

〃
〃
〃

モモタロスは、不服だった。

〃
…
〃

折角自分の体代わりになる物を見つけてもらった以上、文句は言えないのだが。

…それでも、今の自分の格好には…
どうしても、ツツコミを入れたかった。

明らかに重歩兵用アーマーナイトと思われる、重い兜。
兜と不釣り合いなぐらいに、簡素な鎧。
色がバラバラの、ガントレット。

足の大きさ自体が違う、甲冑の脚部分。
そして、適当にかけられた錆びた剣…

そのトドメに、ワタルがどこからともなく見つけてきた…フンドシ。

『——おい、お前ら…俺で遊んでるだろおお！?』

最悪の見てくれ。特にフンドシが。

今まで笑いを我慢していたユウスケ達は、一斉に笑い出した…
それにはモモタロスも、流石に黙っていない。

「「「あははははははは!」」」

『自分達で見つけてきておいて、笑うなー!?』

「い、いや、ごめ……ブフツ!」

「ぶ。ぶ。ぶ…」

「あつははは、お似合いだぜ?モモタロス!」

目の前の物を直視した結果、思いっきり噴き出すユウスケ。

フンドシを調達しておいて腹を抱えるワタル。

爆笑するファルコ。

そんな彼らに、モモタロスの何かが切れ…

——剣を抜き、暴れ回っていた。

『おーまーえーらあああー!?!?』

「うわ、逃げろ!」

「妖怪甲冑兵士です!」

「ははは…」

そんな彼らを見ながら、ツイハークは微笑ましそうに見ていた。

「楽しそうだな」

「…ツイハーク。…そう見えるお前の感性は、どうなっている？」

その横で、頭痛を感じているのか…

ただ、青い顔で頭を抑えているムワリムだった。

次回予告

士「なあ、一つ訊いていいか」

ソウジ「なんだ」

士「クロックアップは、ハイパーがつく・つかないに関わらず…使用者の消耗が激しいんだよな」

ソウジ「ああ」

リンク「うーん、やっぱり普通はクロックアップの世界に長くいられないよ…」

ショウイチ「貴様、…ワームかつ!？」

ソウジ「ワームは弟切だ」

夏海「そうなんですけどね!？」

ショウイチ「…思えば、あの時…珍しくやった善行のせいで……俺はッ……!」

カズマ「ショウイチさん、それ正しいこと。犠牲は大きいけど、やってよかったこと!」

シンジ「あなたが助けなかったらソウジさんは出血多量で死んでた、ショウイチさんのやったことは…ショウイチさん一人の犠牲ですべてを救う行為だ!」

ユウスケ「何気に酷いな……どっちに対しても」

N
e
x
t
・
・
・
F
i
l
e
3
4
【リクエストS/Hカブトの時間旅行】

File 34【リクエストS/Hカブトの時間旅行】（前書き）

士「なあ、一つ訊いていいか」

ソウジ「なんだ」

士「クロックアップは、ハイパーがつく・つかないに関わらず…使用者の消耗が激しいんだよな」

ソウジ「ああ」

士「お前さ、」

ソウジ「ああ」

士「……ありえないだろ。ぶっちゃけ」

ソウジ「ああ」

士「消耗激しいんだろう？それなのになんで普通に生きているんだ」

ソウジ「さあ」

アスム「考えてみれば、ソウジさん、……ありえない」

ワタル「ですよ…！」

タクミ「ありえないというか、……怖いよ既に」

リンク「俺が実証しようか？」

ピット「どうぞご自由に」

（リンク、現在クロックアップ中…）

ソウジ「こっちも気になっていたんだが、別の世界であってもクロックアップはクロックアップだ」

ショウイチ「らしいな」

ソウジ「で、……何故俺はこの世界にしながら、クロックアップの世界からも抜け出せているうえに、クロックアップも正常作動しているんだ？」

士「そうか、お前、システムが故障したせいでそんな状態だったな」

マスター『それは私が答えよう』

ピット「うわ、マスター！」

マスター『この世界に呼ぶ際、そのままでは不便だと思い…』【この世界にいる間、クロックアップは正常作動される】ようにしていたのだ』

翔太郎「んなことするぐらいなら、そのまま直せよ…俺のところに報酬届けたぐらいだし」

マスター『それは流石に管轄外だ』

『Clock Over』

「カブト「うわっ!？」」

ピット「お帰りのさーい」

リンク（変身解除）「うーん、やっぱり普通はクロックアップの世界に長くいられないよ…」

ショウイチ「貴様、…ワームかつ!？」

ソウジ「ワームは弟切だ」

夏海「そうなんですけどね!？」

弟切ソウ…ソウジに擬態したワーム。そこ、仮面ライダーGに出てたと言わない。こら、使い回しと言っな。オトギリソウとも言っんじゃない。

士「で、本題に戻るが」

ユウスケ「Σまだ本題じゃなかったんだ!？」

士「お前って、ディケブラ本編でハイパークロックアップしてただる。あれって、連続なのか？」

ソウジ「ああ」

士「インターバルは？」

ソウジ「ない」

士「……よく過労死しなかったな」

ソウジ「死んでいる暇はないからな」

アスム「でも、ロイのせいで大怪我していたじゃないですか…」
ワタル「あれは大丈夫なんですか？」

ソウジ「それについては…ショウイチが助けてくれたから」

全「…え?」

士「ワンモアプリーズ」

ソウジ「ショウイチが治してくれた」

ユウスケ「えっと、——ショウイチさんってどこまでソウジさんとの縁が切れないんだろう…ああ、意見が纏まらない、ええっと」

リンク「仲いいよね!」

ショウイチ「やめい!」

ピット「あなたの場合、無理に否定すると怪しまれますよ」 99

話」

ショウイチ「…思えば、あの時…珍しくやった善行のせいで……俺はッ……！」

カズマ「ショウイチさん、それ正しいこと。犠牲は大きいけど、やってよかったこと！」

シンジ「あなたが助けなかったらソウジさんは出血多量で死んでた、ショウイチさんのやったことは…ショウイチさん一人の犠牲ですべてを救う行為だ！」

ユウスケ「何気に酷いな……どっちに対しても」

夏海「でも、大丈夫だったんですか？」

ソウジ「まあ、いろいろと気は遣ったなあ」

翔太郎「待てよ？……ハイカブがソウジさんってことは、…これまでに出来たハイカブは……」

ソウジ「それについては、今から話そう。……話したくないこともあるが、まあ、それは致し方ない……」

File 34【リクエストS／Hカブトの時間旅行】

…左の傷が、痛む。

…頼む、せめて目の前にある光までは。

…持ち堪えてくれ…！

「夏海くん！ユウスケ…絶対に、仲間の手を離すなよッ！！皆もだ
！！」

「は、はい……え？」

「それ、どういう…」

『…夏海ちゃん、ユウスケ！言われたとおりにしたほうがいいわよ
っ！？』

夏海の服のポケットに入っていたキバーラが、叫ぶ。

すると…

次の瞬間、カブトHFは黄金の光目掛けて…ユウスケ達を投げ飛ば
していた。

「——おおおおおっ！」

「「わああああーツツ！！？」」「」

「きゃー！」

「ぎえー！」

「ソ、ソウッ……」

タクミの足に捕まっていたリンクが、カブトHF側を見る。

既にその体は、重力に従い落下していく……

傷を受けた状態で、さらに加速したのだ。反動はおろか、血の抜け具合も半端ではない。

だが、そんな様子を一切見せず、カブトHFは叫んだ。

「——俺は、……絶対に戻ってくる……だから、行け！！」

「そしてついでに、……リンク……君の剣も探してくる……それまでは……絶対に皆から離れるな……！！」

そして、カブトHFの耳には……

『Hyper Clock Over』

ハイパークロックアップが解除された、という音声だけが聞こえて

いた。

くくく

カブトHFが落ちたのは、どこかの砂浜だった。

まだ、意識はある。

だが意識があるが故に、自身を包む激しい痛みと傷口からの熱に襲われていた。

「つつ…、…まいったな…」

——まだ死ぬ予定じゃない。

少なくとも、ここで死ぬわけにはいかない。

待っている人達のためにも…

そんな思いを胸にカブトHFは起き上がろうとするが、立ち上がる力はなく、意識はすでに朦朧としつつある。

…その時だった。

「——おい！」

自分の元にやってくる人間。

…シヨウイチだった。

彼がここにいるということは、過去の時間か。

そう思いながらも、カブトHFは息も絶え絶えに話す。

「くっ……、…お前は……」

「お前、この間の奴か？何があつた」

「……この間？さっきまで一緒に、——」

カブトHFは、そこで言葉を途切らせる。

…考えていたのだ。

いつの時間かは分らないが、自分の正体を明かしてしまえばどこかでズレが生じてしまう…

それは、どこかの時間に落ちたマスターソードも同様。

もし、リンクの手元にある状態でもう一つのマスターソードが彼の目の前に出されたとしたら……

歴史が大きく変わる事態になりえる。

（…ここは明かさないほうが賢明か。それに、……俺…ただでさえシヨウイチを弄ってるからな。というか、反応が面白いからやってるんだが）

若干本音を暴露しつつも、カブトHFは【自分の正体を明かさない】という結論に至る。

そう思っていると、シヨウイチが杖を取り出し再び声をかけた。

「これでいいか。ないよりマシだ。…おい、変身を解け。治す」
「——いや…このままで、いい」

その言葉を聞いたシヨウイチは、顔を顰めていた。

——怪しまれたか。カブトHFは、仮面の奥で苦い顔をする。

しかし、理由を察してくれたのか…追及はせず、治療をしてくれた。

「…まったく、強情な奴だ」

「………すまない」

そして、…傷は思ったよりも一瞬で治る。

それに驚きつつも、カブトHFはすつと立ち上がる。

…血が相当抜けているため、少しふらついてはいたが…とりあえず
それで目の前の男が違和感を覚えなかった辺りは、相当のポーカー
フェイスであろう。

「ありがとう。——まさか、俺がシヨウイチの世話になるとは思
わなかった」

「おい、それはどんな皮肉…？…ちょっと待て、」

…しまった。

カブトHFは、早速墓穴を掘ってしまう。

自分は、シヨウイチの名前を『知らないはずでなければいけない』
のだ。

勿論それに気付いたシヨウイチが尋ねてきたが、強引に誤魔化すこ
とにした。

「悪いが、俺はもう行かなければいけないんだ。…じゃあな」

「待てッ！」

そう叫ぶシヨウイチだが、

『Hyper Clock Up』

……カブトHFは、既に立ち去った後であった。
しかし、この際は気付かなかった。

立ち去る際、自分が持っていた写真を落としてしまったことに…

~~~~~

その後も、カブトHFは【Aポケの世界】・【マリオの世界】に来  
ていた。

【Aポケの世界】では、ダブルとリンクの窮地に現れ、救済してき  
たところだった。

この干渉もいかなものかとカブトHFは思っていたが、このまま  
倒されでもしたらそれこそ危ないだろうと思い、

…それ以前にシヨウイチの件で半分諦めに入っていた。

【マリオの世界】でも同様だ。

こちらはいきなり暗い牢屋に出たかと思えば、ユウスケと会う。  
その際、ユウスケを拘束していたロープを解いてそのまま去って行った…

そして次に飛んだのは、【サムスの世界】だった…

それはもはや、カブトHF自身の記憶にも新しいこと。

…思えば、自分で自分を助けたことになるのか…  
これこそ本当は相当やばいのでは、と思いつつも、カブトHFは目の前の敵に集中した。

『『『ギー！』『』』

キュレックスワームドーパントとなったプリム達が、カブトHFに襲い掛かる。

過去の自分がすぐさま応戦しようとするが、その前にカブトHFが先に動いていた。

（戦闘で使うのもカウントに入るのだろうか、…致し方ない）

『Hyper Clock Up』

そう思いながらも、腰のハイパーゼクターをタップする。  
戦闘でハイパークロックアップをするのは初めてであったが、――

もはや石になっているのではないかというぐらい、周囲は止まっていた。

…ああ、これは、……クロックアップの暴走よりもキツイな。

改めて実感しながらも、カブトHFは動きが止まっている敵を難なく倒す。

『Hyper Clock Over』

その音声と同時に、ハイパークロックアップは解除。

プリムやキュレックスワームドールパント達は、一瞬で爆散していた。それを見た武装兵達は、脱兎のごとく逃げ出す…

一方でカブトも、変身を解いて自分に問いかけていた。

「…ひとまず、礼を言おう。助かった」

（いや、どうも…）

「——なぜ、一言も告げようとしなんだ…？」

（…未来の俺だからに他ならない）

心で自分自身に返答をする、カブトHF。

今までは何とか強引に誤魔化していったが、——今回はそうもいかない。

…目の前にいるのが自分だとばれてしまえば、元も子もないのだ。

あと、——自分自身なら結構勝手は分かるというものもある。

ある程度黙っていたとしても、相当な事でなければ怒ったりはしない……と、信じていた。

（……とりあえず、逃げるか。すまん過去の俺）

『Hyper Clock Up』

心の中で謝罪しながらも、——カブトHFは別の世界に渡っていた。

〃  
〃  
〃

その後もカブトHFは、様々な場所を巡っていた。  
…中には、「スガイン」だの「アリユウバ」だの変なコンボを語っていた場所にまで飛んでいたが…

今、彼はハイラル地方のどこかにある雪山に来ていた。

ここは一年中雪が降り積もっており、旅人を拒絶するかのような吹雪が吹き荒れている。

そんな中に、ハイパーカブトが一人…立っていた。

辺り一面、白。白。白。

白の支配する世界の中で、彼の存在感は一際目だった。

「——ここでもないと言うのか…」

白銀の世界に立ち尽くしながら、ハイパーカブトはまた……時間移動を行う。

だが、使っていたハイパーゼクターと思わしきモノに、一瞬だけ青い電流が走ったのを見る。

「……あそこへの移動を含め、後3回が限界と言った所か……」

「何所にあるんだ、——“あの剣”は」

思えば、予想以上の回数を……しかも休憩も入れず、使っていたような気がする。

流石にカブトHFも、疲労を感じつつあった。

しかし、窮地に立たされているリンク達のためにも、ここで足を止めている余裕はなかった。

次に彼が来たのは、【アイクの世界】。

偶然ユウスケ達の目の前に現れる、カブトHF……  
当然驚かれてしまった。

「……うわあっ!?!」

「君達は……この瞬間の、ユウスケ達か」

ユウスケにとっては、記憶に新しい存在。

カブトHFの方もユウスケを覚えていた、というより“知っている”ために、話は繋がる。

だが、シヨウイチはというと……奇異な目で自分を見ていた。  
それだけで分かったのだ。

このシヨウイチは、先程自分を助けたシヨウイチではないと。

(…まあ、当然と言えば当然か…)

「あれっ、——前に【マリオの世界】で会った…」

「すまないが、俺は探し物の途中なんだ。……しかし、これであと二回しか移動ができなくなった」

「え？」

「…こちらの話だ。すまない、邪魔したな」

そう言うと、カプトHFはハイパークロックアップで別の時間に飛翔する。

その時間移動の途中、カプトHFはふと違和感を覚える。

…何か、ないような。

そう思い懷を漁るが、——大切な家族の写真がないのだ。

「…！しまった、どこかに落としたか……」

だが、【神の大地】に行くことも考えると…

心当たりのありそうな場所に行く余裕も、ない。

そもそもどこで落としたのかの検討も、曖昧なのだ。

「誰かが見つけてくれると嬉しいが、…相当縁がない限りは難しいか」

——諦めるしかないだろう。

カプトHFは、そう決断した。

それに、写真はなくても…心の中に大事な家族は存在している。そう、言い聞かせながら…

実質最後の飛翔。

そこは、【ソニックスの世界】…

なんとかここで見つけなければ、とカブトHFは思っていた。  
その際、彼の目の前に新聞紙がひらりと落ちてきた。  
一体どうしたのだろうか。

そう思いながら、とりあえずそれを見てみると…カブトHFは、驚いていた。

「こ、これ…リンクの剣…？」

そして、グリーンヒル美術館。

カブトHFは、東門のほうにいた。

警備は多かったが、そこはどうにでもなるだろう…

しかし彼にとって、今やろうとしている海東行為<sup>かいとうぎ</sup>だけは、本来なら絶対にしたくなかった。

だが、……ここにあるのだから仕方がない。

「——やっと見つけたというのに…何故……」

まさか泥棒行為に堕ちる結果になるなど、カブトHFは思いもしなかっただろう。

だが、

……やっと見つけた剣。何としても、取り戻したかった。

それに、ハイパークロックアップも残り一回しかできないと考えると、もう時間はない。

すっかり警備の空いた西門から、侵入していた。

~~~~~

念のために、カブトHFは変身を解く。

それは何故か？

ハイパーフォームでは通常のクロックアップができず、なにかあった時に不便。

それならば、一旦通常フォームになってそっちのクロックアップを使ったほうがいいと考えたのだ。

「さてと、——とりあえず…やること・その一」

ソウジは置物の陰に隠れながら、周囲を警備する警備兵をやり過ごす。

人外ばかりと思っていたが、意外と、普通の人間もいる。

恐らく他の世界から、派遣されて来たのだろう。

そして、偶然自分と身長に近い男が……一人で見回りをしていた。

「ふう、レナースのせいでデートに行けなくなったじゃないか……」

(……すまん)

ソウジは心の中で謝りながらも、

——次の瞬間、警備兵の背後から回し蹴りを放っていた。

男を気絶させ身ぐるみをはいだ後、ソウジは変装する。

その際、ほんの些細なお遊び心でショウイチ分けにしていた…

芦河本人には悪いだろうが、……ソウジのほうが真面目な警官に見える。

「さて。とりあえず…すぐ帰ってくるから起きないでくれ…」

気絶した男に手を合わせながら、ソウジは【紫神の剣】のありそうな場所を探す。

その時だった…

「——だーいーきーさーんッ！」

聞き慣れた声が、聞こえてきた。

そして、それを聞いた警備兵達が大慌てで声のする方向に向かっていくのが見える…

ソウジは悟った。

……ここに、過去の夏海達もいるのだと。

そして、それに至った理由も…

「……海東、後で蹴るか」

暫く移動していると、頑丈そうな金庫が見える。

パスワード式であるのを見る限り、どうやら、あの先に目的の剣がありそうだ…

警備の殆どは、夏海達のほうに出払っているためか少ない。

その際偉そうな男がやってきて、ソウジに声をかける。

「おい、お前！」

「…はい！」

「ちよつとトイレに行ってくる、代わりにこの金庫を見張っておけ！」

「あ、はい」

そういうと、男は宣言通りトイレに向かった。

…自分がレナースだったらどうするのだろうか、彼は。

…いや、ある意味変わりはないが…

そう思いつつ、ソウジは男がいなくなったのを見計らった後……すぐさま警備がいない場所に逃げ込むように走って行き、カブトに変身していた。

「…変身」

『Hensin』

「キャストオフ」

『Cast Off Change Beetle』

「……クロックアップ」

『Clock Up』

実にいい手際で、クロックアップを始めるカブト。

瞬時に金庫の前に移動するが、9桁ものパスワードなど彼には分らない…

試しに、適当な数字を試してみたが……正しい番号を知るのに、相応時間がかかりそうだ。

「つく…このままだと、埒が明かない。……あ、そうだ」

カブトは、ポンと手を叩く。

そして彼は…

先程トイレに行った、偉そうな男の元に移動。

今まさにトイレに入ろうとしていた彼の懷から、メモを拝借。

…想像通り、彼がここを任された刑事らしい。念のため、パスワードの暗証番号を渡されていたのだ。

「——ところで、この男がレナースだったらどうするのだろうか…
…この館長」

カブトはつくづく謎に思いながらも、今ここで心配するべきことではないだろうと察したか…

全速力で正しいパスワードを入れに向かっていった。

「…751938315……と」

カブトはパスワードを認証させ、扉を開けた。

…というより、明らかに扉の開くスピードのほうが遅いので半ば強引に開けていたが。

そして、ケースに厳重に入れられたマスターソード…

カブトはケースを持ち上げ、剣を取ると、今度は偉そうな男の懷に

紙を戻しに行く。

その後で変身を解き、男が戻ってくるまで律儀にそこを守っていた。その際、剣は窓から投げて森の中に落としてある。

(……ところで、感知センサーとかないのだろうか。この美術館……)

些細なことを気にするソウジだが、そこへ偉そうな男が帰ってくる。予想通り、ソウジの行動には気付いていないらしい。

「そこのお前！」

「あ、はい」

「ご苦労だった。持ち場に戻れ」

「分かりました」

愛想のいい笑顔を見せた後、踵を返し……

心の中で『すまない』と思いながら、最初に気絶させた男のところまで服を返しに行っていた。

その後は、比較的楽だった。

服を着替えた後、速やかに美術館を脱出。

落とした場所の見当を思い出しながら、森の中にあつたマスターソードを見つけていた。

そしてカブトHFは、【神の大地】に向けて飛翔する準備を整える。……流石に、これまでのハイパークロックアップの反動はそれなりに

残っているが…

「——よし、行くか…！」

カブトHFは、気にせず【神の大地】に向かっていた。

〵〵〵

所詮、【仲間】などその程度。弱い者が集まるのは、馴れ合いではない」

「…ディケイドを倒した、最大の一撃で…終わらせてやろう」

ディケイドは、両手をついた状態で…シュナイドCFを見ていた。

——このまま、終わるのか…？

——好き勝手に言われたままで、終わるのか…！？

その気持ちは、翔太郎達も同じだった。

そして、シュナイドCFがFARカードを装填しようとした…その時だった。

「…おばあちゃんは言っていた。男なら、一度結んだ約束は必ず守れと」

シユナイド達の背後から、声が聞こえる。
そして、カツ…カツ……という、足音。

「そして、これは俺の言葉。——人との関わり、絆、縁…^{えにし}それらを否定する者に、勝利の星は輝かない」

現われたのは…

…カブト・ハイパーフォームだった。

その姿を見て、ディケイドが叫ぶ。

今の変身者が士ではない、と知った彼は…手に持っていた剣を、手渡す。

「…ソウジさん！」

「ん、リンクか。丁度よかった…約束のものだ」

「……マスターソード！」

「——結構、探し回ったな……たまに、間違ったところに飛んだりしたが」

はは、と明後日の方向を見ながら語るカブトHF…
だが、これedyやく持ち主の元に返すことができた（方法は黒歴史化して）と……カブトHFは、喜んでいた。

そして目の前の相手を見据える。

正直、今のギリギリな状態で戦えば勝ち目どころかほぼ倒れる。ただでさえ、ロイによる重症のダメージは尾を引いているというのに。

しかし、それでも彼は戦った。

アギト・バーニングフォームへと変身する、カメンライドディケイドと共に。

File 34【リクエストS/Hカブトの時間旅行】（後書き）

次回予告

マリオ「スマブラでは、さまざまなアイテムが使えるんだ」

士「大体知っている。…しかし、なんかファンシー率多くないか？」
リンク「カービイとかいるしね…」

ゲームウオッチ「お、お前ら！もしかして…それ、第二倉庫に置いていた奴じゃ！？」

全「「第二倉庫？」」

マリオ「あ、そういえば…そこから取ってきたような」

ゲームウオッチ「アホ！あの中には、マスターが不良品と判断して俺とロボに片付けさせたアイテムが入っていたんだぞ！？」

アスム「と、言うことは…」

士「どわあああああつ！？翔太郎ッ、翔太郎ー！」

フィリップ「オールドドーパントの被害に遭ったわけでもないのに…ッ！！」

アスム「ししよーっ！？」

シヨウイチ「俺達の心配もしてくれないか！？」

N
e
x
t
・
・
F
i
l
e
3
5
【翔太郎の末期 / Aは計画的に】

File 35【翔太郎の末期／Aは計画的に】

士「うおおおおっ！いくぜ、俺のターン！！プレイヤーキャラを
カブトに変更し、アタック！！」

リンク「何してんの？」

ユウスケ「クライマックスヒーローズオーズの、ラグナロクモード」
カズマ「ううー、俺もやりたい……」

シンジ「士ー、次カズマに変わらないとお前本気で張り倒すからな」
アスム・ワタル「いつも本気じゃなかったんですか！？」

ソウジ「まあ、士達がいつも生きているレベルだから…本気じゃないのは確かだな」

シヨウイチ（……シンジの本気は、ディケイドをも葬るのか）

士「分かってるっての。とりあえず、次のターンでクリアだから…
念のためにガードエナジー（中）でも使っておくか」

ユウスケ「ちゃんとアイテムもあるんだよなー」

リンク「本格的だな」

タクミ「ホント、前作・前々作が嘘のように…」

アスム「タクミさん、しーっ！」

ソウジ「根本的な理由は、ドラゴンナイトの流よ」

カズマ「うええええいつ！」

シンジ「っしやー！」

シヨウイチ「まあ、そのせいで龍騎ライダーがあんな」

ワタル「君ーのーまーまーで、変わればいいー！」

海東「本当に、ドラゴンナイトの移植作品だよね」

翔太郎「生身ジョーカーエクストリーム！」

フィリップ「簡単に解説すると、僕と翔太郎が肩を組んで行っじゃ
ンプキーンッ！」

海東「グギユグバァッ！」

士「終わったぞー」

カズマ「やたー」

マリオ「しかし、アイテムなあ…アイテムと言えば
士「？」

マリオ「スマブラでは、さまざまアイテムが使えるんだ」

士「大体知っている。…しかし、なんかファンシー率多くないか？」

リンク「カービイとかいるしね…」

カズマ「リップステッキとか」

シンジ「スターロッドとか」

アスム「ウサギずきんとか」

ワタル「ハートの器とか」

ショウイチ「ボム兵とか」

ユウスケ「ワープスターとか」

タクミ「ドラグリーンとかも、ある意味ではファンシーですよね」

ソウジ「キノコもな」

夏海「後、食べ物とかくす玉も…」

ピット「そりゃあ、まあ、基本子供向けですから」

リンク（ごめんなさい、トワプリはB判定食らってます）

士「なんか、使ってみた感じがするな。特にクラッカーランチャー」

翔太郎「破壊者が兵器を持つんじゃないやねえ！」

フィリップ「僕は勿論、スーパースコープ！」

翔太郎「悪魔が武器を持つな！」

シンジ「ハンマーとかも面白そうだよな」

翔太郎「シンジは封印されてくれ。頼むから」

マリオ「お前達がそう言うと思って、今回は先制してみたぜ！」

ファルコ「そんなわけで、倉庫から拝借してきたアイテムだ！」

海東「おおっ！」

ユウスケ「い、いいのか？勝手に取ってきて」

ファルコ「鍵が掛ってなかったしな。こういうのは、管理責任者の

ロボとゲムヲの管理不行届だ」

ワタル「それが逆に、怖いんですが」

（
（
（

（カズマはラグナロクモードで遊んでいます）

マリオ「流石に写真館の中でやるわけにはいかないからな」

夏海「当たり前です。壊れたらどうするんですか！」

ピット「だから、外でやることにしたんじゃないですか……でも、クラッカーランチャーとか気をつけないと、写真館に当たる恐れもありますからね」

士「じゃあ、とりあえず使ってみようぜ」

ソウジ「じゃあ早速、シヨウイチに毒キノコでも投げるか」

シヨウイチ「やめいっ！…つか、当たる前に投げてやる！！」

翔太郎「おい、海東、何しようとしてるんだ！？」

海東「ふっふっふ。生身の人間にスーパーキノコを投げたらどうなるのか、ってね」

タクミ「わっ、スーパースターが逃げた！」

リンク「あれって、ランダムに跳ねるからなあ……」

ユウスケ「じゃあ俺は、ワープスター！」

士「ハリセンでもやってみるか」

シンジ「じゃあ、ハンマーでも……って、何この金色」

ゲームウオッチ「——ちょっと待ったー！」

全「「うわっ！」「」」

ファルコ「ゲームヲか。どうしたんだ？」

ゲームウオッチ「お、お前ら！もしかして…それ、第二倉庫に置いていた奴じゃ！？」

全「「第二倉庫？」「」」

マリオ「あ、そういえば…そこから取ってきたような」

ゲームウオッチ「アホ！あの中には、マスターが不良品と判断して俺とロボに片付けさせたアイテムが入っていたんだぞ！？」

アスム「と、言うことは……」

「????「ぎゃあああああつ!?!」
「????「……な」

ユウスケ「えっ、いったい何が……って、…あれ?どこの子なんだろう」

アスム「シヨウイチさんとソウジさんが、いつの間にかいなくなっていますね」

ワタル「…ん?まさか」

夏海「あの、君達、どこの子ですか?」

「???「どこの子、だと…」

「???「いや、まあ、無理もないような」

夏海「え?」

子シヨウイチ「俺は……芦河シヨウイチだああッ!」

子ソウジ「ははは…毒キノコを投げつけあった結果、……子供になつてしまつたみたいでな」

夏海「ええええええええー!?!」

ユウスケ「そん、え、…シヨウイチさん綺麗すぎる」

子シヨウイチ「どつという意味だ!?!」

アスム「少なくとも、20歳近くは若返っていますよね?」

ワタル「今のソウジさんが僕達と近いぐらいですから…多分そうかと」

子ソウジ「うーん、しかし、俺達はいいんだが…これだと、逆パターンが怖いな」

タクミ「——その予感、当たってますよ…」

老翔太郎「あー…なんだか眠くなってきたのー……海東爺さん」

労海東「そうですなあー……」

リンク「あの二人なんで、ヨボヨボのお爺さんに……」

士「どわあああああつ!? 翔太郎ッ、翔太郎ー!」

フィリップ「オールドドーパントの被害に遭ったわけでもないのに……ッ!」

アスム「ししょーっ!?」

子シヨウイチ「俺達の心配もしてくれないか!」

シンジ「——うわあああああーっ! 誰か、とめ、止めてえええええ!」↑ゴールデンハンマー暴走中

士「ぎゃああああああつ!?」

フィリップ「ま、魔王が……大量殺戮兵器を手にしたッ!?」

ファルコ「落ち着け! ゴールデンハンマーはピコハンの可能性もあるうえに、暫くしたら効果が切れる……なんとか持ちこたえるんだ!」

ゲームウオッチ「だから、——不良品だっって言ってる……」

ユウスケ「まさか」

ゲームウオッチ「ああ。……本来の使用限界を超過して! 暴れまわってるんだあいつはあああ!」

全「「えええええー!?」」

シンジ「わあああああああ!」

ぴっこーん

老海東「おふっ」

ピット「あら、気持ちいいピコハンの音」

アスム「ししょーっ!」

ワタル「わわっ、いくらピコハンでも…今の海東さんじゃ昇天したはずじゃ！」

老海東「おっほっほ…他界した兄さんが見えるわい……」

子シヨウイチ「待て、落ち着けー！海東、死ぬなー！！」

士「後、お前の兄貴は生きてるだろ！現在進行形で！！」

タクミ「だ、誰か、——葬式の準備を！」

ワタル「タクミさん、テンパってるからってそれを準備するにはまだ早いです！まずは、棺桶です！！」

リンク「Σ救急車だよッ！？」

ピット「いや、どれも違うから！」

マリオ「スーパースターがあれば、シンジを殴って止めることもできるかもしれないが…」

アスム「流石に、殴るのは危なくないですか？ピコハンとはいえ、シンジさんですよ？？」

子ソウジ「せめて、ハンマーを奪い取るぐらいだな」

タクミ「それに、スーパースターはさっきどこかへ行っちゃって…」

リンク「運よく誰かに当たっていればいいんだけど…でも、不良品だから多分……無敵効果ないんだろうなあ」

士「だったら、俺が止めて見せるぜ！……このクラッカーランチャーで！！」

子シヨウイチ「やめろおおお！シンジに直撃したら、お前も世界も終わるわあああっ！！」

マリオ「それに、そのクラッカーランチャーもきつと不良品…それ

を使ってみる！お前に暴発するのが目に見えている！！」
士「……じゃあやめるか」
ユウスケ「決断早ッ！」

リンク「だったら、スマッシュボールで最後の切り札を！」
マリオ「それだッ！」

ファルコ「待て！このパターンは……」
キンキン！
ガン！

リンク「……壊れな！いつ！」
マリオ「マンマミーアッ！」
ファルコ「やっぱりなあ……」

アスム「だったら、このウサギずきんで」
ワタル「ずきんで何するんですかッ！？」
アスム「……雌豹のポーズ！」

タクミ「いや、ちよっ、アスム君！？」
ワタル「駄目だ、師匠の死でアスムの頭がおかしくなっている！」
夏海「でしたら、このリップステッキでシンジさんを弱らせて……！」
ユウスケ「それも駄目！ひょっとしたら、シンジさんを強化するかもしれない！！」
士「じゃあ、どうしろってんだ！？」

カズマ「みーんなー！……キングフォームじゃないのにピカピカッ！！」

全「ナニヤテナダアンタツ!?」

ピット「も、もしかして、あれ…」

リンク「まさかカズマ、逃げたスーパースターに当たった!?」

タクミ「はっ!最強の壁となりつつあるカズマさん+スーパースターなら!きつと勝てる!」

カズマ「どつたの?」

士「カズマ!かくかくしかじか」

カズマ「これこれうまうま。……分かった、シンジを止めればいいんだな!」

子ソウジ「だが、あのスーパースターも不良品なんだよな」

子ショウイチ「待てよ、ゴールデンハンマーはともかく…他は大半があべこべだったんだ。……まさか、とは思うが」

シンジ「ぎゃー!」

ばっきょん

カズマ「うえーい!?」↑大ダメージ

ユウスケ「カズマああああー!」

ピット「げっ、カズマさんのスーパーアーマー無くなってるし!」

子ショウイチ「やっぱり弱体化かああッ!」

カズマ「……負けないし!」↑血だくだく

士「馬鹿、やめろ、思いつきり血が出てるじゃないか!」

シンジ「カズマ、にげ、ろおお!」

カズマ「逃げない!」

ワタル「死にますよ!」

カズマ「もう…もう俺は!シンジを見捨てて逃げはしない、……俺が助けるッ!」

士「いいセリフだ、感動的だな、…だがやめろおおお!!」
リンク「カズマ、自分のダメージ分かってる!? カズマー!」
カズマ「うおおおおー!」
ユウスケ「人の話を聞いてから行動しろってー!」

シンジ「あー!」
カズマ「うおー!」
ワタル「このままじゃ、二人共…っていつかカズマが危ないですよ!
!? まだ光ってるし!」
ゲームウオッチ「仕方ねえ、……正真正銘の、【最後の切り札】だ
!」
リンク「え!?」

ゲームウオッチ「劣化されても変わらない、唯一つの……バナナの
皮ああッ!」

士「バナナかよ!?」

すってーん

シンジ「きゃー!?」

カズマ「うえー!」

タクミ「あつ、転んだ!」

ユウスケ「カズマも巻き込まれたけど!」

子ショウイチ「あ。———今がシンジを取り押さえるチャンスじゃないか!?!」

子ソウジ「成程…確かに」

カズマ「シンジは俺達に取り押さえる! 士、早くー!」

ワタル「今のカズマじゃ、そんなに長くは持ちこたえられません！」
ユウスケ「頼むー！」

士「と、言われ、ても…なかなか…離れないッ！」
タクミ「じゃあ、アスム君の怪力なら！」

アスム「…黒豹のポーズ！」

リンク「駄目だ、使い物にならない」

ファルコ「ってか、雌豹と何が違うんだよ!？」

ユウスケ「は、早く、…抑えられなくなってきた！」

士「…そう言われても、な…！」

ピット「ああもう、しょうがない…！」

リンク「え、ピット？」

ピット「ふんぬりやあああああああー!!」↑E2メモリ
を粉碎する程度の握力

シンジ「うわあああつ!？腕、もげる、…腕ええええええ！」

ピット「勝手にハンマー取ったあんたが悪い。…その腕もぎ取る勢いで…ぬりやあああああああ！」

士「お、おい、やめろピット！確かに前が引つ張ってから、俺が
要らないほどのパワーで引つ張られているのが分かるが!!」

ユウスケ「シンジさんの腕がもげる以前に、…俺達が持たないつて
ばああつ!？」

ウルフルフェノク「だ、駄目だ、オルフェノクになっても無理！」
リンク「ピットのほうの力が強すぎるッ!？」

マリオ「おい、あいつ火力の低さ…嘘ついてるだろ！」

ファルコ「そりゃ、握り潰すのと剣で切るのじゃ…大きく違うしな
あ!？」

ゲームウォッチ「くっそ！老人どもは頼りにならないし、怪力アス
ムも狂ってやがるし、カズマに至っては瀕死の重体！！」

ワタル「それよりも前に、ご臨終の人が一人いますけどね！？」

アスム「狩人のポーズ！」

士「くそ、おい、夏海！お前も手伝え！！」

夏海「無理ですよ！」

老翔太郎「……うっむ、逆転の発想はどうかのー」

全「「え？」」

フィリップ「はっ、そうだ！…強化系アイテムの能力補正があべこ
べであることを利用するんだ！！」

士「つまり、どういうことだ！？」

フィリップ「本来なら、巨大化してパワーアップする筈のスーパー
キノコを投げつけられた翔太郎と海東大樹は老人になった！本来の
スーパーキノコの逆の特性は？」

リンク「えっと、——つまり毒キノコのことだから…体が小さく
なって、吹っ飛びやすくなる上に攻撃力も低くなるけど、攻撃が当
たりにくくなる」

士「…大体分かった！……ショウイチ、ソウジ、…お前らこっちを
引っ張ってくれえええ！ピットのせいで、こっちがピンチすぎる！
！」

子ショウイチ「くそ、子供使いの荒い！」

子ソウジ「まったくだ」

士「文句言わないでやれえええ！あと、ソウジお前この状況楽しん
でるだろ！？」

（何とかシンジからハンマーを取り外せました）

シンジ「死ぬかと、思った。…今は……まずかった」

リンク「まずいってレベルじゃないです」

士「シンジ、…これに懲りたら……二度とハンマーを持ち出すんじゃない！いいな！？」

シンジ「…ふぁーいず…」

ワタル「カズマ、大丈夫ですか？」

カズマ「…んー、なんとか…」

シンジ「カズマ、その、ごめん…」

カズマ「いーよ。俺だって、本編で色々迷惑かけてるし…」

子ソウジ「仲良きことは美しきかな」

ピット「ホント、ソウジさんマイペースですよね」

子ショウイチ「つか、俺らいつまでこのままなんだ？」

夏海「ところで、何か忘れてるような？」

士「おい、これ以上何があるって言うんだ？」

ユウスケ「……多分、あれ」

老海東「（昇天）」

夏海「大樹さああああんっ！？」

士「かいとおおおおっ！？」

File 35【翔太郎の末期／Aは計画的に】（後書き）

次回予告

マリオ「——お前達は、最終決戦の際！あんなにカッコいい決
ゼリフがあつた——」

サムス「だけど…私達にはそんなセリフ、一切なかった——」

翔太郎「とどのつまり——せめて、俺達にもカッコいい決め
詞をくれ——」

ファイター達「「イエス！」」

マリオ「リンクがカメンライドした際のはどうでもいい。せめて、
107話の全員集合のアレを！」

ピット（その前に、実質『この世界の仮面ライダー』であるグレー
リーはどうしたらいいんだろうか）

士「み、鳩尾に当たったぜ——」

ユウスケ「自業自得だ、士」

Next...Last File【影薄ファイター達の陳情決
め台詞】

Last File【影薄ファイター達の陳情決め台詞】

マリオ「うおおおおおっ！」

ファイター達「「ハードボイルド相談室ううう！！」」

翔太郎「おおっ！？なんか、かなり多いな！」

フィリップ「何があったのだろうか」

士「まあ、もう大体分かったがな」

翔太郎「奇遇だな、俺もだ。…とりあえず、訊くとするか」

マリオ「——お前達は、最終決戦の際！あんなにカッコいい決めゼリフがあったー！」

サムス「だけど…私達にはそんなセリフ、一切なかった…！」

ファルコ「俺なんて、ライダーになれないばかりに…同行できなかったばかりに後半からフェードアウト！」

フォックス「お前はまだいいだろ！？俺なんか、脅し要因に使われただけ！」

ウルフ「俺なんか、あんな仕打ちだったんだぞ！？」

デイディー「ウッキー！」

ソウジ「『オイラ達、出番のなかったファイターのこと忘れな
ー！』」

夏海「そうですよ！それに、合流してライダーの数が多くなるにつれて、個性のないキャラからどんどん影が薄くなるなんて…どんな拷問ですかー！」

翔太郎「……なんだろう、夏海の言葉が一番胸に刺さるんだが」
フィリップ「まあ……ね」

海東「僕は空気じゃないよ、……多分」

ユウスケ「……ライジングの力に目覚めたはず、なのに……orz」

アスム「僕なんて……出番、出番がッ……」

ワタル「僕もそれなりに扱い酷いですよね。ライダー側が」

士「……そういや、翔太郎やらリンクが変身したディケイドはかーなり、活躍していた気が」

モモタロス『電王なんて……電王なんてなあ！……シンジやピットが来るまで、……まったく……！』

ソウジ「これは何処かの誰かの言葉だ、——細かいことは気にするな」↑ハイパークロックアップで優遇の上にショウイチの漫才の相方

ショウイチ「いや、あの中だとユウスケは優遇された位置だよな……」

↑ソウジの漫才の相方

カズマ「うん、ユウスケ出番と見せ場あった」↑シンジ・サンダーズ関係

シンジ「ユウスケこつちカモン」↑そもそもリイマジ最初の合流者タクミ「……僕はここにいていいのだろうか」↑リンク補正が後半から強い

翔太郎「とどのつまり！——せめて、俺達にもカッコいい決め台詞をくれ……」

ファイター達「……イエス！……」

マリオ「リンクがカメンライドした際のはどうでもいい。せめて、107話の全員集合のアレを！」

ピット（その前に、実質『この世界の仮面ライダー』であるグレイリーはどうしたらいいんだろうか）

（国際警察内）

レイラ「…ブルンゲルツ！」

シス「何そのくしゃみ」

士「まあ、決め台詞って言うのはヒーローの特権だしな」

ユウスケ「そうだよなあ。だから、難しいんだ」

士「よし。じゃあ、お前らにコツを教えるから…自分で考えろ」

夏海「Σ適当すぎです!」

翔太郎「っていうか、お悩み相談室は俺のコーナー！（今回する気なかったけど）」

~~~~~

Lesson1・自分の特徴は明白に

士「さて、メタ発現になるだろうが…恐らくリアル視聴世代のカズマ。クウガはどういう特徴を持った仮面ライダーだ？」

ユウスケ「なんでクウガの俺に訊かないわけ!？」

カズマ「えーっと…カレー、じゃなかった。…サムズアップとか、笑顔とか」

士「そう!クウガは皆の笑顔を守る戦士!…ここで、107話のクウガを振り返ってみよう!」

RUクウガ『皆の笑顔を守る戦士!仮面ライダークウガ・ライジン  
グアルティメット!!』

士「このように、自分の特徴をストレートにぶつけることは、決めゼリフとしてもっとも有効だ。俺の【通りすがりの仮面ライダー】も、これに入る」

ピット「どっかのタジャドルもそんなでしたよね」

リンク「だって他になかった…」

タクミ（僕もです）

BFファイズ『大事な人の夢を守る閃光!仮面ライダーファイズ…  
ブラスターフォーム!』

タジャドル『世界を廻り、人々の為に戦う…真紅の翼!仮面ライダー  
オーズ・タジャドルコンボ!!』

Lesson2・キャッチフレーズを利用する

士「はい、アギト見てそんなシンジ。アギトのキャッチフレーズは  
?」

ショウイチ「目の前のアギトは無視か!」

シンジ「…【目覚めろ、その魂】だったっけ」

士「大体その通りだ！はいそのギリ視聴世代のアスム、ブレイドは！？」

アスム「Σギリってなんですか！？…えと、【運命の切り札を掴み取れ】…？」

士「自分の作品のキャッチコピーを織り交ぜることも、決めゼリフとしてはいい。はい、じゃあここで振り返るぞ！」

Dキバ『あなたのその…憎しみの鎖！今こそ、解き放つ！！』

SFアギト『進化する魂！仮面ライダーアギト・シャイニングフォームッ！！』

KFブレイド『正義を貫く運命の剣！仮面ライダーブレイド、キングフォーム！！』

ワタル（リンクさんのカメンライド混ぜたッ！）

士「ちなみにカズマのことだから、切り札〃ジョーカー〃翔太郎と被るということで…足りない頭を使って必死に“切り札”を使わないようにしたらしいが…」

カズマ「…リンクと被りましたッ…orz」

Dブレイド『“信じる”想いの剣は、決して折れない。錆びず、朽ちず、…心を貫き通す！』

Lesson 3・名前と掛ける！

士「シンジとアスム」

シンジ「何？」

アスム「どうしたんですか？」

士「信じと明日む」

シンジ「…は？」

アスム「あの」

士「名前を利用できそうな奴は、とことん利用しろ！いい例題が、何処かの天の道を行き総てを司る男だ！！」

シンジ「——んなこと言うために呼んだんかつ！」↑蹴り

士「ゲフツ！」

SV龍騎『人を信じ、護る龍！仮面ライダー・龍騎サバイブ！！』

AD響鬼『遺志を受け継ぎ、人々の明日を守る戦士！装甲響鬼ツ！！』

士「み、鳩尾に当たったぜ…」

コウスケ「自業自得だ、士」

Lesson 4・自分の思いを高らかに

士「このコツは、一見Lesson 1と似ているようで…まったく違う」

ワタル「へえー」

士「はい、その“天の道を行き総てを司る男”ともはや読み方だっ被りのソウジ！」

ソウジ「ん？」

士「さあ、お前のこれまでの行動を答えろ！」

ソウジ「……ピットの家で糠味噌を作った、ウエディングケーキを作った、海賊船の掃除をした、子供リンクに尻叩きをした、敵を欺くために水上バイクを走らせた、ヨッシー達に料理を作った、シヨ

ウイチ弄った、ジャッカードに潜入するために……」

士「ストロップ！誰もそんな個人的なものは聞いていないッ！！」  
ショウイチ「つか、————弄りと公言するな貴様はああああ！！？」

H F カブト『家族を、友を守るために戦い続ける戦士、……仮面ライダーカブト・ハイパーフォーム！』

E F キバ『王として戦う、月光の戦士！……仮面ライダーキバ、エンペラーフォーム！！』

C サイド『風都を愛する風、』

J サイド『罪を裁くための切り札』

C J G X『……仮面ライダーダブル・ゴールドエクストリーム！』

シンジ「つまり、自分の象徴とも言える言葉を言えと？」

士「そうだな。第一、タクミやユウスケ、アスムもこの例に入る」

カズマ「大体分かったー、つまり、D C D 本編での士の言いたいことをぶっちゃけると」

マリオ「それ、お前らだからできるよな！？俺ら、無理だよな！」

Lesson 5・ノリに乗ったが勝ち

士「最初に言っておく。——この世界はノリがいい奴が勝つ、その証拠に……暴走大型台風ソウジ、嫉妬の邪龍王シンジ、タクミに対するベクトル大暴走のリンクがどれだけ上位に居たことか」

シンジ「そろそろ幻の左をしてやろうか」

カズマ「シンジ、無理すんな。お前右利き、左しかもバイザー側」

シンジ「手じゃなくて蹴りだけど」

カズマ「それでも駄目！チーズはサンダースに頼んで焼きチーズで

いいから!!」

ユウスケ・ワタル・翔太郎「「カズマひとつ!?!」」

Dファイズ「その心の闇、……この光で照らしてみせる!」

Dカブト「総てを見通す天道の光には!如何なる罪も抗えないッ!  
!」

P「天からの審判を下す戦士!」

M「俺、天使もオマケで参上!」

SCM電王「仮面ライダー電王・超クライマックス!」

士「後、こんなのもあつたな……」

W龍剣Ver「さあ——地獄へのカウントダウンだ!」

D翔太郎Ver「通りすがりの、探偵だ。覚えておけ!」

シンジ「通りすがりのカメラマン兼、通りすがりの仮面ライダーだ  
!」

リンク「世界を旅する、お節介勇者だ!覚えても覚えなくても……い  
いッ!」

HFカブト「人との関わり、絆、縁……それらを否定する者に、勝利  
の星は輝かない」

士「……お前達は楽しくやりすぎなんだよッ!?!つか、リンクに関し  
てはハイカブソウジが来た後のアギトバーニングに滅茶苦茶噴いた  
!」

リンク「それ関係ない!」

ショウイチ「つか、お前、……俺は全然楽しくないんだぞおお!  
?」

↑ 99話

ソウジ「バーニングをリンクや士にやられたお前が何を」

ショウイチ「……だから、……俺はバーニングをまだ制御できないん  
だッ……orz」

ワタル「ところでアスムって、響鬼紅には…」

アスム「絶賛修行中です」

ワタル「でーすよねー。僕だって、ドカバキ無理です」

シンジ（ユウスケもドラゴンのライジングとか、アメイジングマイティとか出てないし…あれ？）

カズマ（皆、まだフォーム残っている状態でディケブラ終えちゃったのか…俺も人のこと言えないけど）

ソウジ「いや、シンジはまだフォームが残っている」

シンジ「ないですよ!？」

ソウジ「ブランク体」

シンジ「…ドラグレッダー消せと？」

カズマ「落ち着いてシンジ、今のシンジだとブランクよりも先にリユウガになる!」

シヨウイチ「待て、流石にリユウガに堕ちてまでソウジを殺るな!」

士「さあ!お前ら…以上を元に、決め台詞を言ってみろ!」

（リンクとピットは割愛します）

マリオ「情熱のオーバオール!マリオ!」

ピーチ「甘いスイーツの香り！ピーチ！！」

ルイーダ「緑の日陰者…る、ルイーダ！」

クッパ「完全無敵の大魔王！クッパ様だ！！」

ドンキー「バナナパワー！ドンキーコング！！」

ディディー「ドンキーの相棒！ディディー！！」

ワリオ「お金大好き！俺だよ、ワリオだよ！！」

ヨッシー「緑のスーパードラゴン！ヨッシー！！」

ゼルダ「知恵を継承する者！ゼルダ！！」

ガノンドロフ「力に魅入られし魔王！ガノンドロフ！！」

トウーンリンク「風を操る勇気の指揮者！トウーンリンク！！」

サ姆斯「銀河のバウンティハンター！サ姆斯・アラン！！」

ポポ「ロープで繋ぐ！」

ナナ「2人の絆！」

ポポ・ナナ「アイスクライマー！！」

ロボット「失ワレシ技術ノ産物、…エインシャント！」

カービィ「何でも食べちゃう星の戦士、カービィだよ」

メタナイト「銀河に瞬く闇の一閃！メタナイト！！」

デデデ「ププランドの大王！デデデだぞい！！」

オリマー「ホコタテ運送の運送員オリマーと、…ピクミンズ！」

ピクミン達「…ぴくみん」

フォックス「雇われ遊撃隊【スターフォックス】のリーダー！フォックス・マクラウド！！」

ファルコ「元【Free As A Bard】ヘッドにして、雇われ遊撃隊【スターフォックス】の右翼！ファルコ・ランバルディ！！」

ウルフ「ならず者集団【スターウルフ】の頭！ウルフ・オドネル！」

C・ファルコン「音速を駆ける、愛の戦士！キャプテン・ファルコン！」↑律儀にピンクカラー

ピカチュウ「可愛いネズミには電撃あり！…ピカチュウ！」

ルカリオ「波導は我にあり！……波導の勇者、ルカリオ…見参！」

ポケトレ「仲間と共に、高みを目指す！ポケモントレーナー！」

プリン「歌って踊れるスマブラ界のアイドル！プリン♪」

マルス「アンリの意志を継ぐ、流麗なる剣！マルス！」

アイク「蒼空貫く、雄々しき炎！アイク！」

ネス「PKサンダー、受けてみる！ネス！」

リユカ「え、えと、…クラウスの弟！リユカ！」

ソニック「音速を超える青いハリネズミ！ソニック・ザ・ヘッジホッグ！」

スネーク「ショウタイムだ！スネーク！」

ゲームウォッチ「白黒纏めてぶっ飛ばす！平面世界の狂戦士、Mr・ゲーム&ウォッチ！」

士「——えー、以上が本編であまり出番のなかったファイター達の説明です」

全「…おいおいおい！」「」

リンク「うん、ごめん、…無個性ッ！」

ピット「土さんの講義が無駄になった瞬間だよ！」

マリオ「お前ら、ひでえ…orz」

ユウスケ「ゼルダ組はリンクの影響か、意外とまともだったなあ……」  
ゼルダ「ありがとうございます」

ワタル「でも、他は殆どの場合、ただの紹介ですよ」

アスム「……ファルコさん、一応レギュラー張ってたんですから……もう少し頑張ってください」

ファルコ「悪かったな、センスなくてorz」

士「まあ、惨劇が炸裂する中……アイスクライマーやアイク、ゲームウォッチに口ボは利口だったというべきか」

ソウジ「アイクに至っては……流石に、スピノフで個人的にライダー変身しただけあると褒めるべきか」

シヨウイチ「むしろ、恥を捨ててまでネタに走るファルコンに拍手を贈るべきか」

カズマ「ゲームヲの個性はねえ」

シンジ「個人的には、ポケトレ君のも好きなんだけどね」

マリオ「……じゃあ、どうしたらよかったんだorz」

リンク「難しいけど、個性……語る？」

マリオ「キノコ好き」

ピット「……だけですか？」

マリオ「ピーチ姫も好き」

リンク「うん、分かってる」

マリオ「……弟がいる。以上」

海東「そりゃあ、無理だ……」

タクミ「まあ、ファルコさん達みたい……本編で出番があるなら、まだ何とか……救済措置はあったけどね」

リンク「ゲームヲみたいに、強烈なギガインパクトを残したら……まだ

俺も何とかできたよ……?」

全「orz」

ピット「とりあえず念のために。リンクさん、クッパで決めゼリフ」  
リンク「——闇の星をも砕く灼熱の腕かいな！大魔王クッパ！！」

マリオ「あつ、…そっちのほうがまともだ!？」

闇の星↓ダークスター。マリオ&ルイージ3のラスボス

灼熱↓昔はクッパを灼熱のマグマに叩き落せば勝ちでした

ワタル「知ってますか。……本来なら【アイスクライマーの世界】

で、ルカリオが仲間になるはずだったんですよ」

シヨウイチ「それ以前に、【マリオの世界】でクッパを仲間にする  
予定でもあったんだぞ。本来は」

ユウスケ「後、【ワリオの世界】でワリオも同行する予定だったんだ」

ルカリオ「なっ!?!」

ワリオ「おい、どういふこった!？」

クッパ「何故予定が変わった!？」

ユウスケ「あまりにも同行者が増えると、調整が難しいから」

クッパ・ワリオ・ルカリオ「orz」

ワタル「第一、パワーバランスが偏るんですよ。ユウスケサイド  
じゃ、ユウスケに偏り気味でしたし」

ユウスケ「シヨウイチさん抜けたら、それほどでもなかったけどな  
……」

夏海「私のところは、ソウジさんが無類の強さを発揮していました」

アスム「元々リマジ最強ですから…」

士「舐めるな。こっちは、ディケイドにダブルと主人公が揃っていたにもかかわらず、……お母さんと息子とそのペットだ」

翔太郎「まあ、…シンジとカズマとサンダースは仕方ねえよな……」

ピット「でも、リンクさんがファイズに変身してからパワーバランスが一気にリンク>その他だった件について」

リンク「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

タクミ「まあ、リンクは複線強かったし…よくよく考えれば、オーズになる布陣バレバレだったし」

ユウスケ「それに伴って、タクミ君の登場頻度上がったよな…」

ワタル「……僕とアスムは、作者があまり知らないことも相まってかなり危険でしたよね」

アスム「セリフがあることが救いでした」

全「…それでもあの一家の安定ぶり異常」…

シンジ「あ？」↑もはや凶悪性の強さ

カズマ「うえ」↑シンジの保護者

ショウイチ「…誰が一家だッ!？」↑ソウジの漫才の相手

ソウジ「ははは」↑存在自体が反則

サンダース「ダッ」↑スマブラの世界における破壊者

士「まあ、とりあえず、やっとファイター全員出たところで」

ファイター達「…あれだけで!？」…

士「…【ディケイド&スマブラ!超スピノフ】……これにて!閉幕!」

リンク「それじゃあ…」

ゲームウォッチ「シーユーネクストジャッジ！」

全「——」——ちょっと待て平面コラアアアッ！？」  
「」  
「」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0123/>

---

ディケイド&スマブラ！超スピンオフ

2011年8月7日17時11分発行